

# 伊勢町遺跡

(幸町 1188-22 他地点)

—都市計画道路太田町蓬沢線外2路線街路事業に伴う発掘調査報告書—

2024

山梨県中北建設事務所  
甲府市教育委員会  
昭和測量株式会社





竪穴建物 (S14) 赤生土器出土状況 南西から



礎敷遺構 (S51) 検出状況 北から



竪穴建物 (S13・4) 完掘状況 北東から



溝状遺構 (SD9・10) 土層断面 北から

## 序

甲府盆地のほぼ中央に位置する甲府市は、北側の長野県との県境に聳える標高 2,599 m の金峰山から南側の御坂山塊までの甲府盆地を縦断し、南北約 42km、東西約 12km の細長い市域を形成しています。

調査地点は、標高 260 m 付近の荒川左岸に形成された扇状地に立地します。荒川は文字通り荒れる川であり、『甲斐国志』には「荒ノ言は暴ナリ其ノ水暴流スルヨリ起リシ名ナルベシ」と記述されます。江戸時代の絵図を見ますと、調査地点の西側の荒川沿岸に水防林のためと思われる松林も描かれ、一帯が荒川の氾濫の影響を受けやすい地域だったことがわかります。

伊勢町遺跡は、昭和 34 年、下水道工事の際に発見され、弥生時代から古墳時代にかけての土器が出土し、青銅鏡や勾玉も出土した遺跡です。

今回の調査では、長野県北部を中心に展開する弥生時代中期の土器が出土し、竪穴建物をはじめとする当該期の遺構も見つかりました。弥生時代には我々のご先祖が既に荒川の扇状地に進出し、集落を展開して長野県北部の人々とも交流をもっていた様子がうかがえます。さらに古墳時代前期の竪穴建物や溝状遺構、多くの土器も出土していて、集落は弥生時代中期から古墳時代前期にかけて大きく発展していたことが明らかとなりました。

今回の調査成果が、甲府の歴史研究のみならず、日本の歴史を解明する資料としてもご活用いただければ幸いです。

末筆となりましたが、このような貴重な遺跡発掘調査が実施できましたのも、開発事業者及び関係者のご理解、ご協力の賜物であるとともに、発掘調査及び整理作業に従事された皆様方のご努力の成果であります。ここに感謝申し上げる次第であります。

令和 6 年 3 月

甲府市教育委員会

教育長 松田昌樹

## 例言

1. 本書は、山梨県甲府市幸町1188-22他に所在する伊勢町遺跡（幸町1188-22他地点）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、都市計画道路太田町蓬沢線外2路線街路事業に伴う道路建設に伴い、山梨県中北建設事務所の費用負担により実施した。
3. 発掘調査と整理報告書作成業務は、甲府市教育委員会が調査主体となり、その指導・監督の下で昭和測量株式会社が実施した。  
[調査体制]  
調査担当 平塚洋一（甲府市教育委員会）  
泉英樹・浅川晃一（昭和測量株式会社文化財調査課）  
調査顧問 新津健（昭和測量株式会社文化財調査課研究顧問）  
発掘従事者 河原広敏・岸敏之・河野和仁・小島健治・佐野香織・  
菅尾亮介・田丸進・古原房子・若尾正朋・渡辺俊夫  
整理従事者 石坂恵理・垣内律子・尾川正美・齊藤里美・佐野香織・竹中加奈子・渡辺麗子
4. 発掘調査は令和4年11月7日から令和5年3月10日まで行った。整理報告書作成業務は令和5年7月24日から令和6年3月22日まで、昭和測量株式会社文化財調査課事務所内で行った。
5. 本書に関わる遺構写真は、泉英樹・浅川晃一が撮影した。遺物写真は泉英樹が撮影した。
6. 本書の編集は泉英樹が行った。執筆分担は以下の通りである。  
第1章第1節：平塚洋一  
第5章第1節：伊藤茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtaditze・黒沼保子、  
第2節：黒沼保子、第3節：バンダリ スダルシャン、第4節：三谷智広  
その他の執筆は泉英樹が行った。
7. 本調査における自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。
8. 発掘調査および報告書作成にあたり次の方々の御指導と御協力を賜った。深く感謝の意を表する（順不同・敬称略）。  
山梨県中北建設事務所、志村憲一・林部光・金子裕太郎（甲府市教育委員会）、原藤創平（株式会社早野組）、  
末木健（山梨県考古学協会）、熊谷晋佑・佐賀桃子（山梨県埋蔵文化財センター）、一之瀬敬一（山梨県立考古博物館）
9. 本書に関わる出土遺物および写真・記録図面類は甲府市教育委員会にて保管している。

## 凡例

1. 本書で使用した地図は、第1図：甲府市役所発行の都市計画基本図1/2,500、第2図：国土地理院発行の地形図「甲府」1/25,000を原図として、改変加筆して使用した。
2. 遺構・遺物の挿図縮尺は、各図に表示した。写真図版の縮尺は任意である。
3. 遺構平面図の方位は、各図に表示した。方位記号は方眼北を示している。
4. 遺構全体図のX・Y座標値は、世界測地系の平面直角座標系第Ⅷ系に基づく値である。単位はメートルである。
5. 遺構断面図の数値は、標高（TP）を示す。単位はメートルである。
6. 土層・遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づいた。
7. 発掘調査では以下の遺構記号を使用した。遺構番号は調査区にかかわらず種別ごとに連番で番号を付した。  
磔敷遺構：SS 竪穴建物：SI 溝状遺構：SD 土坑：SK ビット：SP 性格不明遺構：SX
8. 遺物番号は連番で付した。本書における挿図・写真図版・遺物分布図・遺物観察表および本文中の遺物番号はそれぞれ対応している。
9. 遺構平面図における一点鎖線は視乱、破線はサブトレンチ・試掘坑・推定線である。
10. 遺構挿図・遺物挿図で使用したトーンの凡例は以下の通りである。



## 本文目次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理等作業の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と順序	7
第1節 調査の方法	7
第2節 基本順序	8
第4章 調査の成果	9
第1節 竪穴建物	9
第2節 竪穴遺構	11
第3節 溝状遺構	12
第4節 土坑・ピット・不明遺構	15
第5節 遺構外出土遺物	19
第5章 自然科学分析	61
第1節 伊勢町遺跡(幸町1188-22他地点)出土試料の放射性炭素年代測定	61
第2節 伊勢町遺跡(幸町1188-22他地点)出土炭化材の樹種同定	64
第3節 伊勢町遺跡(幸町1188-22他地点)から出土した炭化種実	69
第4節 伊勢町遺跡(幸町1188-22他地点)出土の動物遺体	71
第6章 総括	72
第1節 伊勢町遺跡(幸町1188-22他地点)の竪穴遺構	72
第2節 伊勢町遺跡(幸町1188-22他地点)の遺構変遷と出土遺物	73

## 挿図目次

第 1 図	遺跡の位置・周辺の遺跡分布図	5	第 21 図	SP1-10	39
第 2 図	遺構全体図	20	第 22 図	SP11-17・19-21・29	40
第 3 図	A 地区遺構全体図・基本層序図	21	第 23 図	遺構出土遺物 (1)	41
第 4 図	B 地区遺構全体図・基本層序図	22	第 24 図	遺構出土遺物 (2)	42
第 5 図	C 地区遺構全体図・基本層序図	23	第 25 図	遺構出土遺物 (3)	43
第 6 図	SI1・2	24	第 26 図	遺構出土遺物 (4)	44
第 7 図	SI3(1)	25	第 27 図	遺構出土遺物 (5)	45
第 8 図	SI3(2)	26	第 28 図	遺構出土遺物 (6)	46
第 9 図	SI3(3)	27	第 29 図	遺構出土遺物 (7)	47
第 10 図	SI4	28	第 30 図	遺構出土遺物 (8)	48
第 11 図	SS1・SD6	29	第 31 図	遺構出土遺物 (9)	49
第 12 図	SD1・SK5(1)	30	第 32 図	遺構出土遺物 (10)	50
第 13 図	SD1・SK5(2)	31	第 33 図	遺構出土遺物 (11)	51
第 14 図	SD2-5	32	第 34 図	遺構外出土遺物 (1)	52
第 15 図	SD9・10・11(1)	33	第 35 図	遺構外出土遺物 (2)	53
第 16 図	SD9・10・11(2)	34	第 36 図	遺構外出土遺物 (3)	54
第 17 図	SK1・2・4・5・6	35	第 37 図	長野県中野市柳沢遺跡の礎床木棺墓群	72
第 18 図	SK7・SX2	36	第 38 図	伊勢町遺跡出土の弥生時代の遺物	75
第 19 図	SK8-12	37	第 39 図	伊勢町遺跡出土の古墳時代の遺物	76
第 20 図	SK14・15・18・20・29・30	38			

## 表目次

第 1 表	周辺の遺跡	6	第 4 表	遺物観察表 (土器・土製品)	55
第 2 表	土坑一覧表	18	第 5 表	遺物観察表 (石器・石製品)	60
第 3 表	ピット一覧表	18			

## 写真図版目次

巻頭図版 1	竪穴建物 (SI4) 弥生土器出土状況 礎敷遺構 (SS1) 検出状況	図版 13	SK10・13・14・16・17・18・20
巻頭図版 2	竪穴建物 (SI3・4) 完掘状況 溝状遺構 (SD9・10) 土層断面	図版 14	SP1・2・4・5・8・10・23・25
図版 1	伊勢町遺跡 (幸町 1188-22 他地点) 全体モザイク写真	図版 15	SI2・3 出土遺物
図版 2	A 地区 遺構検出状況・完掘状況	図版 16	SI3 出土遺物
図版 3	B・C 地区 遺構検出状況・完掘状況	図版 17	SI4・SD1 出土遺物 (1)
図版 4	SI1・2	図版 18	SD1 出土遺物 (2)
図版 5	SI3	図版 19	SD1 出土遺物 (3)
図版 6	SI4	図版 20	SD1 出土遺物 (4)、SD3・4・6 出土遺物
図版 7	SS1・SD6(1)	図版 21	SD8・9 出土遺物
図版 8	SS1・SD6(2)	図版 22	SD9・10 上面出土遺物 (1)
図版 9	SD1	図版 23	SD9・10 上面出土遺物 (2)
図版 10	SD2-5・7・8・11	図版 24	SK2・6・7・8・9・10・13・17・18・20 出土遺物
図版 11	SD9・10	図版 25	SP4・5・10・20 出土遺物、 SX2 出土遺物、遺構外出土遺物 (1)
図版 12	SK1・6・7・9・10、SX2	図版 26	遺構外出土遺物 (2)
		図版 27	遺構外出土遺物 (3)



# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯（第1図）

伊勢町遺跡は、昭和34年、下水道工事の際に発見され、弥生時代から古墳時代にかけての土器が出土し、青銅鏡や勾玉も出土した遺跡である。

山梨県中北建設事務所により都市計画道路「太田町蓬沢線外2路線」街路事業が計画され、平成26年10月3日付け中北建第11516号により文化財保護法第94条に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」の提出を受け、甲府市教育委員会が山梨県教育委員会に進達した。山梨県教育委員会より平成26年10月17日付け教学文第1989号で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知を甲府市教育委員会が受理し、山梨県中北建設事務所へ通知した。

中北建設事務所との協議に基づき、令和2年度及び同3年度に試掘確認調査を実施した結果、古墳時代の土器が広範囲にわたって出土した。山梨県中北建設事務所協議の上、本発掘調査が必要な範囲を設定した。県道甲府中央右左口線（通称伊勢通り）沿いに展開する埋蔵文化財については、令和2年度に食糧工場遺跡として発掘調査を実施し、県道甲府笛吹線（通称青葉通り）沿いに展開する埋蔵文化財のうち、道路南側については令和4年度に伊勢町遺跡として発掘調査を実施することとなった。

甲府市教育委員会が、山梨県観光文化部文化振興・文化財課の指導に基づき、令和4年12月16日、文化財保護法第99条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」の通知を山梨県に提出した。

## 第2節 発掘作業の経過（第1・2図）

発掘調査は令和4年11月7日から令和5年3月10日まで行った。

調査地点は、甲府市街の南部を東西方向に走る「青葉通り」に面しており、周辺には民家や商店が密集している。調査区は現状の市街の区画に合わせて三分割し、A・B・Cの地区名を付した。また宅地への進入路や排土ヤードを確保するため反転掘削調査とした。

### 調査日誌抄録

令和4年

- |          |  |
|----------|--|
| 11月7日    | A地区舗装撤去・砕石取り搬出。調査区仮囲い。                                 |
| 11月9・10日 | A地区西半部表土掘削。  |
| 11月11日   | 仮設ハウス・倉庫・トイレ設置。  |
| 11月14日   | 包含層掘削開始。   |
| 11月17日   | 溝状遺構SD1と炭化物範囲・硬化範囲のS11などを検出。<br>古墳前期の遺物が出土。遺構検出状況写真撮影。 |
| 11月22日   | 第1遺構検出面完掘状況写真撮影。SD1は古墳前期の遺物の他、弥生土器も混入。                 |
| 11月24日   | 第2遺構検出面への掘り下げを開始。県埋蔵文化財センター熊谷氏来訪。                      |
| 11月25日   | 竪穴建物S12と複数のピットを検出。                                     |
| 12月1日    | 第2遺構検出面完掘状況写真撮影。複数のピットで弥生土器出土。A地区西半部調査終了。              |
| 12月2日    | A地区西半部埋め戻し及び東半部の鉄筋コンクリートの削り工と搬出作業。                     |
| 12月5日    | A地区東半部表土掘削。  |
| 12月6日    | 包含層掘削および遺構検出。溝状遺構SD1の延伸部分を検出。                          |
| 12月9日    | SD1上層の遺物出土状況を写真撮影。                                     |
| 12月14日   | 第1遺構検出面完掘状況写真撮影。                                       |
| 12月15日   | 第2遺構検出面への掘り下げを開始。                                      |
| 12月16日   | 第2遺構検出面の遺構検出状況を写真撮影。弥生土器が出土。                           |

- 12月20日 第2遺構検出面完掘状況写真撮影。A地区調査終了。
- 12月21～23日 A地区埋め戻し。原状復旧作業。
- 令和5年
- 1月6日 調査区設定作業・近隣挨拶。
- 1月10・11日 B地区東半部表土掘削。
- 1月12日 包含層掘削および遺構検出。東半部の大部分は宅地造成による攪乱。
- 1月13日 第1遺構検出面で溝状遺構と土坑を確認。完掘状況写真撮影。  
第2遺構検出面までの掘り下げを開始。
- 1月14日 第2遺構検出面で溝状遺構2条と土坑1基を確認。完掘状況写真撮影。  
B地区東半部の調査を終了。
- 1月18日 B地区西半部包含層掘削。
- 1月23日 第1遺構検出面の遺構検出状況を写真撮影。  
古墳前期の台付甕・器台・高環などの遺物集中地点を竪穴建物と想定して精査。
- 1月27日 第1遺構検出面完掘状況写真撮影。  
竪穴建物S I 3の掘方確認と第2遺構検出面までの掘り下げ開始。
- 2月1日 第2遺構検出面の遺構検出状況を写真撮影。  
炭化物集積範囲の中に逆位に掘えた弥生土器検出。弥生の竪穴建物と想定して精査。
- 2月3日 竪穴建物S I 3掘方確認。竪穴建物S I 4の炭化物集積範囲と床面検出。  
山梨県埋蔵文化財センター佐賀氏来訪。
- 2月6日 第2遺構検出面完掘状況写真撮影。B地区調査終了。
- 2月7・8日 B地区埋め戻し。C地区表土掘削。
- 2月9日 C地区包含層掘削。
- 2月14日 遺構検出状況写真撮影。東端部で半円状に巡る溝状遺構、中央部で遺物集中地点を検出。
- 2月15日 東端部攪乱掘削。攪乱下で礫敷遺構を検出。山梨県埋蔵文化財センター熊谷氏来訪。
- 2月16日 調査区西半部と土器集中地点の精査及び遺構掘削。  
山梨県考古学協会末木氏、山梨県立考古博物館一之瀬氏来訪。
- 2月17日 西半部の第1遺構検出面完掘状況を写真撮影。
- 2月21日 礫敷遺構S S 1の検出状況を写真撮影。調査区西半部を第2遺構検出面へ掘り下げ。
- 2月23日 礫敷遺構S S 1完掘。除去した礫はすべて土のう袋に入れて採取。
- 2月24日 第2遺構検出面完掘状況写真撮影。
- 2月27日 サブトレンチで確認した2条の溝状遺構の掘削を開始。
- 3月1日 2条の溝状遺構S D 9・10の掘削。古墳前期の遺物出土。  
上面で検出の土器集中地点はS D 9・10に帰属か。  
S D 10の掘方は断面形がV字状。
- 3月3日 最終完掘状況写真撮影。
- 3月7日 下層確認。調査終了。
- 3月8・9日 C地区埋め戻し・原状復旧作業。
- 3月10日 仮設ハウス・倉庫・トイレ撤去。現場撤収。

### 第3節 整理等作業の経過

整理・報告書作成業務は、令和5年7月24日から令和6年3月22日の間、山梨県笛吹市石和町に所在する昭和測量株式会社文化財調査課の事務所内にて行った。

遺物の水洗・注記作業までは前年度の現場調査業務時に終了しており、整理作業は遺物の接合・復元作業から開始した。実測遺物を選定後、実測図の作成を開始した。実測遺物の選定にあたっては甲府市教育委員会の確認を受けた。遺物実測図の作成とデジタルトレース作業は1月31日まで行った。遺物写真は1月29日から2月7日まで撮影し、その後、遺物挿図と写真図版、観察表を作成した。出土遺物の記録作業と並行して、現場の調査写真や遺構図についても順次整理作業を進めた。現場で作成した遺構実測図のデジタルトレースは9月13日までに終了し、11月24日まで遺構挿図と写真図版の作成を行った。また現場で採取した土壌サンプルの水洗・選別と抽出作業は10月12日から11月1日まで行い、試料の自然科学分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。分析報告は2月13日に受け取った。これらの成果と自然科学分析の結果をまとめ、報告書の本文執筆、挿図や図版などの編集・校正作業を経て、令和6年3月22日に報告書を刊行した。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境（第1図）

伊勢町遺跡の所在する甲府市域は、南北41.5km、東西12.4kmと南北に細長い形状である。その地形は荒川の上流域である険しい北部山地、平坦で市街地の広がる甲府盆地内の中央低地、さらに南部の御坂山地の大きく三つに分けられる。標高は北部山地の金峰山の2,599mが最も高く、中央低地南辺の大津町付近が250mと最も低い。その標高差は2,349mに及ぶ。伊勢町遺跡は甲府盆地内の中央低地に立地し、現況地盤は標高260.5mを測る。甲府盆地を南流する荒川の左岸に位置しており、調査区の西約500mに荒川、東約2kmには濁川が南流する。国土地理院の地形分類は扇状地で、荒川扇状地に立地する遺跡である。古くから荒川による水害の影響を受けやすい地域で、伊勢町遺跡の西側に位置する遠光寺付近では中近世には「川除」と呼ばれる堤防が築かれた。絵図や地図にも描かれて記録され、大正時代の『実測甲府市街全図』にもその状況が図化されている。また、現地には川除の痕跡とみられる微高地が今も残る。

現在の遺跡周辺は、調査区の北200mに動物園が付属する遊亀公園があり、市民の憩いの場となっている。他、北東500mには甲府市総合市民会館があり複合的な文化施設として利用されている。西50mには甲府市街を南北に走る遊亀通り、調査区に沿って青葉通り（太田町逢沢線）が東西方向に走り、交通量も多い。南と東に向けて緩やかに傾斜する日当たりの良い緩斜面で、民家や商店が集中する市街地である。

### 第2節 歴史的環境（第1図・第1表）

#### 縄文時代

当遺跡周辺は盆地内の低地に立地し、現在は市街地化していることもあって、縄文時代を主体とする遺跡の発見が少ない地域である。上石田遺跡(114)は甲府盆地の低地という立地で初めて報告された縄文集落で、竪穴建物2軒、石囲い土坑1基などを検出している。主に中期後半の遺物が出土した。他に宝町遺跡や朝気遺跡(121)でも縄文時代の遺構や遺物が見つかっており、盆地内の低地にも限定的とみられるが集落の進出があったことを示している。

#### 弥生時代

弥生時代の当遺跡周辺でも発見されている遺跡は多くはないが、食料工場遺跡(186)や幸町A遺跡(190)で弥生土器が出土している。これらの遺跡と当伊勢町遺跡は近接しており、個別の遺跡名が付与されている

が、同一の遺跡と考えることもできる。幸町遺跡（※当遺跡は現在の幸町と太田町にまたがって所在するが伊勢町遺跡として登録されており、今回の調査区とは別地点）では、昭和54年の土木工事中に遺物が確認された。土木工事中の偶然の発見であったため、出土状況は不明であるがその遺物は採集されている。遺物は、頸部に縄文で地文を施し、その上に弧状沈線や、体部に羽状の櫛歯文を施した甕などである。器面の櫛歯文は長野北部の土器の系譜を引くものとみられ、弥生時代中期後半の資料である。県内では、弥生文化受容期の遺跡がハケ岳山麓地域の標高700～800mの尾根上に分布するのに対し、中期後半では幸町遺跡をはじめとして沖積地に立地する事例が報告されており、弥生文化の定着に伴う水田開発などの土地利用の変化を考える上で重要である。また、当伊勢町遺跡も昭和34年の下水道工事の際に発見された遺跡である。詳細な出土状況は不明であるが地表下2.5m前後の包含層から弥生時代末から古墳時代中期にかけての土器とともに珠文鏡、小型丸底甕の中に入った滑石製勾玉なども出土している。出土位置は今回の調査区の西側に近接する地点とみられる。さらに、当遺跡の東2.5kmの氾濫平野上に位置する塚越遺跡（214）では、2021年度に本調査が行われ弥生時代中期から後期の土器が出土した。硬玉製の勾玉や黒曜石の石核・剥片・チップが出土した他、土壌試料からオオムギの炭化種子を採取している。オオムギと同位置で採取したイネの炭化種子の放射性炭素年代測定では弥生時代中期の結果が出ており、当時の甲府盆地で稲作とともにオオムギ栽培が行われていた可能性が報告されている。

#### 古墳時代

弥生時代後期から古墳時代以降では遺跡の分布が増加する。外河原チクヤ遺跡（216）では2001年の本調査で、盆地内の低地では初めて古墳時代初期の方形周溝墓が1基確認された。青沼遺跡（120）では、古墳時代後期から平安時代の竪穴建物や溝状遺構などが見つかっている。青沼遺跡の東に隣接する朝気遺跡（121）は甲府市立東小学校付近を中心とした広い範囲を遺跡範囲としており、過去、数地点で数次にわたる調査が実施されている。縄文時代中期から奈良・平安時代に至るまで幅広い時期の遺物が出土しており、古墳時代では竪穴建物の他、方形周溝墓なども見つかっている。朝気遺跡の南東側に近接する十丁遺跡（195）でも竪穴建物10軒と方形周溝墓とみられる溝状遺構などが見つかっている。遺物は古墳時代前期の土器を中心として、田下駄あるいは大足とみられる木製品なども出土している。

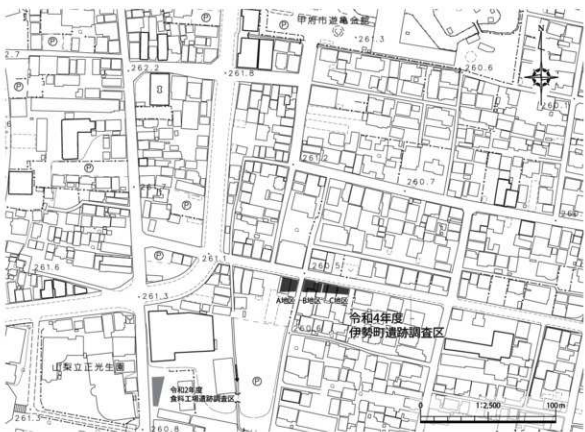
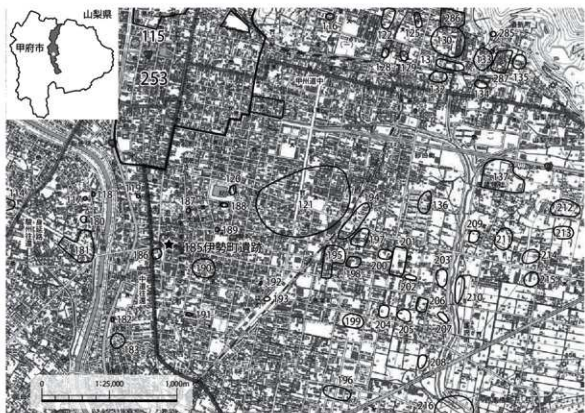
古墳は、甲府盆地北縁の湯村山周辺地域や八人山の山麓部に点在する。また大蔵経寺山の南西斜面と八人山の南東斜面に挟まれた斜面上には積石塚古墳が多数確認されており、積石塚古墳群としては国内でも有数の規模である。盆地の低地に立地する当遺跡周辺では古墳は確認されていない。

#### 古代

奈良・平安時代の当遺跡周辺は、『和名類聚抄』にみえる巨麻郡9郷のうち青沼郷と推定される地域である。正倉院宝物の太孤児面袋白縮裏には「甲斐国巨麻郡青沼郷物部高嶋調繩壺匹」の墨書銘がある。巨麻郡青沼郷の物部高嶋が納めた調の布が、東大寺大仏開眼供養の際に奉納された舞楽の伎楽面（太孤児面）を収納する袋に使用されたものである。巨麻郡の初見史料であるとともに「青沼郷」も天平勝宝4年（752）の大仏開眼供養以前から存在していたことが確認できる。現在の青沼が遺跡地と考えられ、前述の青沼遺跡や朝気遺跡一帯が青沼郷の一角を占めていたとみられる。特に朝気遺跡は青沼郷の中心地とも推定されており、第4・5次調査では、弥生時代末の合わせ口甕棺、古墳前期から後期の大溝、古墳時代後期から平安時代の竪穴建物・シガラミ状遺構、平安時代の伸展葬人骨が見つかった。大溝からは緑陶陶器、石帯巡方の他、人形・田舟・機織り機の部材といった木製品も出土している。

#### 中世

中世では秋山氏館跡（181）で、土坑墓23基、茶毘状遺構2基、建物跡、井戸跡、区画溝が見つかった。中世には幕城で、近世に至って秋山氏の屋敷となったと推定されている。秋山氏は中世から続く土豪で、江戸後期には村役人を務めている。その他にも板垣氏館跡（286）など甲斐源氏やその支流に関係したものの存在が知られるが、明確な遺構をとどめていないものが多い。また、後に甲府城が築城される一条小山には、



第1図 遺跡の位置・周辺の遺跡分布図

平安時代末に武田信義の嫡男である一条忠頼が居館を置いた。忠頼の死後、その地に忠頼の弔いのため夫人によって尼寺が建立され、時宗寺院に改められて一蓮寺となった。その後、一蓮寺は武田信虎の一条小山への誓の普請の際に山麓に移され、さらに甲府城の築城の際に太田町の現在の場所（当遺跡の北 400m）に移転した。

## 近世・近代

武田氏滅亡後の近世の甲府には、一条小山の地に総石垣の平山城として甲府城（115）が築かれた。甲府城下町遺跡（253）は甲府城の周囲に、内堀・二の堀・三の堀と、三重の堀を巡らせた城下町である。二の堀の内側は武家屋敷地、その外側は町人地とされた。町人地は城の北側と南東側に整備された。城の北側の町人地は上府中（古府中）と総称された。城の南東側の町人地は、新しく建設されたもので、下府中（新府中）と総称された。南北 4 条、東西 6 条の街路が整備され、碁盤目状に 23 町に区画された。当遺跡の北 850m には城下町の三の堀が現在も残る。

明治 6 年（1873）に甲府城は廃城となった。明治 36 年（1903）には中央線の開通と甲府駅の設置に伴って、屋形曲輪、清水曲輪が解体された。これと同時に甲府城下町は南北に分断された。城下町は次第に市街地へと姿を変えていき、昭和 30 年代まで堀の埋め立てや石垣の解体が行われた。

遺跡番号	遺跡名	時代	種別
114	上石田遺跡	縄文	集落跡
115	甲府城跡	城館跡	近世
116	御崎田遺跡	平安	散布地
117	大北河原遺跡	平安	散布地
118	久保北河原遺跡	平安	散布地
119	千松院遺跡	中世～	散布地
120	青沼遺跡	古墳	集落跡
121	朝気遺跡	古墳	集落跡
122	鎌吉の木遺跡	近世	散布地
125	上郷遺跡	平安～	散布地
128	東光寺遺跡	平安～	散布地
129	宮の前遺跡	縄文	散布地
130	本郷遺跡	縄文・古墳	散布地
131	本郷 B 遺跡	平安～	散布地
132	本郷 C 遺跡	古墳～中世	散布地
133	酒折縄文遺跡	縄文	散布地
134	内林遺跡	近世	散布地
135	酒折遺跡	近世	散布地
136	中坪遺跡	古墳	散布地
137	大橋遺跡	中世	散布地
180	宮北遺跡	縄文・平安	散布地
181	秋山氏館跡	中世	城館跡
182	木俣遺跡	近世	散布地
183	般若院跡	中世	社寺跡
185	伊勢町遺跡	古墳	散布地
186	食糧工場遺跡	縄文・弥生	散布地
187	太田町遺跡	古墳～	散布地
188	青沼三丁目遺跡	中世～	散布地
189	瀬田一丁目遺跡	古墳	散布地
190	幸町 A 遺跡	弥生	散布地

遺跡番号	遺跡名	時代	種別
191	幸町 B 遺跡	古墳	古墳
192	南口町 A 遺跡	平安	散布地
193	南口町 B 遺跡	平安	散布地
194	里吉天神遺跡	古墳～平安	散布地
195	十丁遺跡	古墳	散布地
196	二又遺跡	古墳	散布地
197	家之前遺跡	平安	散布地
198	十丁 B 遺跡	古墳	散布地
199	青葉町遺跡	平安	散布地
200	字前 A 遺跡	古墳	散布地
201	字前 B 遺跡	古墳	散布地
202	字前 C 遺跡	古墳	散布地
203	村之内遺跡	古墳～平安	散布地
204	北桜遺跡	平安	散布地
205	野村遺跡	古墳～平安	散布地
206	油田遺跡	平安	散布地
207	厩村遺跡	近世	散布地
208	淵之上遺跡	古墳	散布地
209	落合氏館跡	中世	城館跡
210	北堀遺跡	古墳～平安	散布地
211	深田遺跡	古墳・中世	散布地
212	五本杉遺跡	不明	散布地
213	鎌作遺跡	平安・中世	散布地
214	塚越遺跡	弥生～古墳	散布地
215	熊社遺跡	弥生～古墳	散布地
216	外河原デクヤ遺跡	古墳・平安・中世	集落跡
253	甲府城下町遺跡	近世	城下町
285	不老園古墳	古墳	古墳
286	板垣氏屋敷	中世	城館跡
287	酒依氏屋敷	中世	城館跡

第 1 表 周辺の遺跡

## 第3章 調査の方法と層序

### 第1節 調査の方法（第1・2図）

調査区は、甲府市街の南部を東西方向に走る「青葉通り」に面しており、周辺には民家や商店が集中している。調査区は現状の市街の区画に合わせて三分割し、A・B・Cの地区名を付した。また宅地への進入路や排土ヤードを確保するため反転掘削調査とし、調査が終了した地区から順次埋め戻して原状復旧を行った後に次の地区の調査に着手する形で進めた。水道管や汚水管など使用中とみられる埋設構造物の敷設がある範囲は、甲府市教育委員会の確認の上、掘削調査の対象外とした。表土掘削は、0.25m相当のバックホウを使用した。また、A地区西西部とB地区の表土掘削土はダンプ車を用いて場外に搬出・仮置きし、調査終了後に再びダンプ車で搬入して埋め戻した。また、A地区中央部では表土下に旧構築物の鉄筋コンクリートの基礎が残置されていたが、その下に遺構面が遺存していることが確認できたため、コンクリートプレーカーを用いた研り工を行って除去した。コンクリートガラは場外へ搬出した。その他の掘削土は、すべて場内に仮置いて、反転掘削しながら調査を進めた。仮置いた掘削土はブルーシートで覆って養生し、近隣への土砂の飛散防止を図った。重機使用の際は交通誘導員を配置した。調査区はネットフェンスで仮囲いし、安全コーンやバー、夜間警告灯を設置して開口部を明示し安全確保に努めた。

調査前の現況は、市街地の建物撤去後の更地に碎石が敷き均された状況である。発掘調査ではその碎石層や戦災焼土層、中近世以降とみられる水田層をバックホウによる表土掘削の対象とした。それより下位については各調査区の壁面沿いにサブトレンチを設定し土層確認しながら、剣スコップを用いて人力で包含層掘削を行い、各地区2～3面で遺構検出を試みながら、最終的に地山上面まで掘り下げて遺構を確認した。遺構検出と遺構掘削は全て人力で行い、遺構検出はジョレンや三角ホーを用いた。遺構掘削は移植ゴテを用い、溝状遺構など掘削深度が深いものには剣スコップも併用した。また、一部の攪乱掘削にはバックホウを使用した。

遺構番号は現場調査時に調査区に関わらず種別に連番で番号を付した。番号は現場調査で使用したものを報告書まで用いた。遺構測量は、土層断面は手描き実測と写真測量を併用した。平面図はトータルステーション（TOPCON SOKIA CX105）による測量と写真測量による図化を併用した。測量図化システムとしてはCUBIC社「遺構くん」を用いた。写真測量は、写真撮影にミラーレス一眼（SONY α 5100）、写真測量ソフトにAgisoft社「PhotoScan Professional」を用いた。遺構写真撮影にはデジタル一眼レフカメラ（NikonD7100）を使用し、遺構検出状況や土層断面、遺物出土状況、完掘状況の他、調査風景などを記録した。これに加えて、各調査区の完掘状況は、ボール写真撮影を行い、必要に応じて「PhotoScanProfessional」を用いてオルソモザイク写真を作成した。遺物は原則的にトータルステーションを使用して位置を記録して取り上げた。小片については、遺構出土のものは遺構一括とし、遺構外出土遺物については調査区ごとに位置を記録し取り上げた。土壌サンプルは竪穴建物の灰や焼土・炭化物範囲、土坑、溝状遺構の埋土から採取し、その位置をトータルステーションや遺構断面図に記録した。発掘調査を進める過程では、各調査区の表土掘削時、遺構検出時、完掘時など各段階で甲府市教育委員会の確認を受けた。

整理作業は遺物の水洗・注記から開始し、接合・復元と進めた。注記は注記マシンで記し、遺跡名の表記は「イセ」とした。接合にはコニシ社「木工用ボンド」、復元の石膏入れには第一合成社「クレイテックス」を使用した。実測遺物の選定にあたっては甲府市教育委員会の確認を受けた。遺物の写真撮影はデジタル一眼レフカメラ（NikonD7500）を用いた。遺物実測は手描きで行った。手描きの遺構実測図・遺物実測図のデジタルトレース、写真データの補正・編集、挿入・写真図版作成、報告書編集作業には adobe 社製「illustratorCC」「PhotoshopCC」「InDesignCC」をそれぞれ使用した。土壌サンプルの水洗・選別と試料の抽出は、昭和測量で行い、その分析は株式会社バレオ・ラボが行った。

## 第2節 基本層序

基本層序は調査区の壁面を精査して記録した。攪乱などを除き、一定の範囲で連続する土層をとらえて基本層序とした。現表土や水田層をⅠ層、遺物包含層をⅡ・Ⅲ層、地山はⅣ層とし、必要に応じて小文字のアルファベットを付与して細分した。

Ⅰ層は、現表土の碎石の造成土や戦災瓦礫層、水田層などである。層位の下面に酸化鉄分の沈着のある層を水田層と捉えており、各調査区で2～3面観察している。詳細時期は不明だが調査区周辺が市街地化する以前の堆積層と考えている。Ⅱ層が古墳時代から古代の遺物包含層と想定されることから、Ⅰ層の中に中世から近世の堆積層が含まれた可能性はあるが、重機による表土掘削時の確認では、ほぼ無遺物であり遺構も確認できなかった。

Ⅱ層は遺物包含層である。黒褐色砂質シルトを基調とする土層で、古墳時代から古代の遺物包含層とした。B地区で古墳時代後期や古代の遺物を少量ではあるが確認している。各地区2～3層に分層し、掘り下げながら遺構検出を試みたが、明確な遺構プランを確認できず部分的な検出にとどまったため、掘り下げてⅢ層上面を第1遺構検出面とした。

Ⅲ層も遺物包含層である。黒褐色砂質シルトやオリブ黒色砂質シルトを基調とする。弥生から古墳時代の遺物包含層とした。Ⅱ層下で弥生土器が出土する層を検出し、弥生時代の遺物包含層を想定してⅢ層を設定したが、結果的には古墳時代前期の遺物も包含する層であった。

Ⅳ層は地山の自然堆積層で、黄褐色シルトや灰オリブ色粘土質シルトの硬く締まった土層である。Ⅳ層上面を第2遺構検出面（最終的な遺構検出面）とした。最終的な遺構検出面としたⅣ層上面の標高は、259.1～259.4mを測る。以下、調査区ごとに層序と遺構検出面の概要を記述する。

### A地区（第3図）

西側の調査区である。Ⅰ層は現表土の碎石層とほぼ水平堆積の水田層である。Ⅱ層は、古墳時代の遺物を包含する。Ⅱ層を剥いだⅢ層上面で遺構検出（第1遺構検出面）を行い、竪穴建物SⅠⅠや溝状遺構SDⅠなどを確認した。Ⅲ層は5層に細分したが、広く堆積していたのはⅢd層とⅢe層である。当初、遺物包含層と認識できていなかったが、サブレンチや第1遺構検出面の遺構掘削によって、弥生土器を包含する下層を確認した。最終的にⅣ層の黄褐色シルトまで掘り下げて、SKⅠ・2・9・10やSXⅡなどを検出した。

### B地区（第4図）

中央に位置する調査区で、道路を隔てた6m西にA地区がある。C地区は反転調査の都合で地区を分けたと同じ街区内の調査区である。なお、B・C地区の境界をまたいだ約8mの範囲は、現地盤下2.5mまで掘り下げて確認したが旧建物の基礎で攪乱されており、Ⅳ層上面の標高と比較して、その深度以下に遺構は遺存しないと判断した。Ⅰ層は現表土の碎石層と水田層である。Ⅱ層ではⅡa層が古墳時代後期から古代の遺物包含層と考えた。Ⅱa層中で須恵器環や土師器甕の把手が出土したが、当該期の遺構は確認できなかった。Ⅱb層は黒褐色砂質シルトを基調とする古墳時代の遺物包含層である。Ⅱb層中に多くの遺物が出土し、Ⅲ層上面まで掘り下げてSⅠ3を検出した（第1遺構検出面）が、遺構の立ち上がりを確認できず、最終的にはⅣ層まで掘り下げて平面形を検出した。SⅠ4はⅣ層まで掘り下げて検出した。

### C地区（第5図）

東側の調査区である。Ⅰ層は現表土の碎石層である。調査区の東半部では碎石層の下に石炭ガラ の廃棄土坑があり、現地盤下1mまで攪乱されていた。Ⅱ層は古墳時代の遺物包含層で、それを剥いだⅢ層上面で遺構検出（第1遺構検出面）を試み、SD9・10を検出した。SD9・10の上面には灰黄色砂質シルトなど白みがあった埋土が堆積しており、平面的には視認しづらく、サブレンチの掘削で掘方の断面形を確認した。最終的にⅣ層上面まで掘り下げて、SSⅠやSD6・8などを検出したが、SSⅠやSD6はその直上まで石炭ガラ の廃棄土坑で攪乱されており、包含層はほとんど遺存していなかった。



## 第4章 調査の成果

### 第1節 竪穴建物

今回の調査区全体で計4軒の竪穴建物を検出した。そのうち、3軒は古墳時代前期、1軒は弥生時代の竪穴建物である。東端部に位置するC地区では竪穴建物は確認できなかった。

#### S I 1 (第6図、図版4)

[位置・重複] A地区西側に位置する。切り合いではS D 1・S P 14より新しい。

[形状・規模] 調査区外へ延びており全容は不明である。検出部分から方形に近い形状と推定する。規模は検出部分で長軸2.7m、短軸1.4mで、深さは15cmを測る。推定の主軸方向はN-60°-Wである。

[検出状況・埋土] 北東側は現代の建物により攪乱されていた。壁面の立ち上がりは検出できなかったが、炭化物の集積範囲とその直下で硬化面を検出し、竪穴建物の床面と想定して調査を進めた。平面形は硬化面の範囲とサブレンチの土層確認から推定した。S D 1と重複しており、S D 1に切られる遺構と考え、掘削調査を進めていたが、床面とみられる硬化面を断ち割って掘方確認したところ、硬化面下でS D 1の埋土を検出した。炉や周壁溝は確認できなかった。床面上でS P 1・2を検出している。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、硬く締まった床面上に炭化物が薄く堆積する。掘方にはぶい黄褐色砂質シルトや褐色粘土質シルトが基調となる。

[出土遺物] 土師器の台付甕などが数点出土したが、小片で図示できない。床面で採取した土壌から抽出した炭化材を年代測定したところ、239-265cal AD (20.45%)、272-351cal AD (74.61%)、358-360cal AD (0.39%)の暦年代範囲を示した(第5章第1節)。同じ土壌試料から採取した炭化種子を同定したところ、イネであった(第5章第3節)。

[時期] 重複関係と年代測定結果から古墳時代前期の竪穴建物である。

#### S I 2 (第6・23図、図版4・15)

[位置・重複] A地区南西部に位置する。S K 2・3、S P 17と重複し、切り合いではもっとも新しい。

[形状・規模] 調査区外へ延びており、全容は不明だが、北東側のコーナー部を検出しており、方形と推定する。規模は検出部分では長軸3.6m、短軸2.0m、検出面からの深さ35cmを測る。推定の主軸方向はN-40°-Wである。

[検出状況・埋土] 北東側のコーナー部を検出したが、大部分は調査区外であった。南西側は試掘調査時にトレンチ調査されており、その部分は調査区を拡張して掘り直した。検出時点での平面形は明瞭で壁面や硬く締まった床面も検出できたが、炉の痕跡や周壁溝、柱穴は確認できなかった。埋土は灰色砂質シルトを基調とし、粒状の炭化物を含む。硬く締まった床面下の掘方にはオリブ黒色砂質シルトに灰色シルトのブロックを含む土が堆積する。

[出土遺物] 土師器の台付甕や壺、高坏などが出土したが、小片が多く図示した遺物は2点である。それぞれ土師器で、1はS字状口縁の台付甕、2は有段口縁の壺である。

[時期] 出土遺物から古墳時代前期である。

#### S I 3 (第7・8・9・23・24図、図版5・15・16)

[位置・重複] B地区西側に位置する。切り合いではS I 4、S D 5より新しく、S K 13に先行する。

[形状・規模] 北西側が調査区外に延びるが、2ヶ所のコーナー部を検出しており、形状は方形を呈す。規模は検出部分では長軸5.5m、短軸4.9m、深さ50cmを測る。主軸方向はN-30°-Wである。

[検出状況・埋土] Ⅲ層上面で検出した。遺物の集中範囲や炭化物の集積を検出したが、竪穴建物としての平面形は不明瞭であった。サブレンチを設定して貼床の硬化面を検出し、そこから壁面を検出した。最終的にはⅣ層上面まで掘り下げ、さらに掘方確認を行って平面形を確認した。床面では貼床の硬化面と、炉とみられる炭化物と焼土の集積範囲を2ヶ所検出した。周壁溝は確認できなかった。掘方確認で、S K

16・17とS P 23～28を検出したが、柱痕等は確認できなかった。また、掘方確認の過程と土層断面で、上面の貼床面とは別の硬化面を検出しており、建て替えが行われた可能性がある。完掘した掘方は、中央が基壇状となり、周りを溝状の掘り込みが巡る形状であった。埋土は、最上層に黒褐色砂質シルトが厚層25cmで堆積する。その下に黒褐色砂質シルトと黄灰色シルトが薄く互層状に堆積する版築状の貼床を検出した。さらに1層挟んで、黒褐色砂質シルトを基調とする硬化面を検出した。その下は掘方で、黄灰色砂質シルトを基調とし、灰オリーブ色粘土質シルトをブロック状に含む土が堆積する。

[遺物出土状況] 貼床やがとみられる焼土を検出した床面よりもやや高い、竪穴埋土の上面でまとまった量の土師器が出土した。器種は台付甕・壺・高環・器台と様々で、特に器台が目立つ。出土位置が集中しており、竪穴の埋設過程にまとめて投棄されたものとみている。床面や掘方の遺物もそれぞれ層位を記録して取り上げたが、量としては上面の遺物が多い。

[出土遺物] 出土遺物のうち27点を図示した。3は弥生土器、4～29は土師器である。3は弥生土器の壺の体部で、縄文の地文に波状沈線文を施すものである。4～9は台付甕である。4・5・6はS字状口縁で、4と6にはタテハケとヨコハケを施す。7と8は口縁部が長い拡張口縁である。9は脚台部で、端部を内側へ折り返す。10・11は甕、12～16は壺である。12は縦位に数条のヘラ描沈線文を施す。14は赤彩されており、肩部に櫛描直線文と刺突文を施す。16の口縁端部は外側へ折り返す。底部は穿孔か。17～24は器台である。18から21は外反口縁小型器台である。22～24は環部や脚柱部に多数の透孔を施す。25～29は高環である。25・26・28はそれぞれ環部と脚柱部の接合痕が分かる資料である。

[時期] 出土遺物から古墳時代前期である。

#### S I 4 (第10・24図、図版6・17)

[位置・重複] B地区西側に位置する。切り合いではS I 3に先行し、S K 19より新しい。

[形状・規模] 調査区外に延びるため全容は不明だが、円形に近い形状と推定する。規模は検出部分では長軸3.5m、短軸3.3m、検出面からの深さ25cmを測る。

[検出状況・埋土] III層の包含層掘削中に炭化物の厚い集積と硬化面の範囲を検出したが、壁面の立ち上がりは検出できず、IV層上面まで掘り下げて、硬化面の広がりや土層断面で平面形を確認した。平面形は不明瞭であったが、炭化物や床面の遺存状態は良好であった。炉の痕跡や柱穴、周壁溝は確認できなかったが、S I 4の北側では、S I 4からはみ出す形でS K 19を検出した。断面確認ではS I 4に先行する遺構としたが、検出状況からS I 4に付属する遺構の可能性が高いと考えている。炭化物の集積は建物範囲の西側にまとまっており、床面直上に約10cm近く堆積していたが、材の形状を保つものは無かった。また炭化物の下面に焼土範囲は見られなかった。竪穴の埋土はオリーブ黒色砂質シルトを基調とし、床面は硬く締まる暗灰黄色砂質シルトである。掘方は灰オリーブ色粘土質シルトを基調とし、暗灰黄色砂質シルトを含む土が堆積する。

[遺物出土状況] 床面の遺存状態は良好で、床面上で弥生土器の甕2点と壺1点がほぼ原位置とみられる状態で出土した。甕は口縁部を下にした逆位の状態で据えられており、それぞれ口縁部の一部が欠損していた。遺物番号30の甕は竪穴北側のS K 19の埋土上面に、遺物番号31の甕はS I 4の炭化物範囲のほぼ中央で炭化物の上に出土している。遺物番号32の壺は竪穴南西部で横転した状態で出土した。口縁部はすべて欠損していた。

[出土遺物] 出土量は少なく、図示した4点以外はすべて小片である。30～33は弥生土器である。30・31は甕である。30の口縁端部は細かい刻目で、体部には櫛描波状文を施す。31は口縁端部の刻目を櫛歯状の工具で施す。32は壺で、頸部に櫛描の波状文と籐状文を施す。33は甕か。

遺物番号31の甕の中の土から採取した炭化材を年代測定したところ、128-232cal AD (95.45%)の暦年代範囲を示した。また同じ試料からイネ科草本とイネ炭化種子も抽出されている(第5章第1～3節)。

[時期] 年代測定は弥生時代後期に相当する結果だが、出土遺物から弥生時代中期としておきたい。

## 第2節 礫敷遺構

C地区南東部の石炭ガラ廃棄土坑による攪乱の下で、礫敷遺構SS1を検出した。直上まで攪乱を受けていたが、礫敷面のほとんどは攪乱されずに遺存していた。また、溝状遺構SD6は、SS1の周りを周溝状に巡っており、位置関係や検出状況から礫敷遺構に伴う遺構とも考えられるため、この節に記載する。

### SS1 (第11図、図版7・8)

〔位置・重複〕C地区南東部に位置する。重複する遺構はないが、西端部の上面は一部攪乱を受けている。  
〔形状・規模〕平面形の形状は長方形を呈す。掘方の規模は長軸2.1m、短軸80cmである。礫敷部分のみでは長軸推定1.8m、短軸60cmである。軸方向はN-85°-Wで、ほぼ東西方向の軸線に沿っている。  
〔検出状況〕C地区東端部は石炭ガラの廃棄土坑によって攪乱されていた。石炭ガラの大部分は重機による表土掘削で除去したが、取り切れなかった部分を包含層掘削時に人力で除去したところ、SS1の礫敷を検出した。礫敷の上には遺物包含層はほとんど遺存していなかった。礫敷の西端部は礫敷の上面に食い込んで攪乱を受けていたため除去したが、その下に遺存していた礫も攪乱と誤認して一部除去してしまった。径10～20cmの礫が詰まっていたことを確認している。掘方は攪乱されず遺存していた。礫敷は西端部と東端部にはそれぞれ径10～20cmの大きめの礫が詰まっており、中央部は3～5cmの小礫がほぼ隙間無く敷き均されていた。掘方は西端部と東端部には礫面から16cm下まで掘り込みがあり、その中に大きめの礫が詰め込まれていたが、中央部は小礫を除去した平坦面がほぼ掘方の底面であった。礫敷の上にあったとみられる土坑の掘方は確認できなかった。礫は大礫・小礫問わず、河原石のような角の取れたものである。

〔出土遺物〕現場調査時に遺物は確認できなかった。断片確認の後、礫は四等分して位置を記録し、すべて取り上げて土のう袋に収納し、持ち帰って水洗フルイした。土器や他の遺物は採取できなかったが少量の炭化材と表面が気泡状の微細な白色物質を採取できたため分析を行った。炭化材の年代測定は、753-682cal BC (35.6%)、668-631cal BC (14.56%)、625-609cal BC (2.54%)、593-458cal BC (39.27%)、440-419cal BC (3.47%)の暦年代範囲を示した(第5章第1節)。また、白色物質は骨で、被熱を受けた焼骨であることが分かった(第5章第4節)。

〔時期〕暦年代範囲は縄文時代晩期から弥生時代前期に相当する年代を示している。出土遺物がなく決めに欠けるが、同様な形態の遺構は弥生時代中期の長野県北部を中心とした粟林式土器の文化圏内で多く見つかっている。

### SD6 (第11・29図、図版7・8・20)

〔位置・重複〕C地区南東部に位置する。切り合いはSD8に先行するとしたが、平面・断面とも肩部同士がわずかに重複するのみで明確ではない。

〔形状・規模〕溝の南端部と東端部が調査区外へ延びており、全容は不明である。南北方向に走って屈曲し東西方向に走る。規模は検出範囲の長軸が3.9m、短軸が2.6mである。溝幅は1.0mで、検出面からの深さ10cmを測る。掘方の断面形は皿状である。

〔検出状況・埋土〕石炭ガラを除去したIV層上面で検出した。SS1の周囲を周溝状に巡っている。検出面の標高はSS1・SD6ともに上面が攪乱されていると考えられるため比較にならないが、掘方底面の標高はSS1の掘方底面とほぼ同じである。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、暗灰黄色砂質シルトをブロック状に含む。

〔出土遺物〕出土遺物は1点のみであった。108は弥生土器の壺で、縄文の地文に太描の沈線文を施す。

〔時期〕出土遺物と切り合いから弥生時代中期と推定する。

### 第3節 溝状遺構

調査区全体で11条の溝状遺構を検出した。SD6については前節に記載した。SD9・10はC地区で隣接して検出した溝状遺構であるが、その上面を同じ埋土が覆っており、その埋土から大量の土器が出土した。その出土遺物はSD9・10上面出土遺物として取り上げた。ここでも便宜上、SD9・10上面として記載する。

SD1（第12・13・25～28図、図版9・17～20）

[位置・重複] A地区に位置する。切り合いではS11に先行し、SK7・SX2より新しい。

[検出状況・規模] 北西から南東方向に走り、両端部は調査区外へ延びる。西半部の上層部分は現代の建物の基礎構造物によって攪乱されていたが、下層部分は遺存していた。規模は検出部分で長さ10.3m、幅2.5m、検出面からの深さ80cmを測る。掘方の断面形は皿状である。遺構の全容は不明だが、南東部で屈曲部を検出しており、方形周溝墓の周溝となる可能性がある。

[埋土] 埋土は上層に黒褐色粘土質シルト、中層に暗灰黄色シルト、下層は灰色砂質シルトを基調としレンズ状の互層となって堆積する。

[遺物出土状況] 特に上層で土師器の台付甕、高環など大量の土器が出土した。土層の土色・土質が視認しやすく、遺物は可能な限り層位を記録して取り上げた。91～94・96は弥生土器で、SD1の底面付近から肩部にかけてまとまって出土した。SD1の閉鎖時や埋没過程で混入した可能性もあるが、出土状況から、調査時にSD1の掘方を認識できずに下層の包含層（Ⅲ層）または下層遺構に帰属する遺物を露出させた可能性が高い。

[出土遺物] 出土遺物は多く、71点を図示した。取上層位別に記載する。

34～47は下層出土遺物である。34は弥生土器で、他は土師器である。34は直行壺である。内外面赤彩し、口縁端部には縄文を施す。35～39は台付甕である。35・36はS字状口縁で、肩部にヨコハケは確認できない。38・39は脚柱部で、底部の端部は内側へ折り返す。40～42は壺である。40は有段口縁である。41はほぼ完形で体部はやや扁平に膨らむ。43～45は高環である。44は脚柱部に透孔を三方に施す。45は外面を赤彩する。46は埴である。47は蓋で、つまみ部は中実である。

48～64は中層出土遺物で、すべて土師器である。48～54はS字状口縁台付甕の口縁部である。51はタテハケのみで調整するが、他は肩部にタテハケとヨコハケを施す。55～57はくの字口縁の甕である。58～60は壺で、60は二重口縁壺か。59は口縁部にヘラ描きの波状文、60は肩部に櫛描きの波状文を施す。61～64は高環の脚柱部である。64は外面を赤彩し、口縁部にはヘラ描きの沈線がある。

65～89は上層出土遺物で、65は弥生土器、他はすべて土師器である。65は壺である。胎土や器形から弥生時代中期の遺物と考えている。66は甕で、口縁端部を刺突して刻目を施す。67～70は台付甕で、69は肩部、他はS字状口縁の口縁部である。67・69にはタテハケとヨコハケを施す。71～76は甕である。71・72は折り返し口縁である。77～80は壺である。78は有段口縁で、外面を赤彩する。81・82は器台の脚柱部で、81は三方に透孔がある。83～88は高環である。88の脚柱部は柱状を呈す。89の器種は不明であるが、把手か。不明瞭だが羽状の刺突がみられる。90は石製品で、滑石製の白玉である。上層で採取した土壌サンプルを水洗フルイして抽出した遺物である。

91～104は取上層位を視認できなかった遺物である。91～100は弥生土器である。91・99は甕である。91は口縁端部に縄文、頸部に櫛描直線文、体部に櫛描羽状文を施す。99は体部をヘラミガキし、櫛描きの格子目状文を施す。92～98と100は壺である。92・96は受口口縁で、92は口縁端部に縄文、頸部の突帯に縄文と沈線を施す。96は縄文の地文に山形沈線を施す。93・94・95の口縁部は外反する。93・94は口縁端部に縄文、頸部は縄文を地文として横走沈線を施す。97は縄文にヘラ描沈線を施す。100は平底の壺の底部である。101～104は土師器である。101はS字状口縁台付甕の口縁部、102・103は壺、104は高環である。

[時期] 出土遺物と重複関係から古墳時代前期の遺構である。

S D 2 (第 14 図、図版 10)

[位置・重複] B 地区東半部に位置する。切り合いでは S D 3 より新しい。

[検出状況・規模] II 層上面で検出した。東西方向に走るが両端部が攪乱されて途切れる。検出部分では長さ 1.1m、幅 80cm、深さ 30cm を測る。掘方の断面形は皿状である。

[埋土] 埋土は黒褐色粘土質シルトに黄灰色粘土質シルトのブロック土を含む。

[出土遺物] 土師器の台付甕などが少量出土しているが、小片のため図化できない。

[時期] 出土遺物から古墳時代前期である。

S D 3 (第 14・28 図、図版 10・20)

[位置・重複] B 地区東半部に位置する。切り合いでは S D 2 に先行する。

[検出状況・規模] S D 2 を掘り下げた III 層上面で検出した。北西から南東方向に走るが両端部が攪乱されて途切れる。検出部分では長さ 1.1m、幅 2m、深さ 38cm を測る。掘方の断面形は皿状である。

[埋土] 埋土は灰色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物] 土器片が 5 点出土しており、そのうち 2 点を図示した。105・106 は弥生土器か。105 は甕で口縁部に刻目を施す。106 は鉢または甔か。

[時期] 出土遺物と切りあいから弥生時代と推定する。

S D 4 (第 14・29 図、図版 10・20)

[位置・重複] B 地区東半部に位置する。重複する遺構はない。

[検出状況・規模] III 層上面で検出した。東西方向に走るが両端部は攪乱されて途切れる。検出部分では長さ 1.0m、幅 95cm、深さ 52cm を測る。掘方の断面形は方形に近い。

[埋土] 埋土はオリブ黒色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物] 土器片が 3 点出土しており、そのうち 1 点を図示した。107 は弥生土器の底部か。

[時期] 出土遺物と検出面から弥生時代と推定する。

S D 5 (第 14 図、図版 10)

[位置・重複] B 地区西半部に位置する。S I 3 に先行する。

[検出状況・規模] III 層上面で検出した。東西方向に走るが西側は S I 3 に切られ、東側は攪乱されて途切れる。検出部分では長さ 1.0m、幅 1.3m、深さ 25cm を測る。掘方の断面形は皿状であるが、ピット状に落ち込む部分がある。

[埋土] 埋土はオリブ黒色粘土質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物はないが、切りあいから古墳時代前期以前と推定する。

S D 7 (第 5 図、図版 10)

[位置・重複] C 地区中央部に位置する。S K 20 より新しい。

[検出状況・規模] III 層上面で検出した。南北方向に走り北端部は調査区外へ延びる。検出部分では長さ 1.6m、幅 70m、深さ 10cm を測る。掘方の断面形は皿状である。

[埋土] 埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 土器の小片が 1 点あるが図示できない。時期は不明である。

S D 8 (第 5・29 図、図版 10・21)

[位置・重複] C 地区北東部に位置する。切り合いでは S D 6 より新しいとしたが明確ではない。

[検出状況・規模] IV 層上面で検出した。両端部は調査区外に延びており全容は不明である。北西から南西方向に走り、検出部分では長さ 1.8m、幅 80cm、検出面からの深さ 40cm を測る。掘方の断面形は鉢状である。

[埋土] 埋土はオリブ黒色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物] 出土遺物は少量で、2 点を図示した。109・110 は弥生土器か。109 は鉢または甔か。口縁

部は大きく外へ折り返す。110は壺の底部である。また土壌サンプルから採取した炭化草本を年代測定したところ、128-232cal AD (95.45%)の暦年代範囲を示した。

[時期] 出土遺物と年代測定の結果から弥生時代後期以降である。

#### S D 9・10 上面 (第5・15・16・30・31 図、図版11・22・23)

[位置・重複] C地区中央部に位置する。S D 9・10の上面を覆う遺物包含層である。切り合いではS D 11より新しい。

[検出状況] IV層上面で白っぽいシルト質の埋土とそこに土器集中範囲を検出したものの、遺構としての明瞭な平面形は検出できなかった。サブレンチを設定し精査したところ、下層に2条の溝状遺構を確認した。白っぽいシルト質の埋土はこれらの溝状遺構の埋没過程で、両方の溝状遺構を覆うように堆積した遺物包含層と考えた。出土遺物は多く、出土地点の帰属を記録しておくため、便宜上、S D 9・10上面として遺物の取り上げを行った。

[埋土] 埋土は暗灰黄色シルトを基調とし、レンズ状に堆積する。検出面では白く見える堆積層であった。

[出土遺物] S D 9・10上面出土遺物として図示した遺物は31点である。118～147は土師器である。118は外反する単純口縁の甕である。119～131は台付甕である。119～124はS字状口縁で、肩部にタテハケとヨコハケを施す。125は体部下位で126～131は脚台部である。126～130は端部を内側へ折り返す。132～136は壺である。132はヒョウタン形のヒサゴ壺である。137～140は器台である。137・138は外反口縁小型器台で、137は脚部の上下二段に三方の透孔を施す。139・140は口縁が大きく外反する。坏部と脚柱部に透孔を施す。141～144は高環である。142は坏部が段を持ち、そこに刻目を施す。脚柱部に透孔を六方に施す。145は蓋で、外面を赤彩する。146・147は甗で、底部に孔を持つ。148は砥石で、滑らかな使用面が二面観察できる。

[時期] 出土遺物から古墳時代前期の遺物包含層である。

#### S D 9 (第5・15・16・29 図、図版11・21)

[位置・重複] C地区中央部に位置する。S D 10と並走する。切り合いではS D 10・11より新しい。

[検出状況・規模] 南西から北東方向に走り、両端部は調査区外へ延びる。検出部分では長さ4.5m、幅2.7m、深さ76cmを測る。軸方向はN-37°-Eである。前述した通りS D 9・10上面に堆積する暗灰黄色砂質シルトの遺物包含層を剥いで検出した。掘方の断面形は皿状である。

[埋土] 埋土はレンズ状に堆積し、上層は黄灰色砂質シルト、下層は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物] 出土遺物は多くはないが、底面付近に一定量がまとまって出土した。111～117は土師器である。111・113は甕である。111の口縁はゆるく外反し、口縁端部に縄文で刻目を施す。112は台付甕で、肩部をタテハケとヨコハケで調整する。114～117は壺である。114は有段口縁の口縁部である。115は体部破片で、外面を赤彩し刺突文を施す。116・117は外面をハケとヘラミガキで調整する。117は折り返し口縁で、頸部がくびれて体部が膨らむ器形である。外底面に木葉痕が残る。

[時期] S D 9・10上面の遺物包含層に覆われて埋没したのは古墳時代前期であるが、開削は古墳時代前期以前となる可能性がある。

#### S D 10 (第5・15・16 図、図版11)

[位置・重複] C地区中央部に位置する。S D 9と並走する。切り合いではS D 11より新しく、S D 10に先行する。

[検出状況・規模] 南西から北東方向に走り、両端部は調査区外へ延びる。検出部分では長さ5.2m、幅1.5m、深さ55cmを測る。軸方向はN-40°-Eである。S D 9・10上面とした遺物包含層を剥いで検出した。掘方の断面形は底面中央が深いV字状である。底面の幅は25cmで、両足を揃えて立つのが困難であった。

[埋土] 埋土は黄灰白砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 土師器の小片が少量出土しているが図化できない。S D 9・10上面の包含層に覆われ

て完全に埋没したのは古墳時代前期であるが、切り合いでSD9に先行しており、開削は古墳時代前期以前と推定する。

#### SD 11 (第5・15・16図、図版10)

[位置・重複] C地区中央部に位置する。切り合いではSD9・10に先行する。

[検出状況・規模] IV層上面で検出したが、平面的には不明瞭であった。SD9・10の掘削によって、その肩部に鉢状の断面形が検出され、底面から立ち上げる形で掘削して掘方を検出した。SD9・10に攪乱されて2ヶ所で分断されるが、埋土や掘方の形状、位置関係から同一の溝状遺構と考えた。分断されたそれぞれの部分はSK11のA・B・Cとした。東西方向に走り、東端部は屈曲していると推定する。掘方の断面形は鉢状である。検出部分の長さは6.2m、幅1.3mで、深さは32cmを測る。

[埋土] 黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 土器の小片が5点出土したが図示できない。重複関係ではSD9・10よりも古いため、弥生時代の可能性がある。

### 第4節 土坑・ピット・不明遺構

調査区全体で土坑(SK)21基、ピット(SP)29基、不明遺構(SX)を1基を検出した。なお、SK19・21～28とSX1は欠番である。一部の遺構を除いては遺構一覧表のみの記載とした。

#### SK 2 (第3・17・32図、図版24)

[位置・重複] A地区区南東部に位置する。SK1より新しく、SI2、SP9・10に先行する。SP17との重複関係は不明である。

[形状・規模] 平面形は楕円形か。遺構の西側は検出できなかった。長径2.2m、短径推定1.3m、検出面からの深さ9cmを測る。掘方の断面形は皿状である。

[検出状況・埋土] IV層上面で検出した。埋土は暗灰黄色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物は2点で、そのうち1点を図示した。149は弥生土器の鉢で、内外面赤彩する。遺構の時期は出土遺物から弥生時代と推定する。

#### SK 6 (第3・17・32図、図版12・24)

[位置・重複] A地区南半部に位置し、SX2に隣接する。重複はない。

[形状・規模] 平面形は楕円形で、長径88cm、短径78cm、深さ8cmを測る。掘方の断面形は皿状である。

[検出状況・埋土] IV層上面で検出した。埋土はオリブ黒色シルトを基調とする。

[出土遺物] 出土遺物は8点あり、そのうち2点を図示した。150・151は弥生土器の壺である。150は口縁部で、縄文の地文に波状沈線文を施す。151は底部である。

[時期] 出土遺物から弥生時代と推定する。

#### SK 7 (第3・18・32図、図版12・24)

[位置・重複] A地区南半部に位置する。切り合いでは、SD1、SP18・20・21に先行し、SK9、SX2より新しい。

[形状・規模] SD1に切られるため全容は不明であるが平面形は楕円形に近い形状である。検出部分では長軸1.7m、短軸1.2m、深さ28cmを測る。掘方の断面形は皿状である。

[検出状況・埋土] IV層上面で検出した。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、炭化物を含む。

[出土遺物] 出土遺物は比較的多く、6点を図示した。152は弥生土器で、甕の口縁部である。櫛描波状文を施す。153～156は土師器である。153・155・156の壺は、いずれも有段口縁である。157は台石である。平坦で滑らかな使用面が一面残る。

[時期] 出土遺物には弥生土器も混入するが、古墳時代前期と推定する。

### S K 8 (第3・19・32図、図版24)

[位置・重複] A地区南半部に位置し、S K 7に隣接する。切り合いではS P 18に先行する。

[形状・規模] 平面形は楕円形で、長径60cm、短径54cm、検出面からの深さ15cmを測る。掘方の断面形は皿状である。

[検出状況・埋土] IV層上面で検出した。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、炭化物を含む。

[出土遺物・時期] 出土遺物は1点である。158は弥生土器の甕の口縁部で、櫛描波状文を施す。出土遺物から弥生時代と推定する。

### S K 9 (第3・19・32図、図版12・13・24)

[位置・重複] A地区の南端部に位置する。切り合いではS K 7に先行し、S K 10より新しい。

[形状・規模] 調査区外に延びるため、平面形の全容は不明であるが、方形に近い形状か。検出部分では長軸2.0m、短軸1.1m、深さ23cmを測る。

[検出状況・埋土] IV層上面で検出した。埋土は灰色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物] 土器の破片3点が出土し、その内1点を図示した。159は弥生土器か。台付甕の脚台部である。

[時期] 出土遺物や切り合いから弥生時代と推定する。

### S K 10 (第3・19・32図、図版12・24)

[位置・重複] A地区の南端部に位置する。切り合いではS K 9、S P 19に先行する。

[形状・規模] 部分的な検出に止まったため、平面形の形状と規模は不明である。調査区の壁面で確認した深さは35cmを測る。

[検出状況・埋土] 埋土はオリブ黒色粘土質シルトを基調とする。

[出土遺物] 出土遺物は3点で、すべて図示した。160・161は弥生土器である。160は甕の頸部から体部の破片で、頸部に櫛描波状文、体部に櫛描羽状文を施す。161は壺である。162は石器で、磨製石斧か。刃部・基部とも欠損するが、表面には磨いた面が残る。

[時期] 出土遺物や切り合いから弥生時代である。

### S K 13 (第7・8・9・33図、図版13・24)

[位置・重複] B地区の北端部に位置する。切り合いではS I 3より新しい。

[形状・規模] 形状は不整形で、調査区外へ延びる。検出部分では長軸1.1m、短軸56cm、深さ31cmを測る。

[検出状況・埋土] III層上面で検出した。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、炭化物を多く含む。S I 3の上面に位置しており、検出時点ではS I 3に帰属する炭化物範囲と考えたが、土層断面で確認し、S I 3より新しい時期の土坑とした。

[出土遺物] 出土遺物には台付甕や器台なども含まれたが小片が多く、図示したのは1点である。163は土師器高坏の脚柱部である。土壌サンプルを採取しており、水洗フルイで分別した炭化種子を同定したところイネであった(第5章第3節)。

[時期] 出土遺物と切り合いから、古墳時代前期である。

### S K 16 (第7・8図、図版13)

[位置・重複] B地区西端部に位置する。S I 3の床面直下で検出した。

[形状・規模] 平面形は楕円形に近い形状である。検出部分の長径1.1m、短径80cm、検出面からの深さ35cmを測る。

[埋土] 黒褐色砂質シルト灰色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 土師器の台付甕など10数点出土したが小片で図示できない。検出状況からS I 3に帰属する遺構で、遺構の時期は古墳時代前期である。

### S K 17 (第7・8・33図、図版13・24)

[位置・重複] B地区西端部に位置する。S I 3の掘方底面で検出した。



〔形状・規模〕平面形は方形に近い形状である。検出部分では長軸 95cm、短軸 82cm、深さ 15cmを測る。

〔出土状況・埋土〕黄灰色砂質シルトを基調とする。

〔出土遺物・時期〕土器の小片は 10 数点出土したが図示したのは 1 点である。164 は土師器の S 字状口縁台付甕の口縁部で、肩部にはタテハケとヨコハケを施す。S I 3 の掘方底面で検出しており、遺構の時期は古墳時代前期である。

#### S K 18 (第 20・33 図、図版 13・24)

〔位置・重複〕B 地区南西隅部に位置する。切り合いでは S K 14 に先行する。

〔形状・規模〕調査区外に延びるため全容は不明だが、平面形は不整形である。検出部分では長軸 2.0m、短軸 1.4m、深さ 48cmを測る。

〔出土状況・埋土〕II c 層を剥いだ IV 層上面で検出した。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、下層には炭化物が多く堆積する。S K 18 上面の II 層中では土師器の甕の把手など古墳後期以降とみられる遺物が出土していたが、遺構の平面形が明確でなく IV 層上面まで掘り下げて確認した。

〔出土遺物・時期〕土師器の甕などが数点出土しており、そのうち 1 点を図示した。165 は土師器の甕の体部である。166 も土師器の甕の体部破片であるが、写真のみの記録とした。破断面に種子痕が確認できる資料である。遺構の時期は不明である。

#### S K 20 (第 5・20・33 図、図版 13・24)

〔位置・重複〕C 地区中央部に位置する。切り合いでは S D 7 に先行する。

〔形状・規模〕S D 7 に切られており平面形の全容は不明だが、楕円形と推定する。検出部分では長径 84cm、短径 53cm、深さ 15cmを測る。

〔出土状況・埋土〕IV 層上面で検出した。暗褐色粘土質シルトを基調とする。

〔出土遺物・時期〕出土遺物は 7 点で、そのうち 1 点を図示した。167 は土師器の壺である。出土遺物と切り合いから古墳時代前期である。

#### S P 4 (第 3・21・33 図、図版 14・25)

〔位置・重複〕A 地区南側に位置する。重複する遺構はない。

〔形状・規模〕平面形は楕円形を呈し、長径 41cm、短径 33cm、検出面からの深さ 12cmを測る。

〔出土状況・埋土〕II 層を剥いだ III 層上面で検出した。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

〔出土遺物・時期〕出土した遺物は 9 点で、そのうち 3 点を図示した。168・169・170 は弥生土器である。168・170 は壺である。168 は口縁端部に刻目、頸部に横走沈線を施す。170 は口縁端部に縄文を施す受口口縁の壺とみられる。169 は甕で、口縁端部に縄文、頸部に櫛描波状文、体部には櫛描羽状文を施す。いずれも S P 4 出土遺物として取り上げているが、実際には S P 4 の底面を掘りぬいた下層 (III 層) の出土遺物である。168 は隣接する S P 3 出土破片 (※これも遺構底面を掘りぬいた下層遺物) と接合しており、S P 3・4 の下層に弥生遺物包含層が遺存していたとみられる。遺構の時期は古墳時代としておく。

#### S P 5 (第 3・21・33 図、図版 14・25)

〔位置・重複〕A 地区南側に位置する。S K 1 より新しい。

〔形状・規模〕平面形は円形を呈し、径 23cm、検出面からの深さ 17cmを測る。

〔出土状況・埋土〕II 層を剥いだ III 層上面で検出した。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

〔出土遺物・時期〕出土遺物は 2 点で、そのうち 1 点を図示した。171 は弥生土器の壺の口縁部である。櫛描波状文の上にヘラ描きの波状沈線文を施す。遺構底面を掘りぬいた下層の出土遺物であり、遺構の時期は古墳時代としておく。

#### S P 10 (第 3・21・33 図、図版 14・25)

〔位置・重複〕A 地区南側に位置する。切り合いでは S K 2 より新しい。

〔形状・規模〕平面形は円形で、径 30cm、検出面からの深さ 4cmを測る。

[検出状況・埋土] II層を剥いだIII層上面で検出した。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物は4点で、そのうち1点を図示した。172は弥生土器の鉢である。内外面に赤彩する。底面を掘りぬいた下層の出土遺物であり、遺構の時期は古墳時代としておく。

#### S P 20 (第3・22・33図、図版25)

[位置・重複] A地区南側に位置する。切り合いではSK7・SX2・SP21より新しい。

[形状・規模] 平面形は楕円形を呈し、長径39cm、短径30cm、検出面からの深さ12cmを測る。

[検出状況・埋土] SK7・SX2の上面で検出した。埋土はオリブ黒色砂質シルトを基調とする。

[出土遺物・時期] 出土遺物は3点で、そのうち1点を図示した。173は弥生土器の甕か。櫛描羽状文を施す。弥生土器が出土しているが、切り合いから古墳時代としておく。

#### S X 2 (第18・33図、図版12・25)

[位置・重複] A地区南側に位置する。切り合いではSD1・SK7・SP20・SP21に先行する。

[形状・規模] SD1とSK7に切られて、平面形の全容は不明だが、円形を呈すと推定する。検出部分では長径1.5m、短径1.2m、検出面からの深さ17cmを測る。

[検出状況・埋土] IV層上面で検出した。埋土は上層は炭化物を多く含む黒褐色砂質シルト、下層は黄灰色粘土質シルトである。検出時に炭化物の広がりを確認しており、出土遺物も多かったことから、竪穴建物を想定したが、硬化面や炉などは検出できなかった。竪穴状の不明遺構としておくが、SK7など重複する遺構に多く弥生土器が混入しており、SX2が攪乱された可能性が高い。

[出土遺物] 6点を図示した。174～177は弥生土器である。174は壺の体部で、縄文の地文にヘラ描きの連弧文を施す。175は鉢か。内外面に赤彩を施す。176は台付土器とした。脚部のみ遺存する。177は手づくね土器で、蓋か。178・179は石器である。178は磨製石鏃か。先端部は欠損し、基部に孔はない。未成品または転用品とも考えられる。179は台石で、滑らかな平坦面がある。

[時期] 出土遺物から弥生時代中期の遺構である。

遺構番号	地点	長径cm	短径cm	深さcm	備考
SK1	A	79	51	4	
SK2	A	2.2	1.3	9	
SK3	A	(1.1)	(76)	35	
SK4	A	(68)	(23)	50	
SK5	A	(2.1)	1.1	20	
SK6	A	88	78	8	
SK7	A	1.7	1.2	28	
SK8	A	60	54	15	
SK9	A	2.0	1.1	23	
SK10	A	-	-	35	
SK11	B	81	26	7	

遺構番号	地点	長径cm	短径cm	深さcm	備考
SK12	B	(71)	45	10	
SK13	B	1.1	(56)	31	S13 上面で検出
SK14	B	(1.1)	(79)	67	
SK15	B	(1.1)	(81)	15	
SK16	B	1.1	(80)	35	S13 窟方で検出
SK17	B	95	95	15	S13 窟方で検出
SK18	B	(2.0)	(2.0)	21	
SK20	C	(84)	(53)	15	
SK29	C	45	28	11	
SK30	C	1.0	86	22	

第2表 土坑一覧表

遺構番号	地点	長径cm	短径cm	深さcm	備考
SP1	A	33	27	31	S11で検出
SP2	A	17	13	2.5	S11で検出
SP3	A	34	24	22	
SP4	A	41	33	12	
SP5	A	23	-	17	
SP6	A	41	34	22	
SP7	A	32	22	25	
SP8	A	38	32	22	
SP9	A	38	34	15	
SP10	A	30	x	4	
SP11	A	51	25	15	
SP12	A	30	29	48	
SP13	A	19	19	15	
SP14	A	30	25	5	S11で検出
SP15	A	44	33	42	

遺構番号	地点	長径cm	短径cm	深さcm	備考
SP16	A	(28)	(16)	16	
SP17	A	43	(23)	15	
SP18	A	34	29	5	
SP19	A	25	23	46	
SP20	A	39	(30)	12	
SP21	A	24	(18)	9	
SP22	A	31	23	12	
SP23	B	(33)	(13)	26	S13 窟方で検出
SP24	B	28	26	20	S13 窟方で検出
SP25	B	29	31	20	S13 窟方で検出
SP26	B	44	41	11	S13 窟方で検出
SP27	B	37	36	14	S13 窟方で検出
SP28	B	30	24	18	S13 窟方で検出
SP29	C	41	37	12	

第3表 ビット一覧表

## 第5節 遺構外出土遺物（第34～36図・図版25～27）

遺構外出土遺物として60点を図示した。挿図・写真図版・遺物観察表は、調査区別・層位別に整理して記載した。現場調査時点では、Ⅰ層は中近世から現代、Ⅱ層は古墳時代から古代を想定した。Ⅲ層は弥生時代を想定しながら調査を進めたが、結果的に弥生時代から古墳時代の遺物を包含している。

### A地区（遺物番号180～219）

180～198はⅢ層出土遺物である。180～196は弥生土器である。180～184は甕である。180・181は口縁端部に刻目を施す。181は頸部に櫛描簾状文・直線文、体部に櫛描垂下文を施す。182は体部破片で、円形浮文と櫛描波状文、櫛描直線文を施す。183・184は縄文地文に沈線の「コ」の字重ね文を施す。185は台付甕か。186は甕の底部である。187～191は壺である。187は受口口縁で、口縁部に縄文、鋸歯沈線文を施す。188は縄文地文に波状沈線文、横走沈線文を施す。189は地文に縄文で、横走沈線文を施す。190は縄文地文に横走沈線、191は底部で、外底面までヘラミガキする。192・193は鉢か。192は内外面、193は外面を赤彩する。193は孔が2ヶ所見られる。194～196は高環である。194は内外面、195は外面、196は外面と環部内面を赤彩する。195は脚柱部上位に突帯を貼付し、刻目を施す。197・198は土師器の壺である。197は有段口縁、198は口縁端部を上方につまみ上げる。

199～210はⅡ層出土遺物である。199・200は弥生土器である。199は壺で、縄文地文に連弧文を施す。200は甕で、縄文地文に縦位の沈線文を施す。「コ」の字重ね文か。201～210は土師器である。201はS字状口縁台付甕である。タテハケと肩部にヨコハケを施す。202・203は甕の体部破片である。204・205・206は壺である。204は外面にヘラ描鋸歯文を施す。207～210は高環である。210は脚裾部に透孔が2ヶ所残存する。

211～219はⅠ層や攪乱、出土層位を確認できなかった遺物である。211・212は弥生土器の甕である。211は底部である。やや灰色がかった胎土で弥生土器と比定した。212は、口縁端部に縄文を施し、頸部に櫛描波状文、体部に櫛描斜線文を施す。213～219は土師器である。213はS字状口縁台付甕である。214・215・216は壺である。217・218・219は高環である。217は口縁部にヘラ描沈線文を施す。

### B地区（遺物番号220～228）

220～221はⅢ層出土遺物である。220は弥生土器の壺の底部である。221は土師器の壺で、有段口縁で、外面は赤彩する。

222～228はⅡ層出土遺物である。222は弥生土器の甕の体部で、櫛描波状文を施す。223～227は土師器である。223～225は壺である。223は口縁に横位の沈線文、頸部に斜位の刺突文を施す。欠損するが脚部の痕跡が残る。224は口縁部に縦位の沈線文を施す。225は有段口縁である。226は甕の把手である。227も甕の底部か。228は須恵器の環である。ロクロナデシ、底部は回転糸切りである。

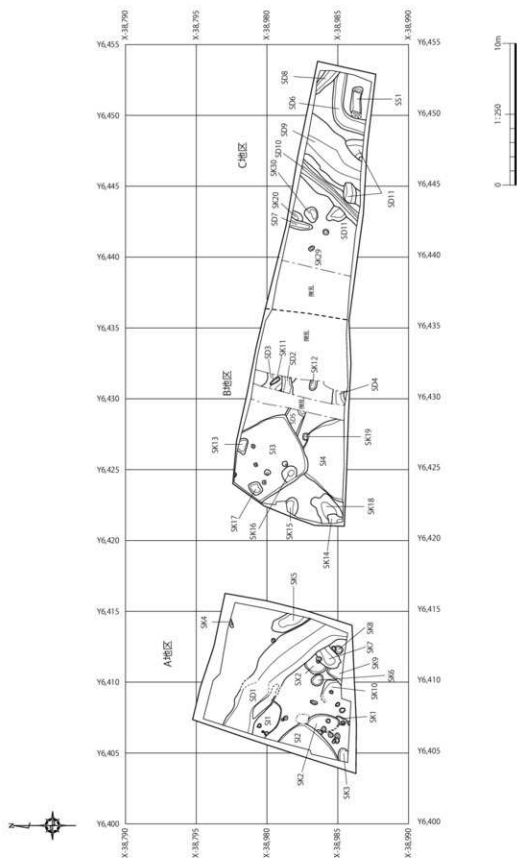
### C地区（遺物番号229～237）

229・230はⅢ層出土の土師器である。229は甕で、外面に種子痕がある。230はくの字口縁の壺である。231～236はⅡ層出土の土師器である。231・232は台付甕で、231はS字状口縁、232は脚台部で、底面は内側へ折り返す。233・234・235は壺である。233は有段口縁で、頸部にヘラ描きの短斜線文を施す。234は体部が扁平である。236は外反口縁小型器台である。脚柱部に上下二段に透孔を施す

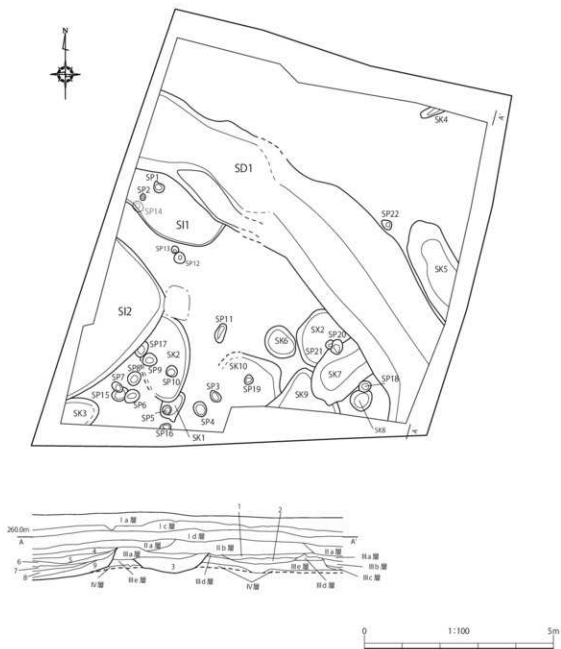
237は土師質土器のかわらけである。

### 試掘調査出土遺物（遺物番号238・239）

238は土師器の外反口縁小型器台である。239は高環で、脚柱部に上下二段に透孔三方に施す。



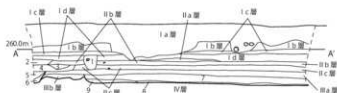
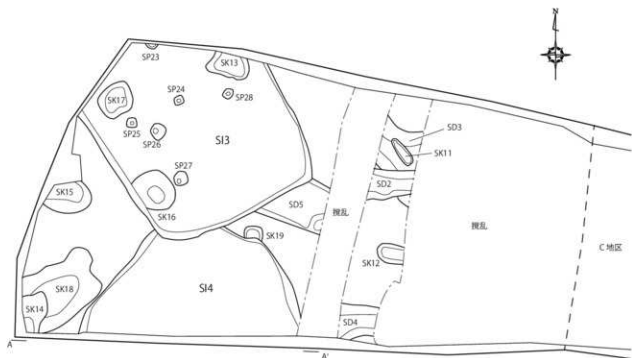
第2図 伊勢町遺跡(幸町1188-22地点)遺構全体図



#### A地区遺構基本層序

- |       |  |   |  |
|-------|--|---|--|
| Ia層   | 現表土(砂石層)                               | 1 | 黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト [壁面のみで検出の遺構]                   |
| Ic層   | 灰色(7.5Y4/1)砂質シルト 酸化鉄分下粒に沈着             | 2 | 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト [壁面のみで検出の遺構]                 |
| I d層  | 灰色(6Y4/1)粘土質シルト 炭化物粒状に3%含む             | 3 | 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト [SK5埋土]                       |
| IIa層  | 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト 炭化物粒状に3%含む           | 4 | 黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト 炭化物粒状に3%含む [SD1埋土]             |
| IIb層  | 灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト                     | 5 | 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト 炭化物粒状に7%含む [SD1埋土]             |
| IIa層  | 黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト 炭化物粒状に1%含む           | 6 | 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト [SD1埋土]                      |
| IIb層  | 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト 炭化物粒状に1%含む          | 7 | 暗灰黄色(2.5Y7/2)細砂 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト30%含む [SD1埋土] |
| IIc層  | 黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト 黄褐色(2.5Y5/3)シルト30%含む | 8 | 灰白色(2.5Y7/1)粘土質シルト [SD1埋土]                       |
| II d層 | 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト                    | 9 | 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト 炭化物粒状に1%含む [SD1埋土]           |
| IIe層  | 灰黄色(2.5Y6/2)粘土                         |   |  |
| IV層   | 黄褐色(2.5Y5/3)シルト 酸化鉄分(高錳小礫)多く含む [地山]    |   |  |

第3図 A地区遺構全体図・基本層序図

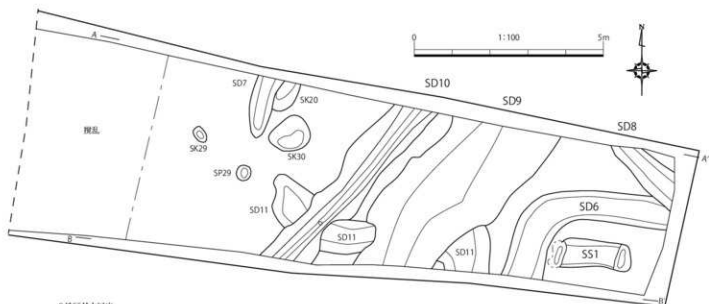


#### B地区基本層序

- I a層 表土・造成土
- I b層 暗灰黄色 (2.SY5/2) 砂質シルト 炭化物粒状に3%含む [近現代]
- I c層 黄灰色 (2.SY5/1) 砂質シルト 下面に酸化鉄分沈着 [水田床土 近世～近代か]
- I d層 黄灰色 (2.SY5/1) 粘土質シルト 下面に酸化鉄分沈着 [水田床土]
- II a層 暗オリーブ褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト 酸化鉄分多く含む [古墳遺物包含層]
- II b層 黒褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト [古墳遺物包含層]
- II c層 黄灰色 (2.SY4/1) 砂質シルト [墓石との養移層]
- III a層 オリーブ黒色 (SY3/2) 砂質シルト [赤土～古墳遺物包含層]
- III b層 オリーブ黒色 (SY3/2) 砂質シルト 灰オリーブ色 (SY5/2) シルト ブロック上に30%含む
- IV層 灰オリーブ色 (SY5/2) 粘土質シルト

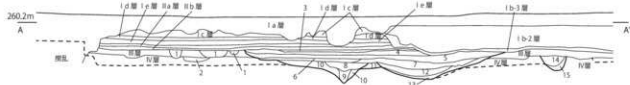
- 1 黒褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト 黄灰色 (2.SY5/1) 粘土質シルト 30%含む ※断面のみで検出の遺構
- 2 黒褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト 黄灰色 (2.SY5/1) 粘土質シルト 10%含む 炭化物 1%含む
- 3 黄灰色 (2.SY4/1) 砂質シルト 黄灰色 (2.SY5/1) 粘土質シルト 3%含む
- 4 黄灰色 (2.SY4/1) 砂質シルト
- 5 黄灰色 (2.SY4/1) 細砂 炭化物3%含む (SK14 埋土)
- 6 黄灰色 (2.SY4/1) 細砂 オリーブ褐色 (2.SY4/2) 砂質シルトブロック状に10%含む (SK18)
- 7 オリーブ黒色 (SY3/2) 砂質シルト 炭化物粒状に1%含む (SI4 埋積土)
- 8 オリーブ黒色 (SY2/2) 砂質シルト 灰オリーブ色 (SY5/2) シルトブロック状に10%含む
- 9 オリーブ黒色 (SY3/1) 砂質シルト [堆山]

第4図 B地区遺構全体図・基本層序図



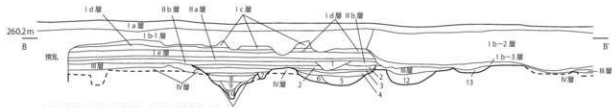
C地区基本層序

- |                                    |   |
|------------------------------------|---|
| 1a層 砂石層                            | 1e層 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質シルト 炭化物粒状に5%含む 下に酸化鉄分沈着                 |
| 1b-1層 近現代瓦礫層 [朝風瓦礫含む]              | 8a層 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土質シルト 下に酸化鉄分厚く沈着 [古墳遺物包含む]               |
| 1b-2層 近現代ゴミ穴 [石炭ワラ燐炭土坑]            | 8b層 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質シルト 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土質シルト30%含む [古墳遺物包含む] |
| 1b-3層 近現代ゴミ穴 方型                    | 8c層 オリーブ黒色 (5Y3/1) 砂質シルト 径1mmの白色粒1%含む [湧生〜古墳遺物包含む]          |
| 1c層 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質シルト 炭化物粒状に3%含む | 9層 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質シルト 硬く締まる [地山]                          |
| 1d層 黄褐色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト 下に酸化鉄分沈着  |   |



C地区北境 (A-A') 上層断面 ※基本層序は上記)

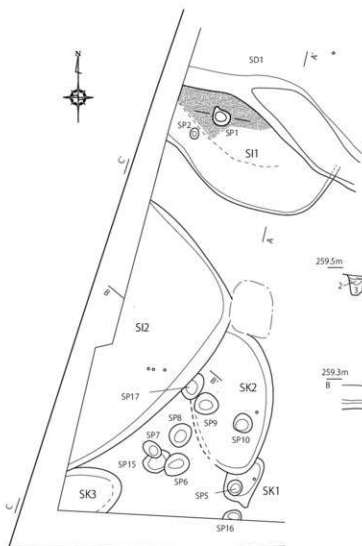
- |  |  |
|--|--|
| 1 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質シルト<br>オリーブ黒色 (5Y3/1) 砂質シルト30%含む           | 8 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト<br>暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト粒状に3%含む [SD10埋土]        |
| 2 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質シルト [SD7埋土]                                | 9 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト<br>灰黄色 (2.5Y6/2) シルトブロック状に3%含む [SD10埋土]       |
| 3 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト<br>黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト30%含む [SD9・10上面]  | 10 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト しまりゆるい [SD10埋土]                                |
| 4 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト [SD9・10上面]                            | 11 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト  |
| 5 黄褐色 (2.5Y4/1) 砂質シルト [SD9・10上面]                             | 12 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質シルト<br>暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルトブロック状に10%含む 炭化物粒状に1%含む |
| 6 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト<br>灰黄色 (2.5Y7/2) シルト粒状に10%含む [SD9・10上面] | 13 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質シルト<br>灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質シルト30%含む                  |
| 7 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト<br>灰黄色 (2.5Y7/2) シルト30%含む [SD9・10上面]     | 14 オリーブ黒色 (5Y3/1) 砂質シルト [SD8埋土]                                      |
|  | 15 オリーブ黒色 (5Y3/1) 砂質シルト [SD8埋土]                                      |



C地区南境 (B-B') 上層断面 ※基本層序は上記)

- |  |  |
|--|--|
| 1 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土質シルト<br>灰黄色 (5Y4/1) 粘土質シルト30%含む                              | 7 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト [SD10埋土]                                 |
| 2 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト [SD9・10上面]  | 8 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト<br>暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト粒状に3%含む [SD10埋土]  |
| 3 灰黄色 (2.5Y4/1) 砂質シルト [SD9・10上面]   | 9 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト<br>灰黄色 (2.5Y6/2) シルトブロック状に3%含む [SD10埋土] |
| 4 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質シルト<br>灰黄色 (2.5Y6/2) シルト粒状に1%含む 炭化物粒状に1%含む [SD9埋土]           | 10 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト しまりゆるい [SD10埋土]                          |
| 5 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質シルト<br>暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルトブロック状に10%含む<br>炭化物粒状に1%含む [SD9埋土] | 11 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト<br>灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質シルト30%含む [SD10埋土]    |
| 6 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質シルト<br>灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質シルト30%含む [SD9埋土]                     | 12 オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂質シルト [SD11A埋土]                              |
|  | 13 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト<br>暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルトブロック状に含む [SD6埋土] |

第5図 C地区遺構全体図・基本層序図



#### SI1

- 1 黒褐色 (2.SY3/1) 砂質シルト [SI1 埋土]
- 2 黒褐色 (2.SY3/1) 砂質シルト 炭化物 30% 含む  
炭化物が硬く締まる [SI1 床面]
- 3 黄灰色 (2.SY4/1) 砂質シルト  
黄灰色 (2.SY5/1) シルト粒状・ブロック状に 7% 含む  
[SD1 埋土]
- 4 灰色 (5Y5/1) シルト [SD1 埋土]
- 5 灰色 (5Y4/1) 粘土質シルト [I/a 層: 地山]



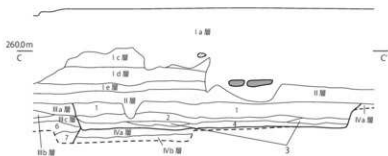
#### SP1

- 1 黒褐色 (2.SY3/1) 砂質シルト 炭化物粒状に 1% 含む
- 2 黒色 (5Y2/1) 粘土質シルト  
オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘土質シルト 30% 含む
- 3 オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘土質シルト 締まりゆるい



#### SI2

- 1 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト  
灰色 (5Y5/1) シルト粒状に 3% 含む  
炭化物粒状に 1% 含む [SI2 埋土]
- 2 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト  
灰色 (5Y5/1) シルトブロック状に  
10% 含む 硬く締まる [SI2 床面]
- 4 オリーブ黒色 (5Y3/1) 砂質シルト  
灰色 (5Y5/1) シルトブロック状に  
30% 含む [SI2 側方]
- 5 灰色 (7.SY4/1) 粘土質シルト  
オリーブ黒色 (5Y3/1) 砂質シルト  
10% 含む [SI2 側方]



#### A 地区内層基本順序

- I a 層 礫表土 [砕石層]
- I c 層 灰色 (7.SY4/1) 砂質シルト 炭化成分下に沈み
- I d 層 灰色 (7.SY4/1) 粘土質シルト 炭化物粒状に 3% 含む
- I e 層 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質シルト
- II 層 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト 炭化物粒状に 3% 含む
- III a 層 黒褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト
- III b 層 暗灰黄色 (2.SY4/2) 砂質シルト 炭化物粒状に 1% 含む
- III c 層 黒褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト 黄褐色 (2.SY5/3) シルト 30% 含む
- IV a 層 灰色 (7.SY4/1) 粘土質シルト 硬く締まる 炭化成分 (高細小骨) 多く含む [地山]
- IV b 層 灰色 (5Y4/1) 細砂 硬く締まる [地山]

#### SI2

- 1 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト  
灰色 (5Y5/1) シルト粒状に 3% 含む  
炭化物粒状に 1% 含む [SI2 埋土]
- 2 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト  
灰色 (5Y5/1) シルトブロック状に  
10% 含む 硬く締まる [SI2 床面]
- 3 オリーブ黒色 (5Y3/1) 砂質シルト [SI2 側方]
- 4 オリーブ黒色 (5Y3/1) 砂質シルト  
灰色 (5Y5/1) シルトブロック状に  
30% 含む [SI2 側方]
- 5 灰色 (7.SY4/1) 粘土質シルト  
オリーブ黒色 (5Y3/1) 砂質シルト  
10% 含む [SI2 側方]

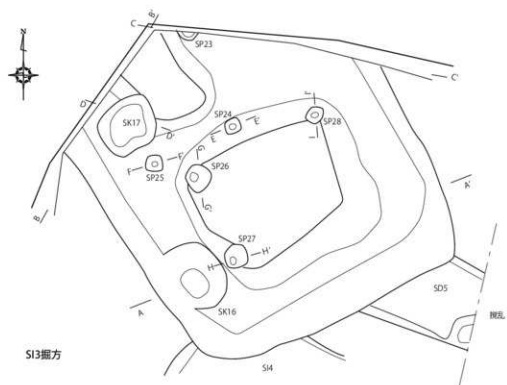
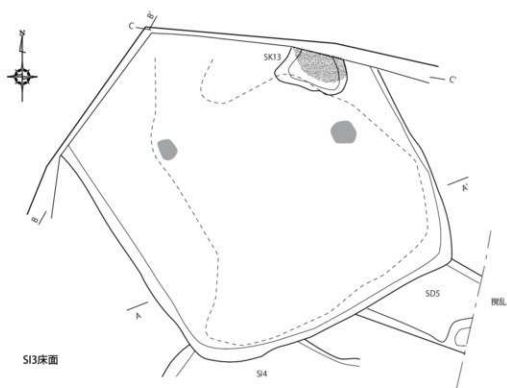
#### SK3

- 6 オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂質シルト [SK3 埋土]
- 7 灰色 (7.SY4/1) 砂質シルト  
オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂質シルト 10% 含む [SK3 埋土]

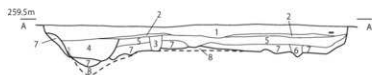


第6図 SI1-2



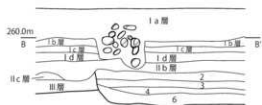


第7図 SI3(1)



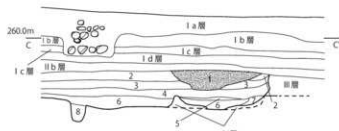
**SI3**

- 1 黒褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト 炭化物粒状に 1% 含む [埋土]
- 2 黒褐色 (2.SY3/1) 砂質シルト 灰黄色 (2.SY5/1) シルト互層状に 30% 含む 炭化物層状に 3% 含む 硬く締まる [床面]
- 3 暗灰黄色 (2.SY4/2) 砂質シルト 暗灰黄色 (2.SY5/2) シルト粒状に 30% 含む
- 4 黒褐色 (2.SY3/1) 砂質シルト 暗灰黄色 (2.SY5/2) シルト粒状に 5% 含む 炭化物粒状に 3% 含む [SK16 埋土]
- 5 暗灰黄色 (2.SY4/2) 砂質シルト 暗灰黄色 (2.SY5/2) シルトブロック状・粒状に 10% 含む [SI3 掘方]
- 6 黄灰色 (2.SY4/1) 砂質シルト 灰黄色 (2.SY6/2) シルト 10% 含む [SI3 建て替え前の Pit か]
- 7 灰黄色 (2.SY4/1) 砂質シルト 灰黄色 (2.SY6/2) シルトブロック状に 30% 含む [SI3 建て替え前の掘方か]
- 8 灰黄色 (2.SY6/2) シルト 酸化鉄分 (高錳小顆) 多量に含む [地山]



**B 地区北壁・西壁基本断層**

- I a 層 表土・造成土
- I b 層 暗灰黄色 (2.SY5/2) 砂質シルト 炭化物粒状に 3% 含む [近代]
- I c 層 灰黄色 (2.SY5/1) 砂質シルト 下面に酸化鉄分沈着 [近世～近代 水田味土少]
- I d 層 黄灰色 (2.SY5/1) 粘土シルト 下面に酸化鉄分沈着 [水田味土少]
- II b 層 黒褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト 炭化物粒状に 3% 含む [古墳遺物包含層]
- III 層 灰色 (SY4/1) 砂質シルト [養生～古墳遺物包含層]
- IV 層 灰オリーブ色 (SY5/2) 粘土質シルト [地山]



- 1 黒褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト 炭化物 30% 含む 土器片多く含む [SK13 埋土・炭化物層]
- 2 黒褐色 (2.SY3/1) 砂質シルト 炭化物粒状に 1% 含む [SI3 埋土]
- 3 黒褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト 灰オリーブ色 (SY5/2) シルト粒状に 3% 含む 炭化物粒状に 3% 含む [SI3 埋土]
- 4 黒褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト 灰オリーブ色 (SY5/2) シルト 7% 含む 炭化物粒状に 3% 含む [SI3 埋土]
- 5 黒褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト 炭化物粒状に 7% 含む 硬く締まる [SI3 床面]
- 6 灰黄色 (2.SY4/1) 砂質シルト 灰オリーブ色 (SY5/2) 粘土質シルトブロック状に 30% 含む [SI3 掘方]
- 7 灰オリーブ色 (SY5/2) 粘土質シルト 灰黄色 (2.SY4/1) 砂質シルト 30% 含む [SI3 掘方]
- 8 黄灰色 (2.SY4/1) 砂質シルト 灰オリーブ色 (SY5/2) 粘土質シルト粒状に 7% 含む [SP23]



**SK17**

- 1 黄灰色 (2.SY4/1) 砂質シルト 灰黄色 (2.SY6/2) シルト粒状に 3% 含む ※SI3 掘方底面で検出



**SP24**

- 1 黒褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト 灰黄色 (2.SY6/2) シルトブロック状に 30% 含む
- 2 黒褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト ※SI3 掘方底面で検出



**SP25**

- 1 黄灰色 (2.SY4/1) 砂質シルト 灰黄色 (2.SY6/2) シルトブロック状に 30% 含む 炭化物粒状に 1% 含む
- 2 オリーブ黒色 (SY3/1) 砂質シルト ※SI3 掘方底面で検出



**SP26**

- 1 黄灰色 (2.SY4/1) 砂質シルト 灰黄色 (2.SY6/2) シルト粒状に 3% 含む ※SI3 掘方底面で検出



**SP27**

- 1 黄灰色 (2.SY4/1) 砂質シルト 灰黄色 (2.SY6/2) シルト粒状に 3% 含む ※SI3 掘方底面で検出

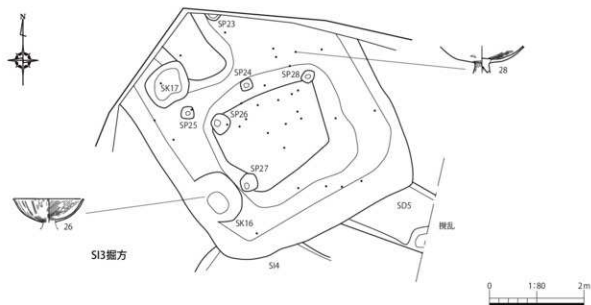
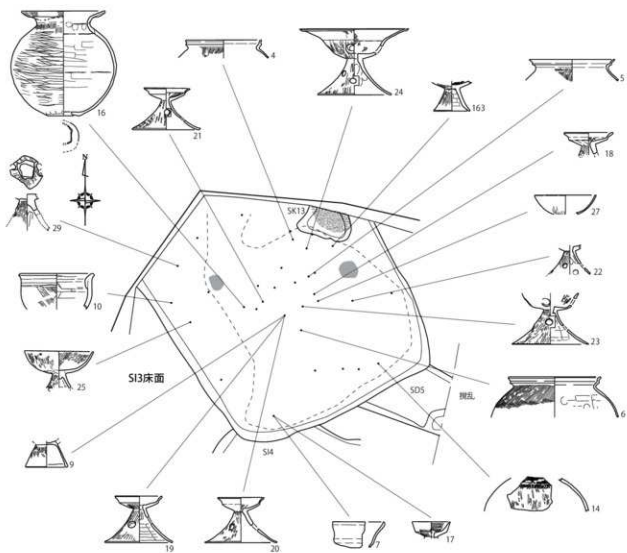


**SP28**

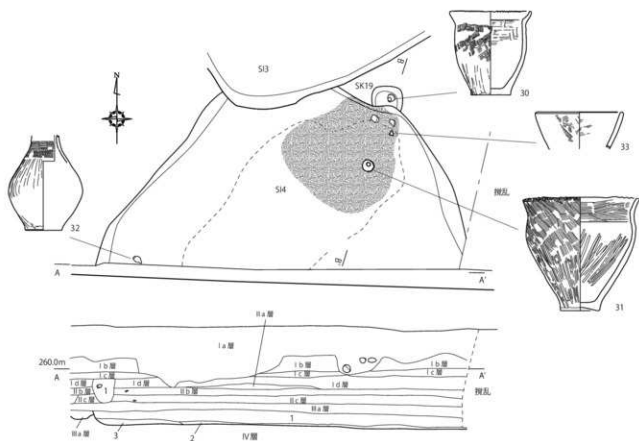
- 1 黄灰色 (2.SY4/1) 砂質シルト ※SI3 掘方底面で検出



第8図 SI3(2)



第9图 S13(3)

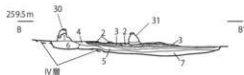


#### B地区南理

- I a 層 表土・造成土  
 I b 層 暗灰黄色 (2.SY5/2) 砂質シルト  
 炭化物粘状に3%含む [近現代]  
 I c 層 黄灰色 (2.SY5/1) 砂質シルト  
 下面に酸化鉄分沈着 [水田床土 近世～近代か]  
 I d 層 黄灰色 (2.SY5/1) 粘土質シルト  
 下面に酸化鉄分沈着 [水田床土]  
 II a 層 暗オリーブ褐色 (2.SY3/3) 砂質シルト  
 酸化鉄分多く含む [古代か]  
 II b 層 黒褐色 (2.SY3/2) 砂質シルト [古墳遺物包含層]  
 II c 層 黄灰色 (2.SY4/1) 砂質シルト [層間の薄砂層]  
 III a 層 オリーブ黒色 (SY3/2) 砂質シルト [発生～古墳遺物包含層]  
 III b 層 オリーブ黒色 (SY3/2) 砂質シルト  
 灰オリーブ色 (SY5/2) シルト ブロック上に30%含む  
 IV 層 灰オリーブ色 (SY5/2) 粘土質シルト [地山]

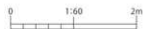
#### S14

- 1 オリーブ黒色 (SY3/2) 砂質シルト 炭化物粘状に1%含む [S14 埋土]  
 2 オリーブ黒色 (SY2/2) 砂質シルト  
 灰オリーブ色 (SY5/2) シルトブロック状に10%含む  
 3 オリーブ黒色 (SY3/1) 砂質シルト

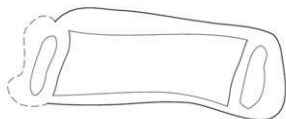
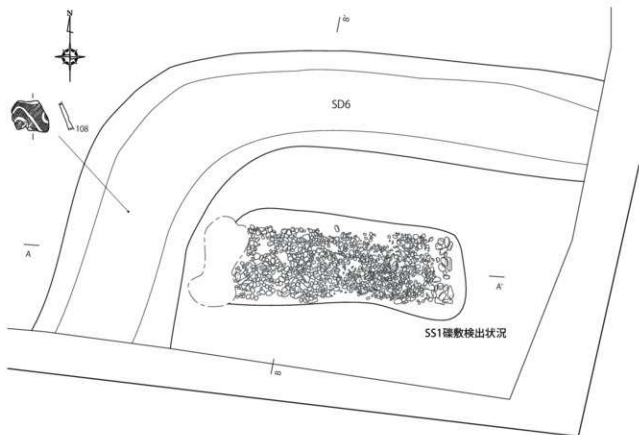


#### S14 炭化物堆積範囲

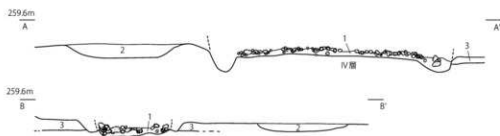
- 1 暗灰黄色 (2.SY5/2) 砂質シルト  
 2 暗灰黄色 (2.SY4/2) 砂質シルト 下位に薄く層状に炭化物堆積 [炭化物層]  
 3 暗灰黄色 (2.SY4/2) 砂質シルト 下位に薄く層状に炭化物堆積 [炭化物層]  
 4 暗灰黄色 (2.SY5/2) 砂質シルト 硬くしまる [S14 床面]  
 5 暗灰黄色 (2.SY4/2) 砂質シルト  
 灰オリーブ色 (SY3/2) シルト 10%含む 炭化物3%含む [S14 覆方]  
 6 暗灰黄色 (2.SY4/2) 砂質シルト 灰オリーブ色 (SY5/2) シルト 30%含む  
 炭化物ブロック状に5%含む [SK19]  
 7 灰オリーブ色 (SY5/2) 粘土質シルト 暗灰黄色 (2.SY4/2) 砂質シルト 30%含む  
 IV 層 灰オリーブ色 (SY5/2) 粘土質シルト [地山]



第10図 S14

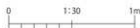


SS1完備状況

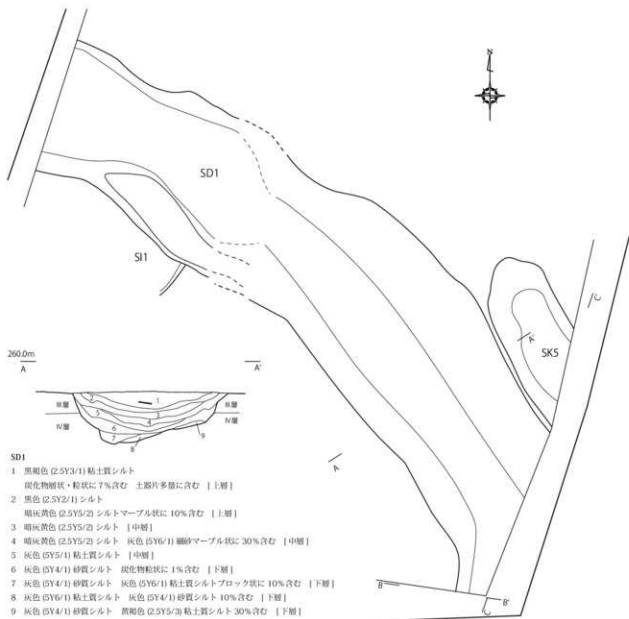


SS1・SD6

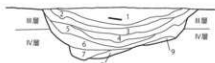
- 1 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト 径3～5cmの礫多量に含む 礫は角のとれた河原石 [SS1]
- 2 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルトブロック状に10%含む [SD6]
- 3 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質シルト [礫敷遺構検出面の地山]
- IV層 暗灰黄色 (2.5Y3/2) 砂質シルト 硬くしまる [地山]



第11図 SS1・SD6

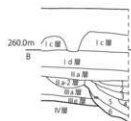


260.0m  
A



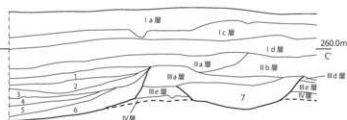
SD1

- 1 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土質シルト  
炭化物粒状・粒状に7%含む 土源片多量に含む [上層]
- 2 黒色 (2.5Y2/1) シルト  
暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルトマーブル状に10%含む [上層]
- 3 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト [中層]
- 4 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト 灰色 (5Y6/1) 細砂マーブル状に30%含む [中層]
- 5 灰色 (5Y5/1) 粘土質シルト [中層]
- 6 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト 炭化物粒状に1%含む [下層]
- 7 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト 灰色 (5Y6/1) 粘土質シルトブロック状に10%含む [下層]
- 8 灰色 (5Y6/1) 粘土質シルト 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト10%含む [下層]
- 9 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土質シルト30%含む [下層]



A地区基本層序

- Ia層 現表土(砂石層)
- Ic層 灰色 (7.5Y4/1) 砂質シルト 酸化鉄分下位に沈着
- I d層 灰色 (5Y4/1) 粘土質シルト 炭化物粒状に3%含む
- IIa層 黒褐色 (10YR3/1) 砂質シルト 炭化物粒状に3%含む
- IIa-2層 黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト
- IIb層 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質シルト
- IIIa層 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト 炭化物粒状に1%含む
- III d層 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト
- III e層 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土
- IV層 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト 酸化鉄分(高砂小層)多く含む [地山]

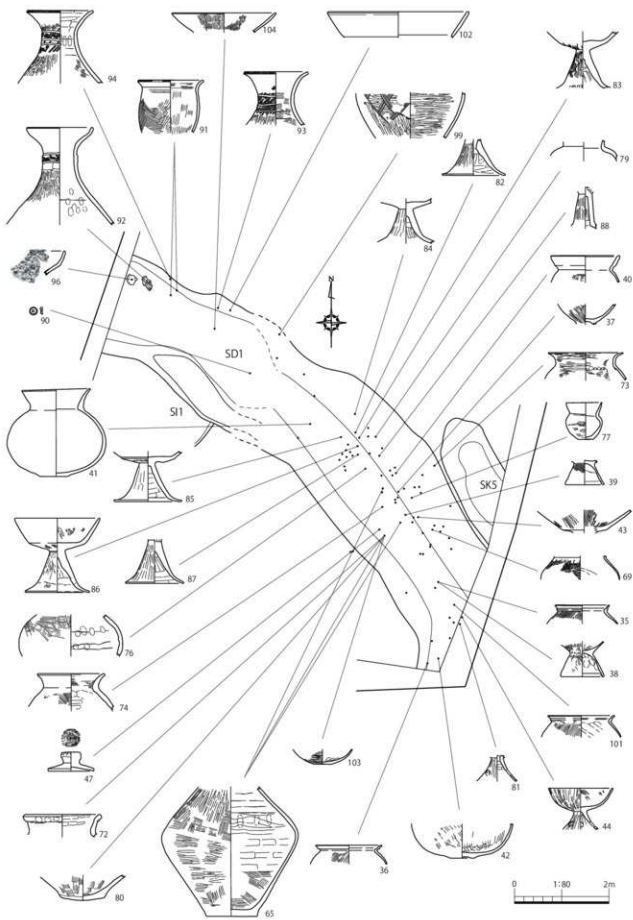


SD1・SK5

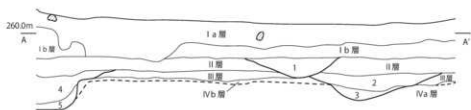
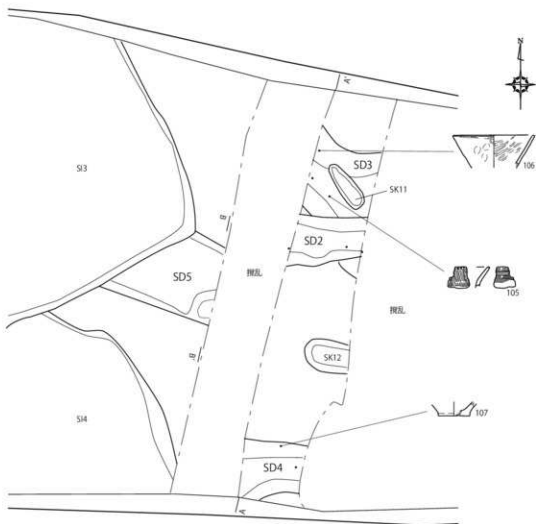
- 1 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質シルト 炭化物粒状に3%含む [SD1上層]
- 2 黒色 (2.5Y2/1) 粘土質シルト 炭化物粒状に7%含む [SD1上層]
- 3 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト [SD1中層]
- 4 灰黄色 (2.5Y7/2) 細砂 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト30%含む [SD1中層]
- 5 灰白色 (2.5Y7/1) 粘土質シルト [SD1中層]
- 6 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘土質シルト 炭化物粒状に1%含む [SD1下層]
- 7 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト [SK5]

0 1:60 2m

第12図 SD1・SK5(1)



第13图 SD1·SK5(2)



**B地区基本層序**

- Ia層 瓦礫層
- Ib層 黄褐色 (2.5Y5/1) 粘土質シルト [近世か]
- II層 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘土質シルト [古墳遺物包含層]
- III層 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土質シルト [古墳遺物包含層]
- IVa層 灰色 (5Y5/1) 粘土質シルト 硬く締まる [地山]
- IVb層 灰色 (7.5Y5/1) 砂質シルト 酸化鉄分 (高鉄小礫) 多く含む [地山]  
※南西部に埋積

**SD2・3・4**

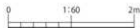
- 1 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土質シルト  
黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土質シルトブロック状に 10% 含む [SD2 埋土]
- 2 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト  
炭化物粒状に 1% 含む 締まりゆるい [SD3 埋土]
- 3 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト  
灰色 (5Y5/1) 粘土質シルトブロック状に 30% 含む [SD3 埋土]
- 4 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 砂質シルト [SD4 埋土]
- 5 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 砂質シルト  
灰色 (7.5Y5/1) 砂質シルトブロック状に 30% 含む [SD4 埋土]

259.5m



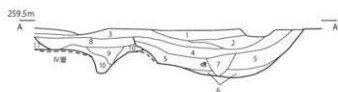
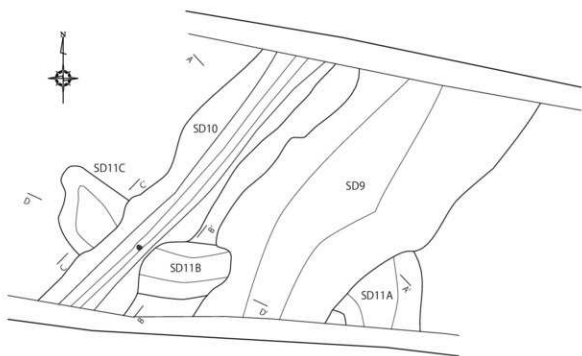
**SD5**

- 1 オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘土質シルト 灰色 (5Y5/1) 粘土質シルトブロック状に 10% 含む
- 2 灰色 (5Y4/1) 粘土質シルト



第14図 SD2~5





**SD9・10**

- 1 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト [SD9・10 上面]
  - 2 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質シルト 灰黄色 (2.5Y6/2)シルト粒状に3%含む [SD9・10 上面]
  - 3 灰黄色 (2.5Y6/2)シルト 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質シルト10%含む [SD9・10 上面]
  - 4 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質シルト 炭化物粒状に1%含む [SD9 埋土]
  - 5 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト やや硬く締まる [SD9 埋土]
  - 6 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト しまりゆるい [SD9 埋土]
  - 7 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質シルト [SD9 埋土]
  - 8 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質シルト [SD10 埋土]
  - 9 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質シルト [SD10 埋土]
  - 10 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質シルト 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質シルトブロック状に30%含む [SD10 埋土]
  - 11 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト 硬くしまる [地山]
- IV層 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質シルト 酸化鉄分 (高鉄小粒) 多く含む [地山]



**SD11B**

- 1 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト
- 2 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト30%含む

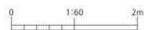


**SD11C**

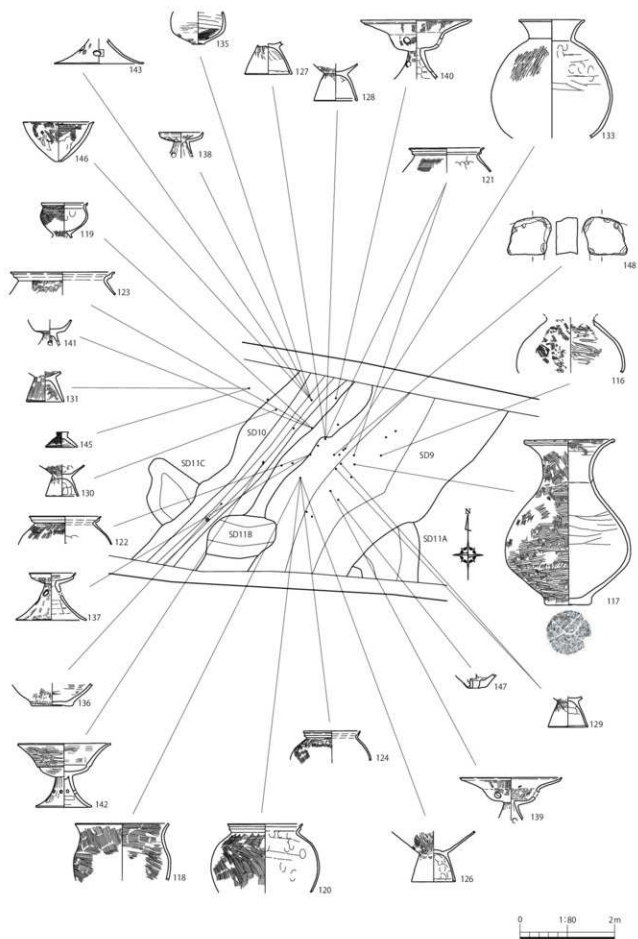
- 1 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト
- 2 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト30%含む



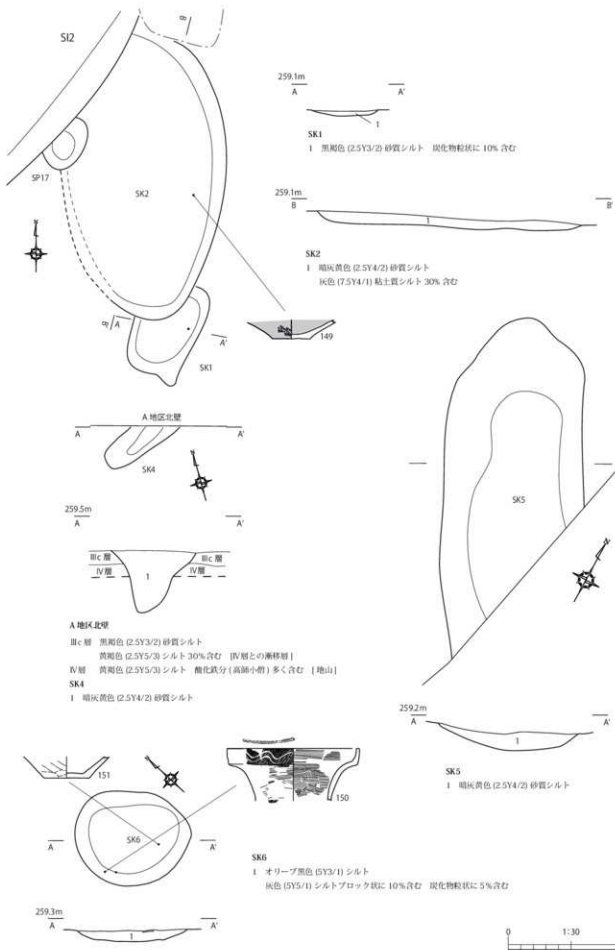
SD10掘方エレベーション図



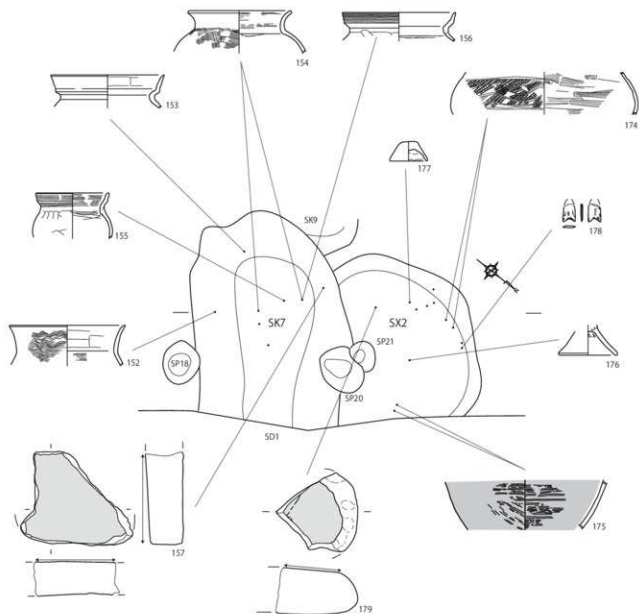
第15図 SD9・10・11(1)



第16図 SD9・10・11(2)



第17図 SK1・2・4・5・6



259.4m

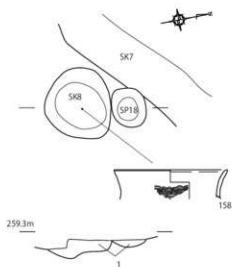


SK7・SX2

- 1 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト 炭化物粒状に 5% 含む [SK7]
- 2 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト [SK7]
- 3 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト 黄褐色 (2.5Y5/3) シルトブロック状に 30% 含む [SK7]
- 4 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルトブロック状に 10% 含む  
炭化物粒状に 7% 含む [SX2]
- 5 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土質シルト 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルトブロック状に 30% 含む [SX2]

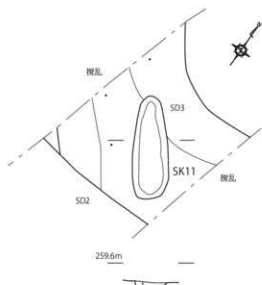
0 1:30 1m

第18図 SK7・SX2



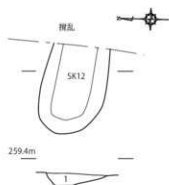
SK8・SP18

1 黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト 炭化物粒状に1%含む



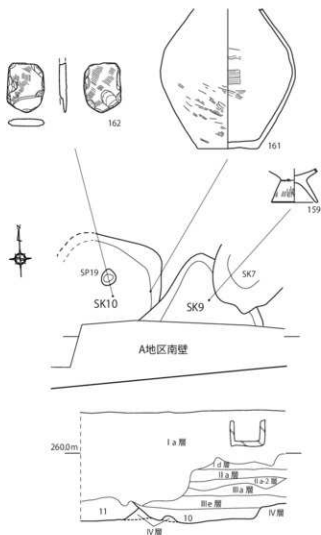
SK11

1 黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト 炭化物 30%含む



SK12

1 オリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト  
炭化物粒状に1%含む しまりゆるい



A地区南壁

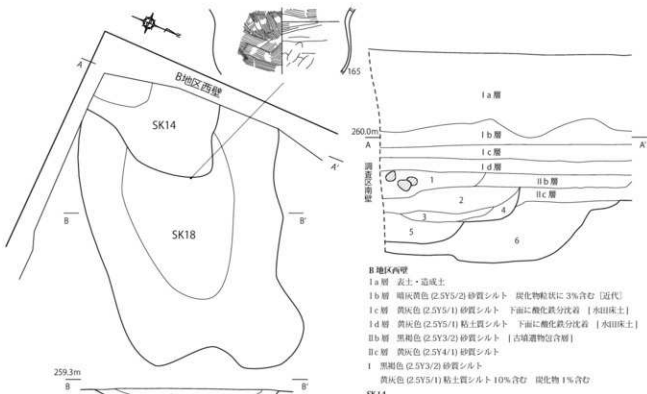
- I a層 現表土(卵石層)
- I d層 灰色(5Y4/1)粘土質シルト 炭化物粒状に3%含む
- II a層 黒褐色(10YR3/1)砂質シルト 炭化物粒状に3%含む
- II a-2層 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト
- III a層 黒褐色(2.5Y3/2)砂質シルト 炭化物粒状に1%含む
- III e層 灰黄色(2.5Y6/2)粘土
- IV層 黄褐色(2.5Y5/3)シルト 高砂小骨多く含む [地山]

SK9・10

- 1 灰色(5Y4/1)砂質シルト [SK9埋土]
- 2 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土質シルト [SK10埋土]



第19図 SK8~12



**B地区西壁**

Ia層 表土・造成土

Ib層 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質シルト 炭化物粒状に3%含む [近代]

Ic層 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質シルト 下面に酸化鉄分浸着 [水田床土]

Id層 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土質シルト 下面に酸化鉄分浸着 [水田床土]

IIb層 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト [古墳遺物区含層]

IIc層 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質シルト

1 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト

2 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土質シルト 10%含む 炭化物1%含む

**SK14**

2 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質シルト

3 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質シルト 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土質シルト 10%含む

4 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土質シルト 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質シルト 10%含む

5 黄灰色 (2.5Y4/1) 細砂 炭化物3%含む

**SK18**

6 黄灰色 (2.5Y4/1) 細砂

オリブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質シルトブロック状に10%含む

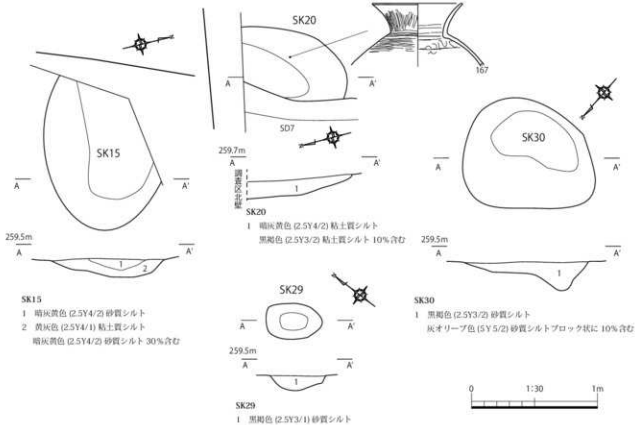
**SK18**

1 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト 炭化物粒状に1%含む

2 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト 灰オリブ色 (5Y5/2) シルトを

ブロック状に30%含む

3 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト 炭化物を多量に含む



**SK15**

1 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト

2 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土質シルト

暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト 30%含む

**SK29**

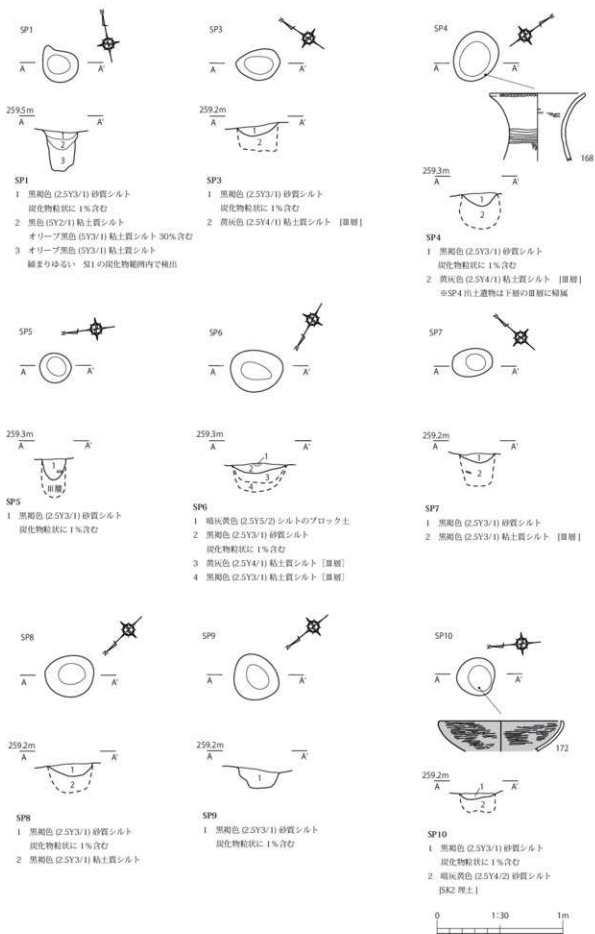
1 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質シルト

**SK30**

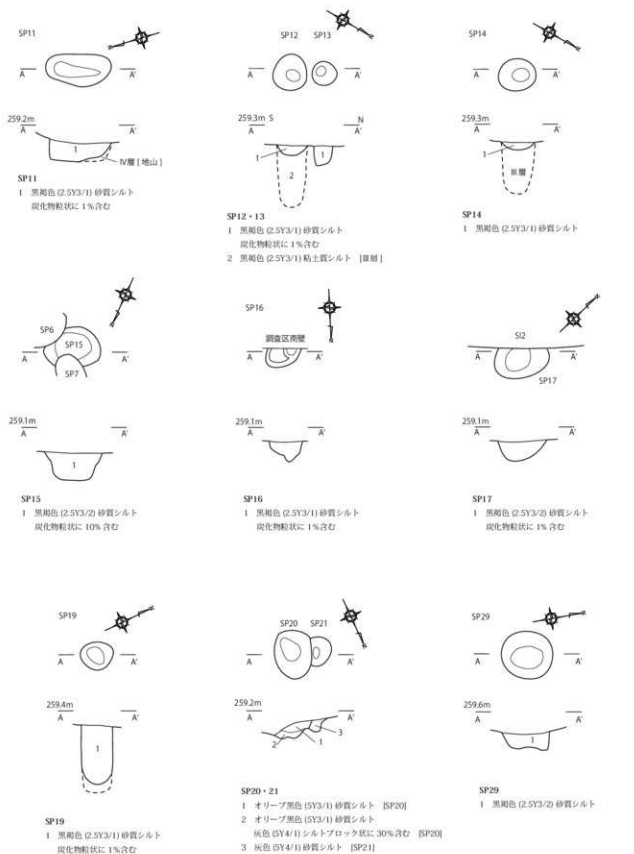
1 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質シルト

灰オリブ色 (5Y5/2) 砂質シルトブロック状に10%含む

第20図 SK14・15・18・20・29・30



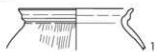
第21図 SP1～10



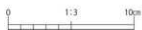
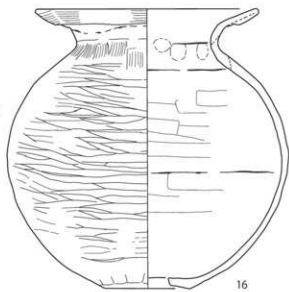
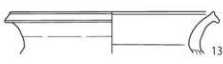
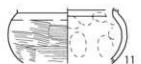
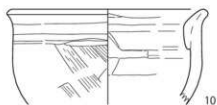
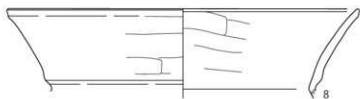
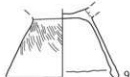
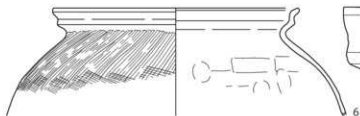
第22図 SP11～17・19～21・29



SI2

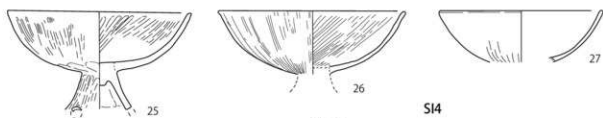
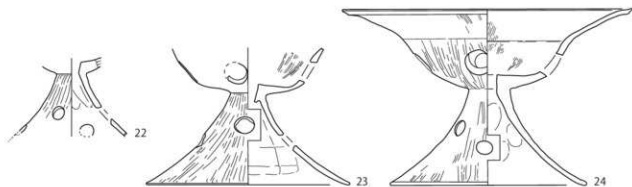
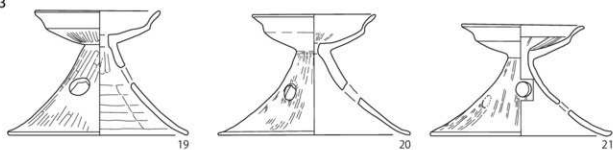


SI3

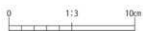
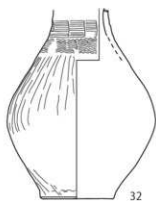
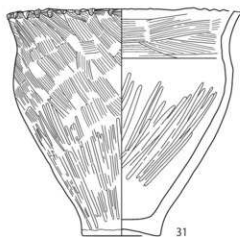
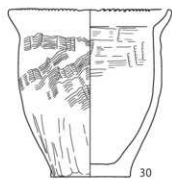


第 23 図 遺構出土遺物 (1)

S13

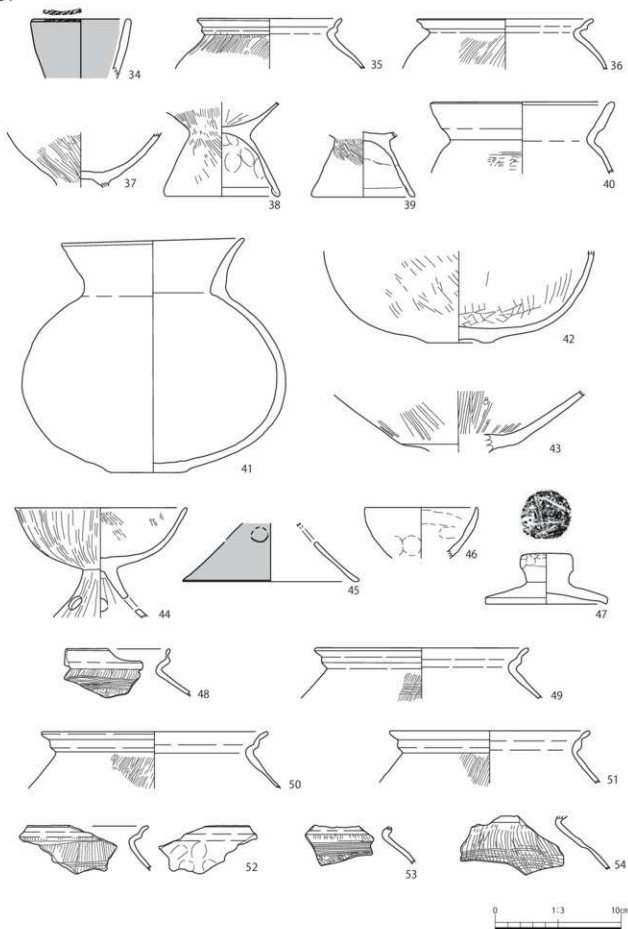


S14



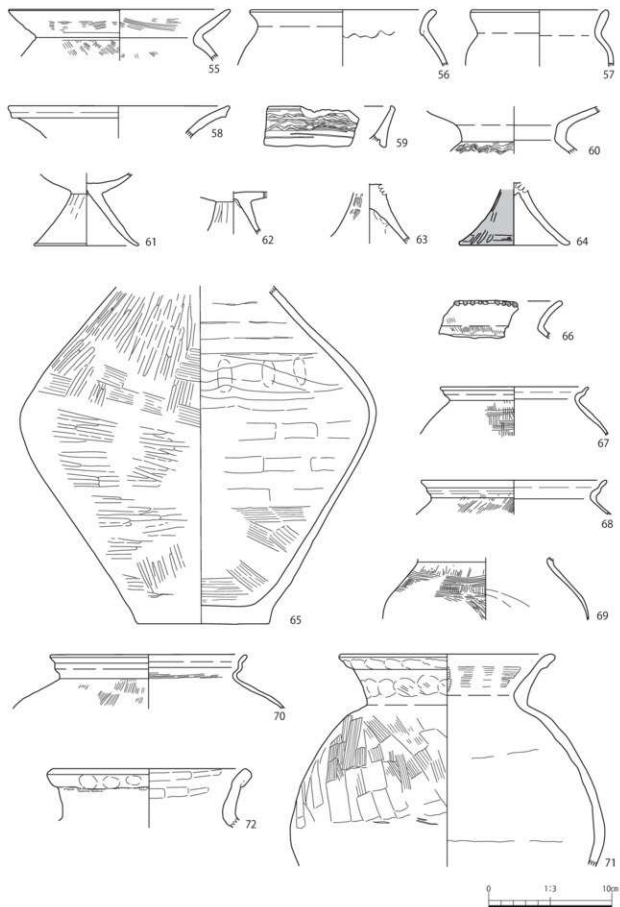
第24図 遺構出土遺物(2)

SD1



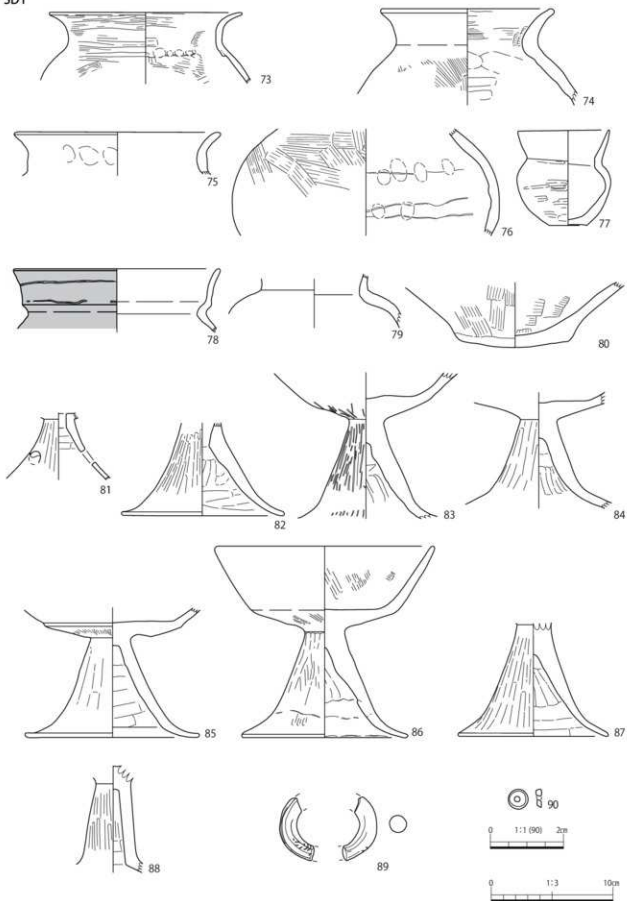
第 25 図 遺構出土遺物 (3)

SD1



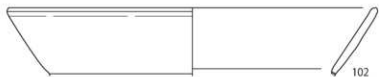
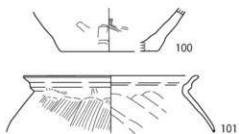
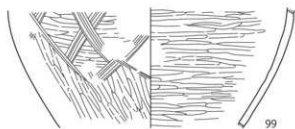
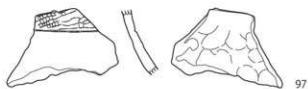
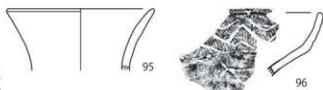
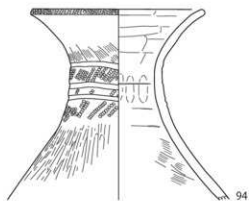
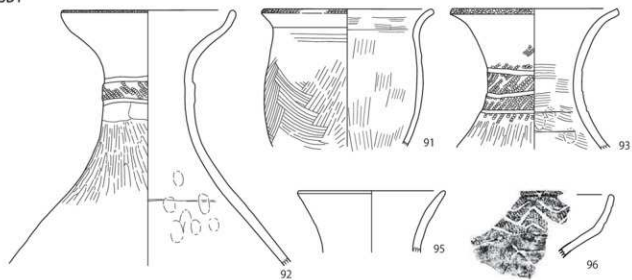
第26図 遺構出土遺物(4)

SD1

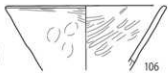


第 27 図 遺構出土遺物 (5)

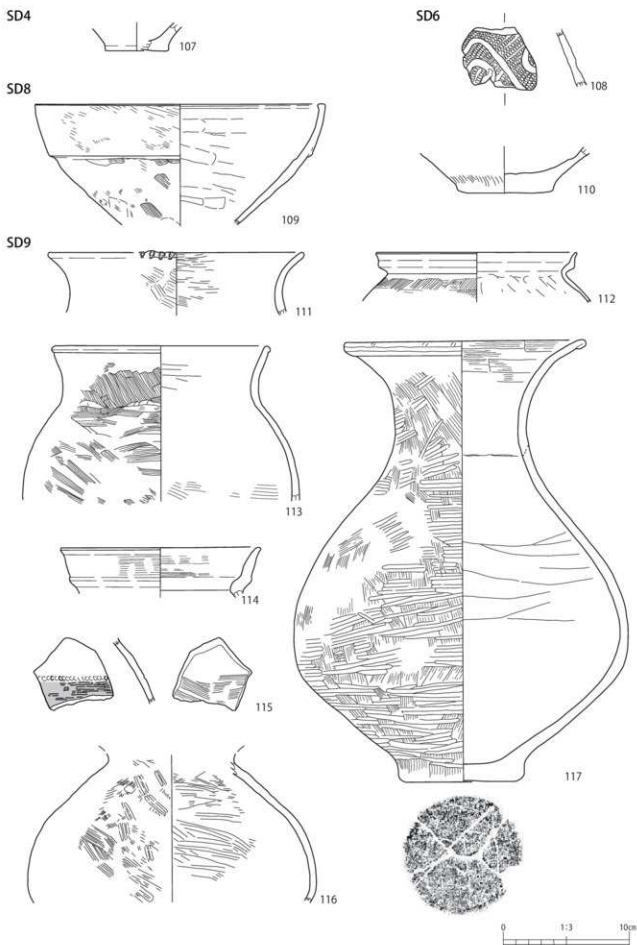
SD1



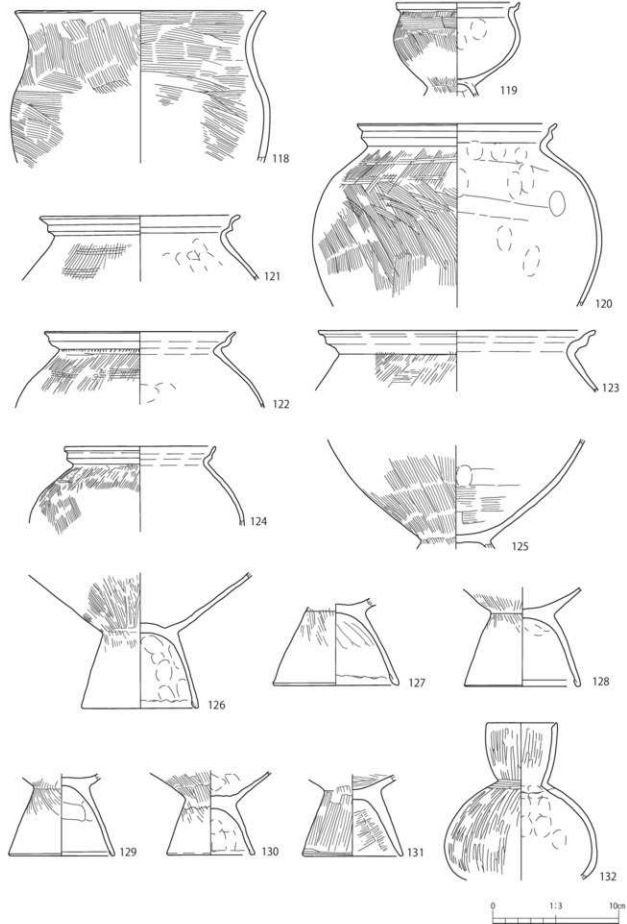
SD3



第 28 図 遺構出土遺物 (6)



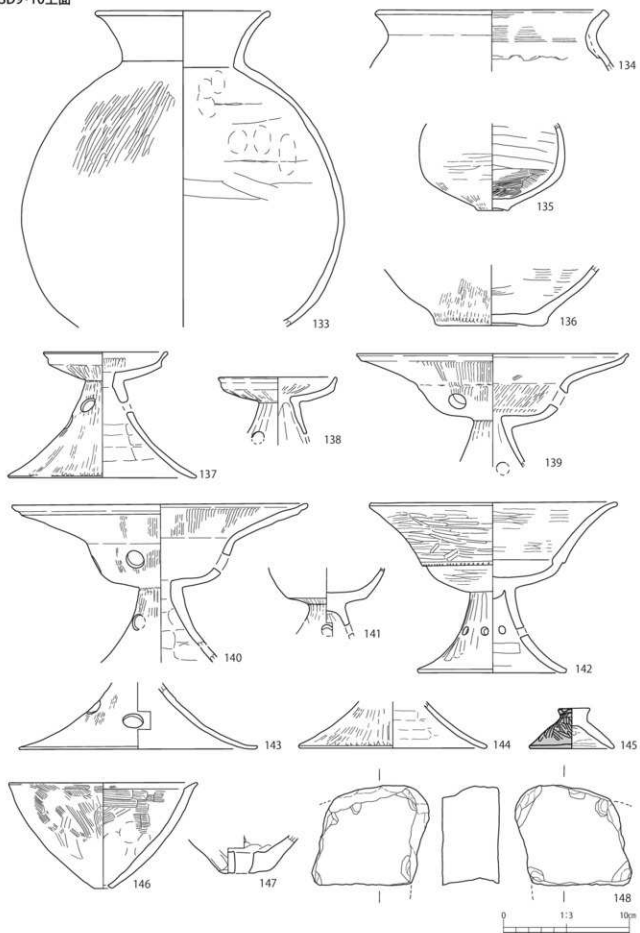
第 29 図 遺構出土遺物 (7)



第 30 図 遺構出土遺物 (8)



SD9-10上面



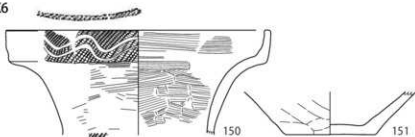
第 31 圖 遺構出土遺物 (9)

SK2



149

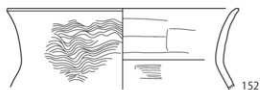
SK6



150

151

SK7



152



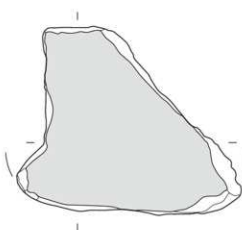
153



154

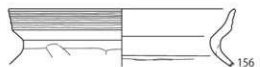


155

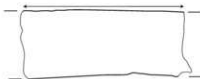


1

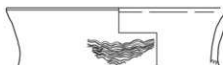
157



156

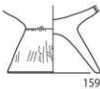


SK8



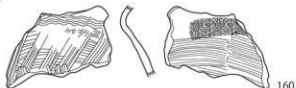
158

SK9



159

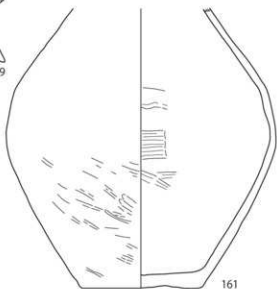
SK10



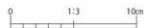
160



162



161



第 32 図 遺構出土遺物 (10)

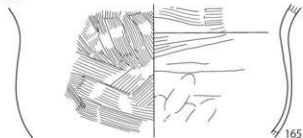
SK13



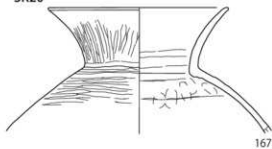
SK17



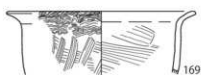
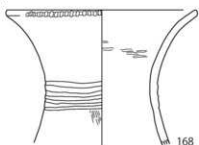
SK18



SK20



SP4



SP5



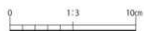
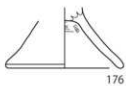
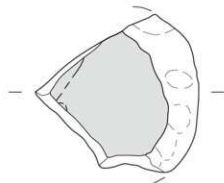
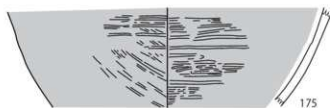
SP10



SP20

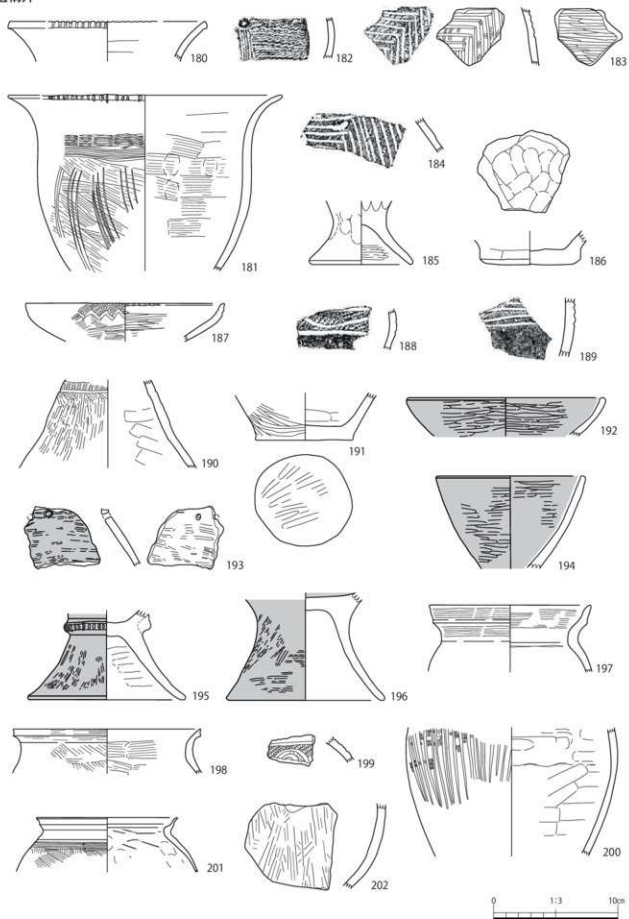


SX2



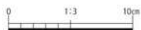
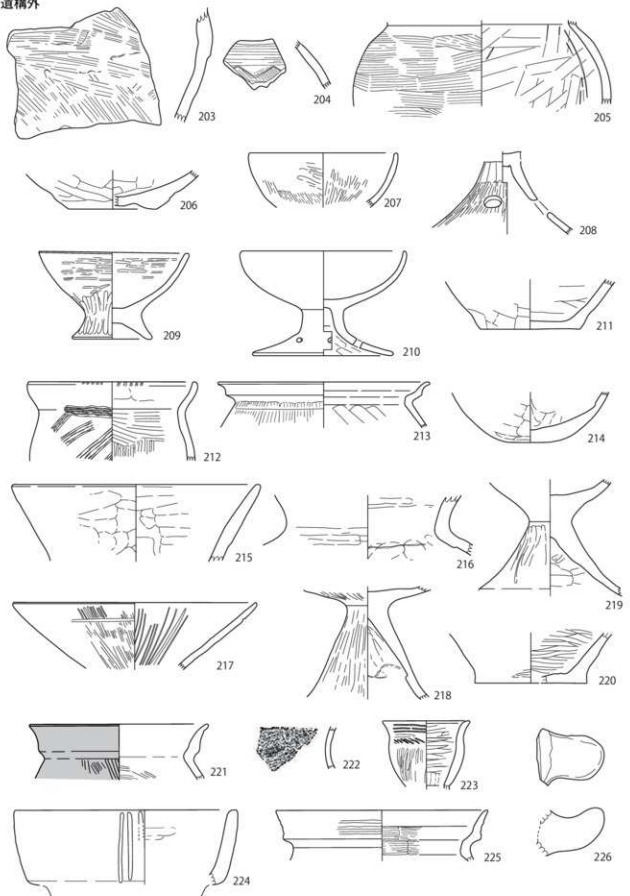
第33図 遺構出土遺物(11)

遺構外



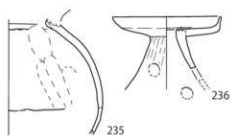
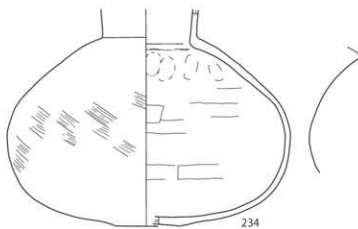
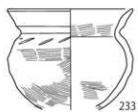
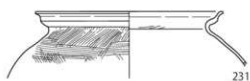
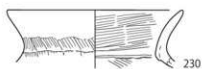
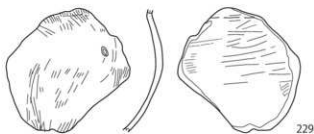
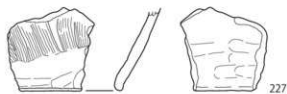
第 34 図 遺構外出土遺物 (1)

遺構外

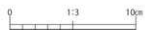
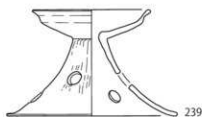


第 35 図 遺構外出土遺物 (2)

遺構外



試掘(T6)



第 36 図 遺構外出土遺物 (3)















## 第5章 自然科学分析

### 第1節 伊勢町遺跡（幸町1188-22他地点）出土試料の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・黒沼保子

#### 1. はじめに

甲府市の伊勢町遺跡（幸町1188-22他地点）から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

#### 2. 試料と方法

試料は、土壌水洗で得られた炭化材3点と炭化草本1点の4点である。A地区のS11（試料No.S1）出土の炭化材（PLD-51329）と、B地区のS14（試料No.S12）出土の炭化材（PLD-51330）、C地区のSD8（試料No.S15）出土の炭化草本（PLD-51331）とSS1（試料No.SS1）出土の炭化材（PLD-51332）である。炭化材は、3点とも最終形成年輪は残っていないかった。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-51329	調査区：A地区 遺構：S11 試料No.S1	種類：炭化材（クスノキ科） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L水酸化ナトリウム：1.0 mol/L塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51330	調査区：B地区 遺構：S14（床面、裏の中の土） 試料No.S12	種類：炭化材（カヤ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L水酸化ナトリウム：1.0 mol/L塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51331	調査区：C地区 遺構：SD8 試料No.S15	種類：炭化草本（イネ科） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L水酸化ナトリウム：1.0 mol/L塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51332	調査区：C地区 遺構：SS1（東端部掘り込み） 試料No.R7	種類：炭化材（ヒノキ科） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L水酸化ナトリウム：1.0 mol/L塩酸：1.2 mol/L）

#### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の

統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い（14Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP±1σ)	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-51329 試料No.S1	-27.81±0.16	1759±19	1760±20	249-259 cal AD (12.65%)	239-265 cal AD (20.45%)
				279-297 cal AD (21.83%)	272-351 cal AD (74.61%)
				307-335 cal AD (33.79%)	358-360 cal AD (0.39%)
PLD-51330 試料No.S12	-27.20±0.20	1887±19	1885±20	126-171 cal AD (47.40%)	84-95 cal AD (3.22%)
				183-204 cal AD (20.87%)	117-217 cal AD (92.23%)
PLD-51331 試料No.S15	-12.38±0.15	1859±18	1860±20	131-141 cal AD (9.44%)	128-232 cal AD (95.45%)
				158-191 cal AD (32.85%)	
				201-225 cal AD (25.98%)	
PLD-51332 試料No.R7	-22.83±0.14	2458±19	2460±20	748-688 cal BC (33.65%)	753-682 cal BC (35.60%)
				665-643 cal BC (11.66%)	668-631 cal BC (14.56%)
				566-515 cal BC (21.05%)	625-609 cal BC (2.54%)
				496-490 cal BC (1.90%)	593-458 cal BC (39.27%)
					440-419 cal BC (3.47%)

#### 4. 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち2σ暦年代範囲（確率95.45%）に着目して結果を整理する。なお、縄文時代の土器編年と暦年代の対応関係については小林（2017）、弥生時代の暦年代については藤尾（2013）、古墳時代の暦年代については赤塚（2009）を参照した。

A地区のS11（試料No.S1）出土の炭化材（PLD-51329）は、239-265 cal AD (20.45%)、272-351 cal AD (74.61%)、358-360 cal AD (0.39%)の暦年代範囲を示した。これは3世紀前半～4世紀中頃で、弥生時代末期～古墳時代中期に相当する。

B地区のS14（試料No.S12）出土の炭化材（PLD-51330）は、84-95 cal AD (3.22%)および117-217 cal AD (92.23%)の暦年代範囲を示した。これは1世紀後半～末および2世紀前半～3世紀前半で、弥生時代後期に相当する。

C地区のSD8（試料No.S15）出土の炭化草本（PLD-51331）は、128-232 cal AD (95.45%)の暦年代範囲を示した。これは2世紀前半～3世紀前半で、弥生時代後期後半に相当する。

C地区のSS1（試料No.SS1）出土の炭化材（PLD-51332）は、753-682 cal BC (35.60%)、668-631 cal BC (14.56%)、625-609 cal BC (2.54%)、593-458 cal BC (39.27%)、440-419 cal BC (3.47%)の暦年代範囲を示した。これは縄文時代晩期中葉～弥生時代前期に相当する。

木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定する

と内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。S11(試料 No.S1)と、B地区のS14(試料 No.S12)、SS1(試料 No.SS1)出土の炭化材は、最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。また、SD8(試料 No.S15)出土の炭化草本は単年生でと思われるため、枯死もしくは伐採された年代を示している。

## 引用・参考文献

赤塚次郎(2009) 弥生後期から古墳中期(八王子古宮式から宇田式期)の暦年代。

日本文化財科学会第26回大会実行委員会編「日本文化財科学会第26回大会研究発表要旨集」:14-20, 日本文化財科学会。  
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

藤尾慎一郎(2013) 弥生文化像の新構築。275p, 吉川弘文館。

小林謙一(2017) 縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—。263p, 同成社。

中村俊夫(2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」:3-20, 日本第四紀学会。

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

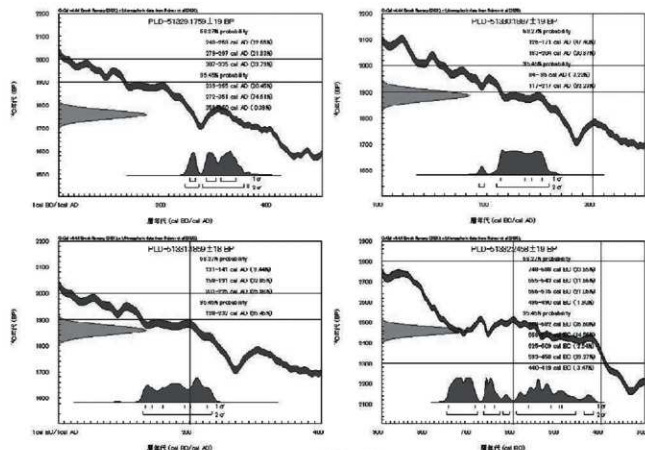


図1 暦年較正結果

## 第2節 伊勢町遺跡（幸町1188-22他地点）出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

甲府市の伊勢町遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。一部の試料は、放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

### 2. 試料と方法

試料は、土壌の水洗選別で得られた炭化材である。同定可能な炭化材を1試料につき最大5点抽出した。分析総数は27点である。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

### 3. 結果

樹種同定の結果、針葉樹のモミ属とヒノキ科、カヤ、広葉樹のクスノキ科とサクラ属、ケヤキ、コナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）、コナラ属コナラ節（以下、コナラ節）、クリーコナラ属コナラ節（以下、クリーコナラ節）、単子葉類のイネ科草本の10分類群が確認された。遺構別の樹種同定結果を表1、結果の一覧を付表1に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

#### (1) モミ属 *Abies* マツ科 図版1 1a-1c（分析No.3-2）、2c（分析No.4-2）

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織で数珠状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、1分野に1～4個存在する。

モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミやシラベ、トドマツなど約5種がある。材は軽軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性が低い。

#### (2) ヒノキ科 *Cupressaceae* 図版1 3a-3c（分析No.7）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は小型で、1分野に1～3個存在する。試料の状態が悪く、分野壁孔の型が不明瞭であるため、ヒノキ科までの同定に留めた。

表1 遺構別の樹種同定結果

樹種	調査区 A		B			C			総数
	出土地点		S14	S14床面		S08	S09	SS1東端部	
	S11	SK13 (S13内)	炭化物層間	豊の中の土		S15	土層No.5	掘り込み	
メモ番号	S1	S10	S11	S12	S15	S16	R7		
モミ属			1	1					2
ヒノキ科								1	1
カヤ			1	1					2
クスノキ科	3								3
サクラ属		1							1
ケヤキ							3		3
コナラ属クヌギ節							2		2
コナラ属コナラ節		2		1					3
クリーコナラ属コナラ節		2	2						5
イネ科草本(稗)	2		1	1		1			5
合計	5	5	5	5	1	5	1		27



- (3) カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. イチイ科 図版1 4a-4c (分析 No.3-1)、5c (分析 No.4-1)

仮道管と放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。仮道管壁に2本対のらせん肥厚がある。分野壁はヒノキ型で、1分野に4個程度存在する。

カヤは宮城県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は木理直通で緻密であり、弾性および耐久力が強く水湿にも強い。

- (4) クスノキ科 Lauraceae 図版1 6a-6c (分析 No.1-1)

やや小型の道管が、単独ないし2~4個複合してまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状~翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1~3列幅である。

クスノキ科は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。ニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属など8属がある。

- (5) サクラ属 (広義) *Prunus* s.l.バラ科 図版1・2 7a-7c (分析 No.2-1)

やや小型の道管が、単独あるいは斜め方向に2~3個複合する散孔材である。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、1~5列幅である。

サクラ属は温帯に生育する落葉または常緑の高木または低木である。サクラ属は、さらにサクラ亜属やスモモ亜属、モモ亜属、ウワミズザクラ亜属などに分類され、25種がある。木材組織からはモモとバクチノキ以外は識別困難なため、この2種を除いたサクラ属とする。材は、比較的重硬および緻密だが、加工は容易である。

- (6) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版2 8a-8c (分析 No.6-3)

大型の道管が年輪のはじめに1列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は3~5列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶をもつ。

ケヤキは暖帯下部から温帯に分布する落葉高木で、肥沃地や河畔によく生育する。材は重硬だが、加工はそれほど困難ではなく、保存性が高い。

- (7) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版2 9a-9c (分析 No.6-1)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギとアベマキがある。材は重硬および強靱で、加工困難である。

- (8) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版2 10a-10c (分析 No.2-4)、11a (分析 No.4-3)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は暖帯から温帯下部に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

- (9) クリ・コナラ属コナラ節 *Castanea crenata* Siebold et Zucc. - *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版2 12a-12c (分析 No.2-2)

晩材部において、薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。試料は1年輪未満で小さく、早材部の道管配列や広放射組織の有無は確認できなかった。

- (10) イネ科 Poaceae 図版2 13a (分析 No.1-2)、14a (分析 No.3-5)

柔細胞と維管束で構成される単子葉類である。維管束が柔細胞中に散在する不斉中心柱で、維管束を囲む維管束鞘は薄い。程の組織のみから属や種を識別するのは難しい。

#### 4. 考察

A地区のSI1では、クスノキ科とイネ科草本が確認された。B地区のSK13では、サクラ属とコナラ節、クリーコナラ節が確認された。SI4の炭化物範囲ではモミ属とカヤ、クリーコナラ節、イネ科草本、SI4の床面壺の中の土では、モミ属とカヤ、コナラ節、クリーコナラ節、イネ科草本が確認された。C地区のSD8では、イネ科草本のみが確認された。SD9の土層No.5では、ケヤキとクスギ節が確認された。SS1東端部掘り込みでは、ヒノキ科が確認された。

針葉樹のモミ属やヒノキ科、カヤは山林に生育する樹木である。材質はいずれも軽軟で加工容易である(平井, 1996)。広葉樹のクスノキ科やサクラ属は山地~平野、ケヤキやクスギ節、コナラ節は二次林にもよく生育する樹木である。サクラ属とケヤキ、クスギ節、コナラ節の材は重硬である(平井, 1996)。いずれも温帯から暖帯に分布する樹木であり、遺跡周辺に生育していた樹木が伐採利用されたと推測される。

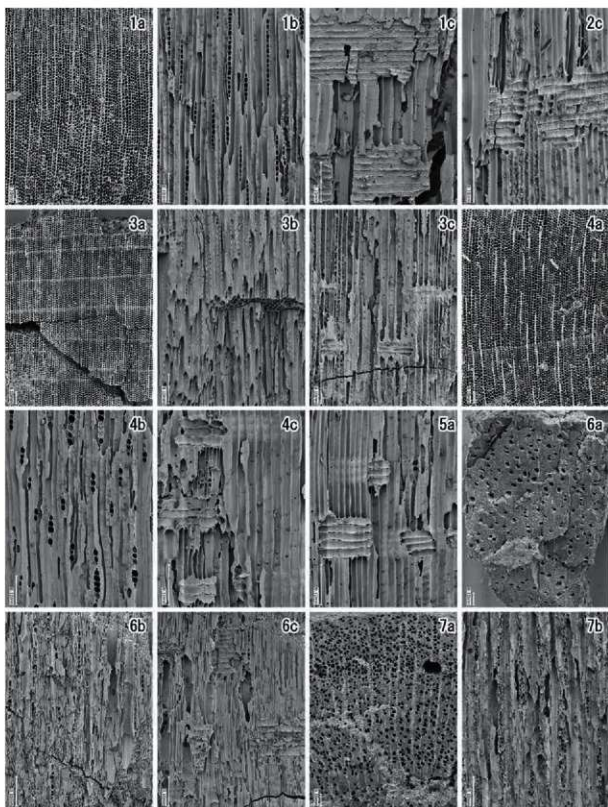
#### 引用・参考文献

平井信二(1996)木の大本科, 394p, 朝倉書店.

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌, 238p, 海青社.

付表1 樹種同定結果一覧

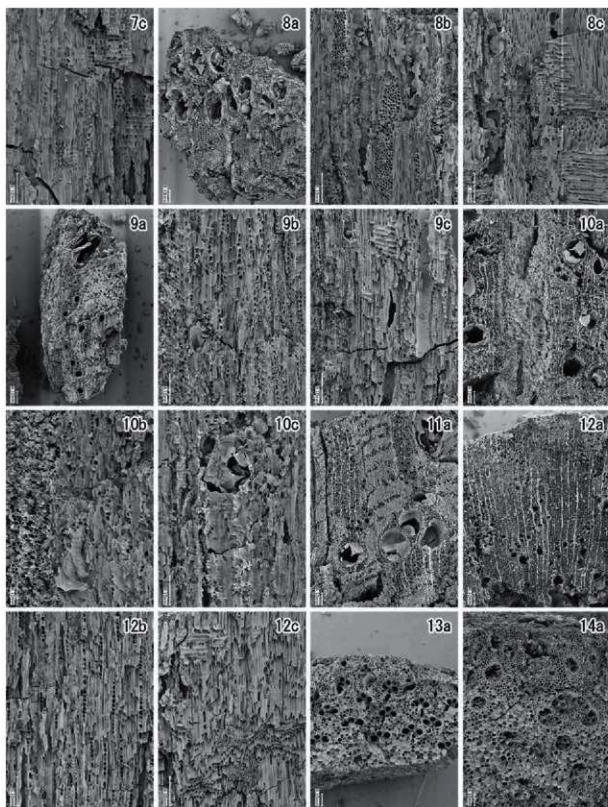
分析No.	メネ番号	調査区	出土地点	水浸量 (CC)	備考	樹種 (部位)	形状	残存直径	年代測定番号
1-1	SI	A	SI1	400	整穴 炭化物	クスノキ科	破片	0.5×0.5cm	
1-2	SI	A	SI1	400	整穴 炭化物	イネ科草本 (種)	破片	0.5×0.2cm	PLD-51329
1-3	SI	A	SI1	400	整穴 炭化物	クスノキ科	破片	0.5×0.2cm	
1-4	SI	A	SI1	400	整穴 炭化物	イネ科草本 (種)	破片	0.3×0.3cm	
1-5	SI	A	SI1	400	整穴 炭化物	クスノキ科	破片	0.3×0.3cm	
2-1	S10	B	SK13(S13内)	1350	古墳壺穴内土塊 炭化物	サクラ属	丸木? 直径0.8cm		
2-2	S10	B	SK13(S13内)	1350	古墳壺穴内土塊 炭化物	クリーコナラ属コナラ節	丸木? 直径0.3cm		
2-3	S10	B	SK13(S13内)	1350	古墳壺穴内土塊 炭化物	コナラ属コナラ節	破片	0.5×0.5cm	
2-4	S10	B	SK13(S13内)	1350	古墳壺穴内土塊 炭化物	コナラ属コナラ節	破片	0.5×0.6cm	
2-5	S10	B	SK13(S13内)	1350	古墳壺穴内土塊 炭化物	クリーコナラ属コナラ節	破片	0.3×0.5cm	
3-1	SI1	B	SI4 炭化物範囲	1800	狹生整穴 炭化物	カヤ	破片	1.5×0.5cm	
3-2	SI1	B	SI4 炭化物範囲	1800	狹生整穴 炭化物	モミ属	破片	1.0×0.4cm	
3-3	SI1	B	SI4 炭化物範囲	1800	狹生整穴 炭化物	クリーコナラ属コナラ節	破片	1.0×0.8cm	
3-4	SI1	B	SI4 炭化物範囲	1800	狹生整穴 炭化物	クリーコナラ属コナラ節	破片	0.8×0.8cm	
3-5	SI1	B	SI4 炭化物範囲	1800	狹生整穴 炭化物	イネ科草本 (種)	丸木 直径0.8cm		
4-1	SI2	B	SI4床面 壺の中の土	2150	狹生整穴 炭化物	カヤ	破片	1.0×0.6cm	PLD-51330
4-2	SI2	B	SI4床面 壺の中の土	2150	狹生整穴 炭化物	モミ属	破片	0.6×0.3cm	
4-3	SI2	B	SI4床面 壺の中の土	2150	狹生整穴 炭化物	コナラ属コナラ節	破片	0.5×0.5cm	
4-4	SI2	B	SI4床面 壺の中の土	2150	狹生整穴 炭化物	クリーコナラ属コナラ節	破片	0.3×0.2cm	
4-5	SI2	B	SI4床面 壺の中の土	2150	狹生整穴 炭化物	イネ科草本 (種)	丸木 直径0.5cm		
5	S15	C	S08	200	溝状遺構 炭化物	イネ科草本 (種)	破片	0.2×0.2cm	PLD-51331
6-1	S16	C	S09 土層No. 5	10	溝状遺構下層 炭化物	コナラ属クスギ節	破片	0.2×0.2cm	
6-2	S16	C	S09 土層No. 5	10	溝状遺構下層 炭化物	コナラ属クスギ節	破片	0.2×0.1cm	
6-3	S16	C	S09 土層No. 5	10	溝状遺構下層 炭化物	ケヤキ	破片	0.2×0.2cm	
6-4	S16	C	S09 土層No. 5	10	溝状遺構下層 炭化物	ケヤキ	破片	0.2×0.2cm	
6-5	S16	C	S09 土層No. 5	10	溝状遺構下層 炭化物	ケヤキ	破片	0.2×0.2cm	
7	RT	C	SS1東端部 掘り込み	8,35	縦敷遺構の礎	ヒノキ科	破片	0.5×0.5cm	PLD-51332



図版1 炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (1)

1a-1c. モミ属 (分析No. 3-2)、2c. モミ属 (分析No. 4-2)、3a-3c. ヒノキ科 (分析No. 7)、4a-4c. カヤ (分析No. 3-1)、5c. カヤ (分析No. 4-1)、6a-6c. クスノキ科 (分析No. 1-1)、7a-7b. サクラ属 (分析No. 2-1)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面



図版2 炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (2)

7c. サクラ属 (分析No. 2-1)、8a-8c. ケヤキ (分析No. 6-3)、9a-9c. コナラ属クスギ節 (分析No. 6-1)、10a-10c. コナラ属コナラ節 (分析No. 2-4)、11a. コナラ属コナラ節 (分析No. 4-3)、12a-12c. クリーコナラ属コナラ節 (分析No. 2-2)、13a. イネ科草本 (分析No. 1-2)、14a. イネ科草本 (分析No. 3-5)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

### 第3節 伊勢町遺跡（幸町 1188-22 他地点）から出土した炭化種実

バンダリ スタルシャン（バレオ・ラボ）

#### 1. はじめに

山梨県甲府市に所在する伊勢町遺跡（幸町 1188-22 他地点）において、弥生時代中期から古墳時代とされる遺構の土壌より得られた炭化種実の同定結果を報告し、当時利用された種実について検討した。

#### 2. 試料と方法

分析試料は、いずれも水洗選別後に抽出済みの7試料である。試料は、弥生時代中期の遺構とされる竪穴 S14 の床面の甕の中の土から採取された1試料と、古墳時代前期の遺構とされる竪穴 S11、竪穴 S13 の焼土 1、竪穴内土坑 SK16（S13 内土坑）、竪穴内土坑 SK13（S13 内）、溝状遺構 SD1 下層の土層 No.6 から採取された5試料、時期不明の溝状遺構 SD8 から採取された1試料である。

土壌の採取から水洗、種実の抽出までの作業は、昭和測量株式会社によって行われた。水洗には最小 1.0mm 目の篩が用いられた。各試料の水洗量については、表 1 を参照されたい。種実の同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行い、写真撮影は実体顕微鏡で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。また、計数が困難な微細な炭化材の破片は、記号 (+) で示した。同定された試料は、甲府市教育委員会に保管されている。

#### 3. 結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のクリ炭化果実のみ 1 分類群、草本植物ではイネ炭化種子（穎果）とノブドウ炭化種子の 2 分類群の、計 3 分類群が確認された。炭化種実以外には、不明の炭化材が含まれていたが、同定の対象外とした。（表 1）。

表1 伊勢町遺跡から出土した炭化種実（括弧内は破片数）

試料No.	S1	S2	S5	S6	S10	S12	S15		
調査区	A			B			C		
遺構	竪穴	竪穴内土坑	溝状遺構	竪穴	竪穴内土坑	竪穴	溝状遺構		
	S11	SK16 S13内土坑	SD1下層 土層No.6	S13焼土1	SK13 S13内	S14床面 甕の中の土	SD8		
時期	-			古墳時代前期		弥生中期			
分類群	部位/水洗量 (cc)		400	1200	1200	100	1350	2150	200
クリ	炭化果実		(15)						
イネ	炭化種子 (穎果)		(8)	1	(5)	(3)	(6)		
ノブドウ	炭化種子								(7)
不明	炭化材								(+)

+: 1-9

以下に、出土した炭化種実について、時期ごとに、遺構別に記載する。

##### [弥生時代中期]

竪穴 S14 床面 甕の中の土：イネがわずかに得られた。

##### [古墳時代]

竪穴 S11：イネがわずかに得られた。

竪穴 S13 焼土 1：同定可能な種実は得られなかった。

竪穴内土坑 SK16（S13 内土坑）：クリが少量、イネがわずかに得られた。

竪穴内土坑 SK13（S13 内）：イネがわずかに得られた。

溝状遺構 SD1 下層 土層 No.6：イネがわずかに得られた。

[時期不明]

溝状遺構 SD8：ノブドウがわずかに得られた。

次に、産出した炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名や順番については米倉・榎田（2003-）に準拠し、APG Ⅲリストの順とした。

(1) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 炭化果実 ブナ科

完形ならば側面観は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。底面にある殻斗着痕はざらつくが、残存していない。残存高 7.6mm、残存幅 6.5mm。

(2) イネ *Oryza sativa* L. 炭化種子（穎果） イネ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の 2 本の浅い溝がある。長さ 4.3mm、幅 2.8mm。

(3) ノブドウ *Ampelopsis glandulosa* (Wall.) Momiyama var. *heterophylla* (Thunb.) Momiyama 炭化種子  
ブドウ科

完形ならば、上面観は円形、側面観はほぼ円形。背面のカラザはへら状だが、残存していない。腹面には深く長い溝が 2 本あるが、残存しているのは 1 本のみ。残存長 1.5mm、残存幅 1.9mm。

#### 4. 考察

弥生時代中期の遺構とされる竪穴 SI4 の床面の裏の中の土からは、栽培植物のイネが得られており、食用とするために裏に保管されていた可能性がある。イネが炭化して産出している状況から判断して、火災などで炭化した可能性が考えられる。

古墳時代前期の遺構とされる竪穴内土坑 SK16 (SI3 内土坑) からは、栽培植物のイネと、野生植物で食用として利用可能な堅果類のクリが産出した。クリ炭化果実は、食用となる子葉を取り出したのちに、不要な果実の破片が燃やされ、竪穴内土坑に堆積した可能性がある。竪穴内土坑 SK16 と竪穴内土坑 SK13、竪穴 SI1、溝状遺構 SD1 下層からは、栽培植物のイネが得られており、保管されていた米がなんらかの要因で炭化して堆積した可能性がある。

時期不明の溝状遺構 SD8 からは、野生植物のノブドウが得られた。ノブドウは利用されない分類群であり、偶発的に炭化して SD8 に堆積した可能性がある。

#### 引用文献

米倉浩司・榎田 忠（2003-）BG Plants 和名-学名インデックス (YList), <http://ylist.info>



図版1 伊勢町遺跡から出土した炭化種実

1. クリ炭化果実（竪穴内土坑SK16, No. S2）、2. イネ炭化種子（竪穴内土坑SK16, No. S2）、3. ノブドウ炭化種子（溝状SD8, No. S15）

## 第4節 伊勢町遺跡（幸町1188-22他地点）出土の動物遺体

三谷智広（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

伊勢町遺跡(幸町1188-22他地点)の発掘調査において、遺構から骨と思われる試料が出土した。ここでは、これらの試料の所見を示す。

### 2. 観察所見

骨と思われる試料が出土したのは、試料番号S11、S12、S15、S17、R7である。いずれも細片となっており、特にS17、S11、S12、S15の試料は、微細な破片であった。実体顕微鏡による観察から、いずれも骨表面の緻密質と思われた。また、色調は白色ないし灰色を呈しており、強い火を受けたと考えられる。

表1 伊勢町遺跡出土試料の観察結果

試料番号	調査区	出土地点	取上No.	分類群	状態	点数	備考
S11	B	S14炭化物範囲		不明	微細破片	1	焼骨
S12	B	S14床面 甕の中の土	2	不明	微細破片	4	焼骨
S15	C	SD8		不明	微細破片	2	焼骨
S17	C	SS1		不明	破片	21	焼骨
R7	C	SS1 東端部掘り込み	竊④	不明	破片	3	焼骨

## 第6章 総括

伊勢町遺跡（幸町 1188-22 他地点）の発掘調査では、主に弥生時代中期と古墳時代前期の遺構と遺物を確認した。それぞれの成果をまとめ総括とする。

### 第1節 伊勢町遺跡（幸町 1188-22 他地点）の礫敷遺構

C地区南東部で礫敷遺構を1基検出した。礫敷遺構の平面形は長方形を呈し、掘方の規模は長軸2.1m、短軸80cmである。礫敷部分のみでは長軸推定1.8m、短軸60cmである。軸方向はN-85°-Wで、ほぼ東西方向の軸線に沿っている。礫敷遺構の遺構検出面は地山のIV層上面で、直上まで擾乱を受けていた。礫敷の上に遺物包含層はほとんど遺存していなかったが、礫敷の遺存状態は良好であった。礫敷は西端部分と東端部分にはそれぞれ径10～20cmと大きめの礫が詰まっており、中央部分は径3～5cmの小礫がほぼ隙間無く敷き均されていた。いずれも角の取れた丸い礫である。掘方は西端部分と東端部分の大礫が詰まっていた部分に掘り込みがあり、中央部分は、小礫を除去した平坦面がほぼ掘方の底面である。現場調査時に遺物は出土しなかった。



第37図 長野県中野市柳沢遺跡の礫床木棺墓群

礫は位置を記録して全て取り上げ、土のう袋に収納して持ち帰った。水洗フルイしたが、土器や玉などの遺物は採取できなかった。

また、礫敷遺構に隣接して周溝状に巡る溝状遺構を検出している。位置関係からは礫敷遺構に伴う遺構とも考えられる。溝状遺構からは1点のみ土器片（遺物番号108）が出土しており、弥生時代中期の遺物と推定している。

以上のように礫敷自体の検出状況は良好であったものの、出土遺物はなかった。遺構の重複もなく、遺構の時期や性格を決定づける直接的な材料に欠けるが、今回の調査区全体では、弥生時代中期後半の栗林式土器に比定できる資料が一定量出土している（第38図）。周溝状の溝状遺構からも弥生時代中期の土器が出土しており、ここでは伊勢町遺跡の礫敷遺構の時期や性格の検討材料として、礫床木棺墓の事例を取り上げておきたい。

礫床木棺墓は、底面に礫を敷き詰め、そこに木棺を設置する形態の墓である。長野県北部を中心に広がる栗林式土器文化圏にみられる墓制で、長野県外では群馬県でも発見されている。

第37図は長野県中野市柳沢遺跡で検出された礫床木棺墓群である。図示した6A区では18基の礫床木棺墓が検出



されている。また、墓群をとり囲むように南周溝と北周溝が弧状に巡り、その検出規模は南北15m、東西10mを測る。墓群の周囲は無遺構地帯となっており、墓群の構造が推測可能な状況である。埋葬部の規模は、Ⅰ類(長さ150～174cm・幅50～70cm)が3基、Ⅱ類(長さ130～150cm・幅50～70cm)が6基、Ⅲ類(長さ74～100cm・幅45～50cm)が4基で、他は計測不能である。主軸方向は南北軸、東西軸を向くものが多い。副葬品としては1号礫床木棺墓で菅玉101点、6号礫床木棺墓で菅玉1点、9号礫床木棺墓で菅玉27点、16号礫床木棺墓で菅玉3点が出土している。出土位置に偏りがあり、頭から胸にかけての着装品の可能性を指摘している。また、土器が出土している礫床木棺墓は5基である。一方で玉類も土器も出土しなかった礫床木棺墓が10基ある。人骨は出土していない。遺構の時期は、栗林2式古段階以降に造墓が開始されたと考えられている。また、墓群内で栗林3式の土器が出土し、墓群を覆うⅣ層から弥生時代後期の吉田式～箱清水式土器が出土することから、造墓期間が長期にわたる可能性もあるとしている。

長野県松本市横田古屋敷遺跡の第1次調査では、4基の礫床木棺墓が見つかった。土坑規模として計測されている埋葬部の規模は、墓1からそれぞれ長軸2.3m、2.3m、2.2m、2.6mである。各墓坑から遺物や焼けた骨片が出土している。特に墓4では、約2kgの骨片が採集されており、分析の結果、小児・壮年・熟年など少なくとも3体以上の人骨が含まれていた。さらに人骨は白骨化させた後に焼かれた可能性が指摘される。また、玉類は出土していないが、墓3で土製耳飾が出土している。周溝状の遺構についての記載はなく、平面図上も確認できない。遺構の時期は弥生時代中期後半としている。

群馬県熊谷市前中西遺跡の2012・2013年の調査でも、4基の礫床木棺墓が検出された。各礫床木棺墓の埋葬部の規模は第1号礫床木棺墓からそれぞれ長軸2.71m、1.31m、1.91m、1.93mを測る。礫床木棺墓群の周囲に溝跡も確認されているが、礫床木棺墓群に伴うものかは不明としている。遺物は第1・3号礫床木棺墓より菅玉が161点出土している他、第2号礫床木棺墓から弥生時代中期後半に属する土器小片が出土している。遺構の時期は弥生時代中期後半から未と推測している。

以上の事例と伊勢町遺跡の礫敷遺構を比較すると、平面形はいずれも長方形で、掘方の両端部に掘り込み(小口痕と報告されている)があることは共通している。規模は柳沢遺跡のⅠ類相当で、他の2遺跡の例とも大きな差はない。遺物は副葬品の有無が問題となるが、柳沢遺跡をはじめ、むしろ副葬品を伴わない事例の方が多い。また、横田古屋敷遺跡では焼かれた人骨が出土しているが、伊勢町遺跡でも小片のため人骨かどうかは不明だが焼骨が出土している(第5章第4節)。柳沢遺跡で検出されている周溝状遺構は伊勢町遺跡でも検出した。弥生時代中期中葉に位置付けられる土器が出土しており、掘方底面の標高は礫敷遺構の掘方底面とほぼ同じで、共存する遺構の可能性は高いと考えている。

伊勢町遺跡の礫敷遺構では時期を特定できる遺物がなかった。礫の水洗フルイでも遺物は採取できず、採取できた炭化材の年代測定の結果は縄文時代晩期から弥生時代前期に相当する年代を示した(第5章第1節)。また、礫敷の直上が攪乱されており、上面を覆う土層に包含する遺物や上部構造も確認できていない。山梨県内ではおそらく未報告の事例であり現状では「礫床木棺墓」の用語は用いず「礫敷遺構」として報告することとした。ただし、礫床木棺墓とすることを否定する材料はなく、また、礫床木棺墓であれば「群」であるはずで今後周辺の調査で検出される可能性は高い。

## 第2節 伊勢町遺跡(幸町1188-22他地点)の遺構変遷と出土遺物

伊勢町遺跡(幸町1188-22他地点)の発掘調査では、竪穴建物4軒、礫敷遺構1基、溝状遺構11条、土坑21基、ピット29基、不明遺構1基を確認した。主に弥生時代中期と古墳時代前期の遺構と遺物を検出しているが、遺構変遷と出土遺物について整理しておきたい。なお、出土遺物について弥生時代は『山梨県史』と『長野県史』、古墳時代は小林健二(小林2010・2015)の編年を参考とした。

### 弥生時代中期(第2・38図)

弥生時代中期でもっとも古い時期に位置付けられるのはSX2やSD6か。縄文を地文に沈線文を施す資料(108・174・188)が出土しており、弥生時代中期中葉と考えている。SX2では縄文の地文に連弧文を施す

壺(174)や内外面赤彩する鉢(175)、台付土器(176)、手づくねの蓋(177)、磨製石鏝(178)などが出土した。SX2では検出時に炭化物の広がりや遺物を多く確認した。床面や炉などを検出できず性格不明としたが、竪穴建物であった可能性がある。また、SX2に重複、あるいは近接するSK6~10などでも弥生時代中期の遺物が出土しており、切り合いでは、SX2がもっとも古い時期に属する遺構である。SD6では壺の体部破片(108)が1点のみ出土した。縄文の地文に太描きの沈線を施す。SD6は磯敷遺構に共存する可能性がある周溝状の遺構である。

弥生時代中期後半に位置付けられるのはSK6・8・9・10などである。栗林式土器に比定される土器が出土している。SK6出土の壺(150)の口縁部は縄文の地文に波状沈線を施す。SK8出土の甕(158)は櫛描波状文を施す。SK10では櫛描きの波状文と羽状文を施す甕(160)と壺(161)が出土し、扁平片刃石斧(162)とみられる石器も出土している。また、SD1やSP4の出土遺物に栗林式土器の典型例がある。頸部に横走沈線を施す壺(92・93・94・168)や櫛描の格子目状文を施す甕(99)、櫛描波状文と羽状文を施す甕(169)などが出土しているが、これらは遺構の底面を掘り抜いて下層に帰属する遺物を取り上げた可能性が高く、SD1とSP4の遺構の時期は古墳時代前期である。

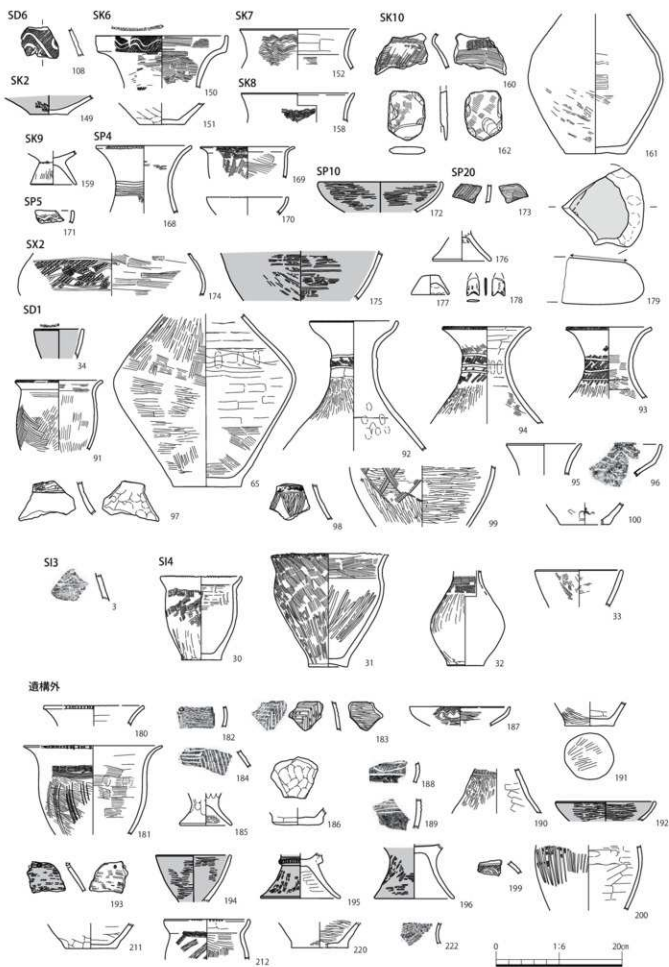
弥生時代中期末葉に位置付けられるのはSI4である。甕(30)は頸部から体部にかけて櫛描波状文、口縁部には刻目を施す。壺(32)は櫛描きの簾状文と波状文が施される。いずれも竪穴建物の床面直上で出土しており、30・31の甕は逆位で据えられていた。遺構の時期も中期末葉と考える。

#### 古墳時代前期(第2・39図)

古墳時代前期ではSD9・10がもっとも古い時期に属する遺構か。出土遺物には口縁部には縄文で刻目を施す甕(111)があり、S字状口縁台付甕(112)は口縁部の刺突はないが肩部にヨコハケがある。折り返し口縁壺(117)など弥生時代後期に位置づけられそうな遺物もあり、図示した古墳時代前期の土器群の中でもっとも古い段階と考える。なお、SD10はV字形の断面形を呈す溝である。図示できる遺物はなかったが、切り合いではSD9より古く、埋没は古墳前期であるが、開削時期は古墳前期以前にさかのぼる可能性があると考えている。その次の時期に属するのはSI3か。第39図では同様な時期の遺物としてSD9・10上面(遺物包含層)の出土遺物も挙げた。台付甕(6・120)は肩部にヨコハケを施し、器台には多孔器台(24・140)や外反口縁小型器台(19・137)などがある。なお、SD9・10上面出土のヒサゴ壺(132)はやや古い段階である。古墳時代前期でもっとも新しい段階に位置付けられる遺構はSD1である。台付甕(36・49)は肩部のヨコハケがあるものとなないものが混在し、土師器の高坏(86・88)には脚部が柱状のものがある。

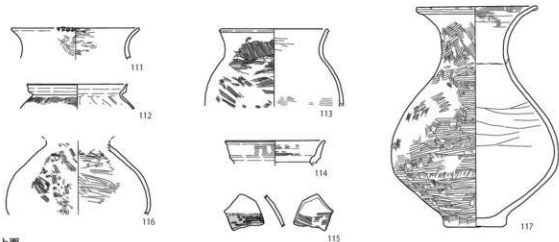
#### 引用・参考文献

- 長野県 1988『長野県史』考古資料編 全1巻(4)遺構・遺物  
甲府市市史編さん委員会 1989『甲府市史』史料編第一巻 原始・古代・中世  
山梨県教育委員会 1997『油田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第130集  
山梨県 1999『山梨県史』資料編2 原始・古代2  
東海大学校地内遺跡調査団 2000『王子ノ台遺跡 第三巻 弥生・古墳時代編』  
小林 健二 2010「古墳時代における甲斐の地域社会」『山梨県考古学協会誌』第19号  
長野県埋蔵文化財センター『中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100  
松本市教育委員会 2012『長野県松本市 横田古原敷遺跡 第1・2号発掘調査報告書』松本市文化財調査報告No.209  
埼玉県熊谷市前中西遺跡調査会『前中西遺跡Ⅰ』熊谷市前中西遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書  
小林 健二 2015「甲斐の古墳時代と土器」『山梨県考古学協会誌』第23号  
公益財団法人山梨文化財研究所 2018『朝気遺跡』甲府市文化財調査報告 97  
長野県立歴史館『稲作とクニの誕生—信州と北部九州—』  
昭和測量株式会社 2022『塚越遺跡』甲府市文化財調査報告 129  
甲府市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所 2022『食糧工場遺跡(遠光寺東交差点改良工事地点)』

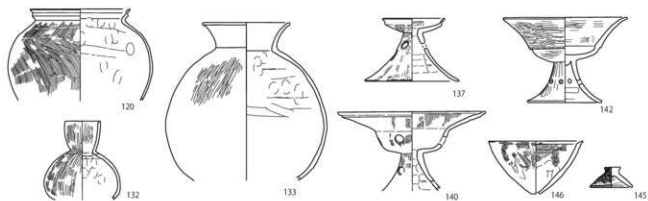


第 38 図 伊勢町遺跡出土の弥生時代の遺物

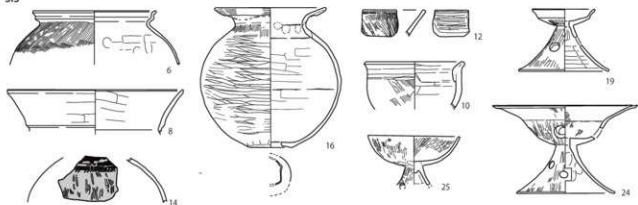
SD9



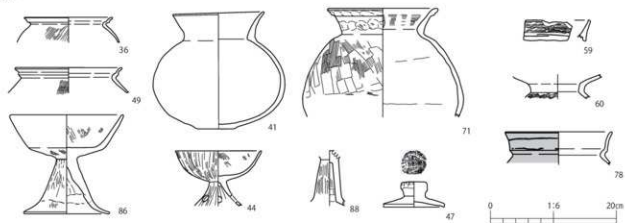
SD9・10上面



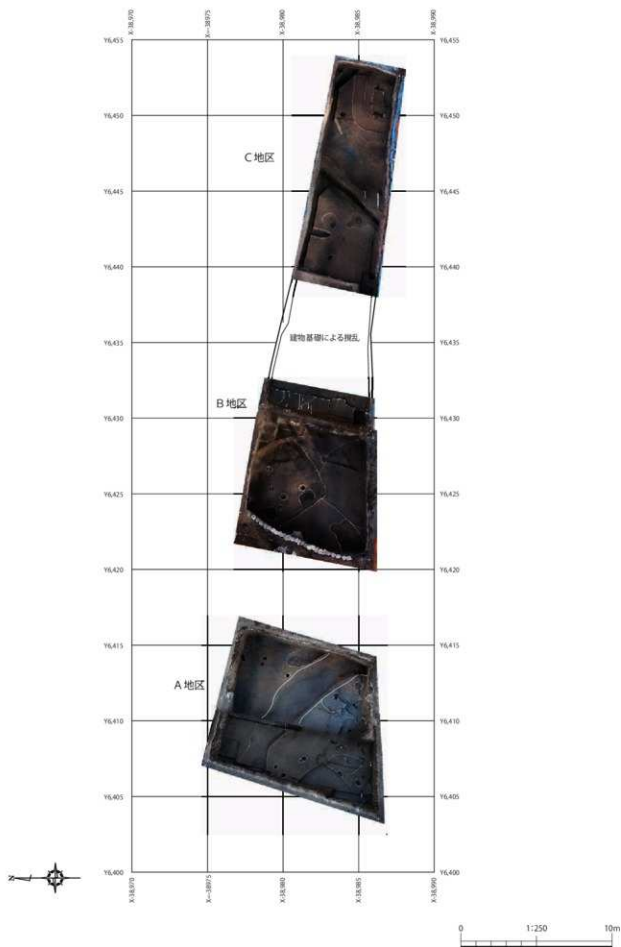
S13



SD1



第 39 図 伊勢町遺跡出土の古墳時代の遺物



伊勢町遺跡(幸町1188-22他地点) 全体モザイク写真

図版 2



A西地区遺構検出状況(第1面) 東から



A西地区完掘状況(第1面) 東から



A西地区遺構検出状況(第2面) 南から



A西地区完掘状況(第2面) 南西から



A東地区遺構検出状況(第1面) 南東から



A東地区完掘状況(第1面) 南東から



A東地区遺構検出状況(第2面) 南東から



A東地区完掘状況(第2面) 北東から



B西地区道構検出状況(第1面) 東から



B西地区道構検出状況(第1面) 南東から



B西地区道構検出状況(第2面) 北東から



B西地区道完掘状況(第2面) 北東から



C地区道構検出状況(第1面) 西から



C地区完掘状況(第1面) 西から



C地区道構検出状況(第2面) 西から



C地区完掘状況(第2面) 西から

図版 4



S11 炭化物・硬化面検出状況 東から



S11 床面検出状況 東から



S11 セクション 南西から



S11 完掘状況 東から



S12 検出状況 北東から



S12 検出状況 南から



S12 セクション 北から



S12 完掘状況 南西から





S13 上層遺物出土状況 東から



S13 上層遺物出土状況 (遺物No24) 東から



S13 床面検出状況 東から



S13 セクション 南東から



S13 掘方完掘状況 南東から



S14 床面検出状況 北東から



S14 弥生土器出土状況 (遺物No.30) 東から



S14 弥生土器出土状況 (遺物No.32) 東から



S14 断割 南西から



S14 完掘状況 北東から



SS1・SD6 検出状況 東から



SS1礫敷・SD6 検出状況 東から



SS1・SD6 検出状況 北から



SS1礫敷・SD1 検出状況 西から



SS1 礫敷検出・SD6 セクション 南から



SS1 礫敷検出・SD6 セクション 西から



SD6 セクション 西から



SD6 遺物出土状況 (遺物№108) 出土状況 西から

図版 8



SS1 礫敷検出状況 東から



SS1 礫敷検出状況 北から



SS1 礫敷検出状況 西から



礫敷サンプル採取状況



SS1 礫敷断削 北東から



SS1 礫敷断削 北から



SS1・SD6 完掘状況 東から



SS1・SD6 完掘状況 北から



SD1 セクション (A 東地区) 南東から



SD1 上層遺物出土状況 西から



SD1 完掘状況 (A 西地区) 西から



SD1(A 東地区) 完掘状況 南東から



SD1 弥生土器出土状況 (遺物№92・94) 南から



SD2 セクション 東から



SD3 遺物出土状況 (遺物No105・106) 東から



SD4 遺物出土状況 (遺物No107) 東から



SD5 セクション 西から



SD7 発掘状況 南から



SD8 遺物出土状況 (遺物No109) 西から



SD8 発掘状況 南から



SD11 発掘状況 北から



SD9・10 上面遺物出土状況 東から



SD9・10 セクション 北から



SD9 遺物出土状況 (遺物№116・117) 北から



SD10 南壁 北から



SD9・10 発掘状況 南西から



SK1 セクション 南西から



SK6 完掘 北から



SK1・SK2 セクション 北東から



SK7 完掘 北東から



SK2 遺物出土状況 西から



SK7・SK9・SK2 完掘 西から



SK9・10 セクション 北東から



SK9 遺物出土状況 (遺物№159) 北から





SK10 石器出土状況 (遺物No162) 北から



SK13(SI3内) セクション 南から



SK14 セクション 東から



SK16(SI3 掘方) 遺物出土状況 北から



SK17 セク (SI3 掘方) 北から



SK18 セクション 東から



SK18 完掘状況 東から



SK20 セクション・遺物出土状況 (遺物No167) 西から



SP1(S11内)完掘 南から



SP2(S11内)完掘 北から



SP4 遺物出土状況 (遺物No168) 西から



SP5 遺物出土状況 (遺物No171) 北から



SP8 セクション 北西から



SP10 遺物出土状況 (遺物No172) 北から



SP23 セクション 南から



SP25(S13掘方)セクション 南から



S13



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29

SI4



30



31



32



33

SD1



34



35



36



37



38



39



40



41



42

SD1



SD1



SD1





SD8



SD9



SD9·10 上面



118



120



119



121



122



123



124



125



126



127



128



129



130



131



132

SD9·10 上面



SK2



SK6



SK7



SK8



SK9



SK13



SK17



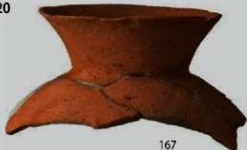
SK10



SK18



SK20



SP4



168



169

SP5



170



171

SP10



172



SP20



173

SX2



174



175



176



177



178



179

遺構外



180



181



183



184



185



182



186



187



188



189



190



191

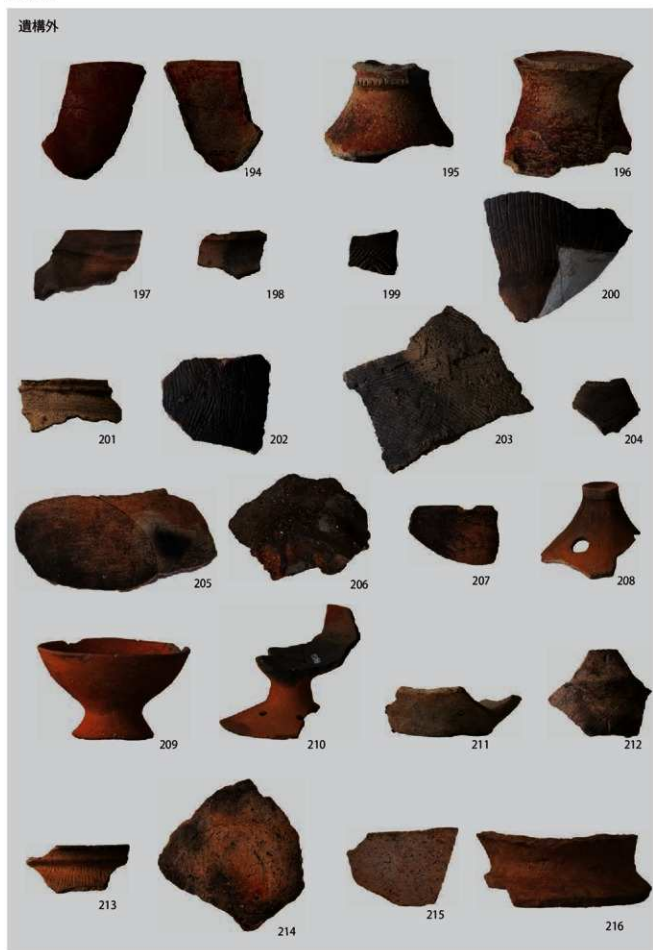


192

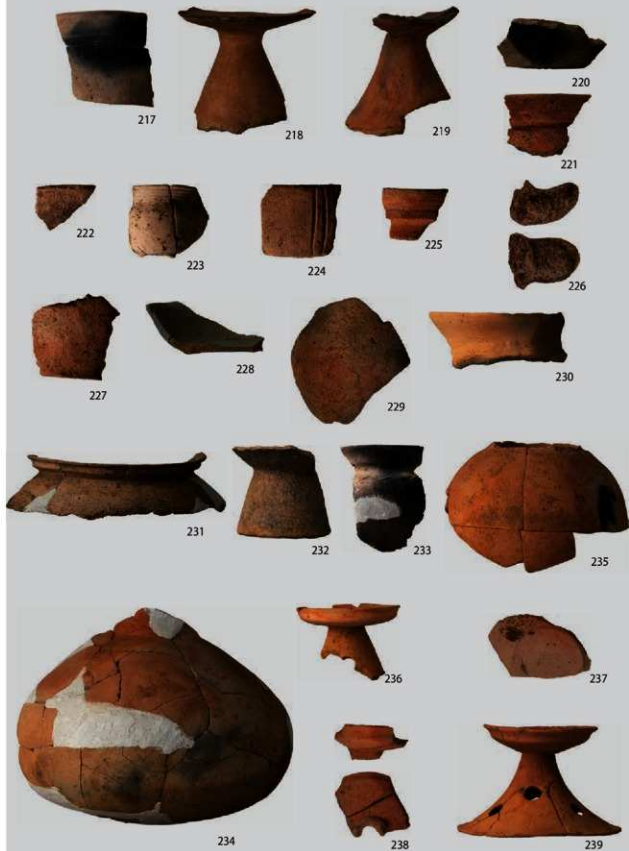


193

遺構外



## 遺構外



# 報告書抄録

ふりがな	いせちよういせき(さいわいちよう1188-22ほかてん)
書名	伊勢町遺跡(幸町1188-22他地点)
副書名	都市計画道路太田町蓬沢線外2路線街路事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	136
編著者	泉 英樹・平塚洋一・伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・黒沼保子・パンダリ スタルシャン・三谷智広
編集機関	昭和測量株式会社
所在地	〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号 TEL055-235-4448
発行年月日	2024(令和6)年3月22日

ふりがな	ふりがな	コード			世界測地系	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	道路番号	北緯	東経			
いせちよういせき	やまなしけんこうふし さいわいちよう 1188-22ほか	19201	185	35° 38'55"	138° 34'16"	20221107 ~20230310	338㎡	道路建設
伊勢町遺跡	山梨県甲府市 幸町1188-22他							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊勢町遺跡	集落跡	弥生・古墳	竪穴建物・礫敷遺構・溝状遺構・土坑など	弥生土器・土師器・須恵器・石器・石製品	弥生時代中期の竪穴建物、古墳時代前期の竪穴建物と溝状遺構などを検出した。また、弥生時代と推定される礫敷遺構を1基検出している。

要約	<p>弥生時代中期では竪穴建物1軒を検出した。床面では硬化面と炭化物の広がりを検出した他、逆に据えられた状態で裏が2点出土している。また、調査区全体で山梨県内としては出土量が少ない栗林式に比定される土器が一定量出土している。さらに周溝を伴うとみられる礫敷遺構を1基検出している。平面形は長方形を呈し、礫の範囲は長軸1.8m、短軸60cmを測る。両端部は径10~20cmの大礫、中央部は3~5cmの小礫が敷き詰められていた。出土遺物はなく時期は不明だが、弥生時代中期の長野県北部を中心に広がる栗林式土器の文化圏内で多くみつまっている礫床木棺墓と同様の形態である。</p> <p>古墳時代前期では竪穴建物3軒と溝状遺構を検出した。溝状遺構では、断面形がV字形を呈し、底面の幅が25cmと狭くなるものが検出された。開削時期は古墳時代前期以前にさかのぼる可能性もある。</p>
----	--

甲府市文化財調査報告136

## 伊勢町遺跡

幸町1188-22他地点

一都市計画道路太田町蓬沢線外2路線街路事業に伴う発掘調査報告書一

2024(令和6)年3月22日 発行

編集 昭和測量株式会社

〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号

TEL 055-235-4448

発行 甲府市教育委員会・昭和測量株式会社

印刷 株式会社内田印刷所